

矢島さら

テイルズ オブ シンフォニア

ラタトスクの騎士

果てない想い 下

SPECIAL STORY

ファミ通文庫

矢島さら

Sara Yajima

横浜市生まれ。ゲームノベライズを中心に、ファンタジー小説やエッセイなど、幅広いジャンルの執筆を手掛ける。また、カエルを心から愛してやまない「かえる友の会」会員として、精力的に活動中。主な著書に『テイルズ オブ』シリーズ（エンターブレイン）、『まきこママの通販推理生活』（ベネッセ）、『ガーコとケロタン』（世界文化社）他多数。
http://sarah.m78.com/

株式会社バンダイナムコゲームス
奥村大悟

Daigo Okumura

『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-』、『テイルズ オブ ザ ワールド～サモナーズ リネージ～』など『テイルズ オブ』シリーズのキャラクターデザインを数多く手掛けたほか、テレビアニメ『エレメントハンター』ではキャラクター原案を担当。ファミ通文庫『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-世界（とき）の願い』（全3巻）のイラストも手掛けている。

カバーイラスト　株式会社バンダイナムコゲームス 奥村大悟

テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-

果てない想い下

矢島さら

FB
Famitsu Bunko

ファミ通文庫


Tenebrae
Marta
Aster
Collet
Richter



テイルズ オブ シンフォニア

TALES OF SYMPHONIA

ラタトスクの騎士

果てない想い 下

Contents



テイルズ オブ シンフォニア−ラタトスクの騎士−

果てない想い㊦

矢島さら

ファミ通文庫

口絵・本文イラスト　株式会社バンダイナムコゲームス　奥村大悟

第二話　リヒター・アーベント

ほんのときおり、額（ひたい）が疼（うず）くような独得の感覚がある。
リヒター・アーベントはそっと指で触れてみて、そこにラタトスク・コアが埋まっているのを再確認する。
精霊ラタトスクがこのギンヌンガ・ガップを去ってしばらくは違和感が消えなかったが、もうずいぶん慣れた。
あれから、どれくらいの時が過ぎたのだろう。
コアと分かれた実体のラタトスクはあの世界に戻り、少年エミル・キャスタニエとして、マルタ・ルアルディたちと共にヒトの短い一生を過ごしているはずだった。
もしかしたらこの疼くような感覚はエミルの感情と呼応（こおう）しているのかもしれない、とリヒターは考える。
ラタトスクがエミルとして、アステルのかわりに生きていると思いたいのは、都合のいい話だとわかっている。
だがそれはギンヌンガ・ガップに人柱（ひとばしら）として、そしてコアの宿（やど）り木（ぎ）として閉じこめられた彼にとっての唯一の救いなのだった。
ここでは何も起こらない。時間の流れも感じることはない。扉の向こう――魔界ニブルヘイムの魔族たちも、いまのところは静かなものだ。
――一〇〇〇年だ。

リヒターの脳裏に、ラタトスクの声が甦る。

――全ての命あるものからマナを切り離すのに一〇〇〇年かかる。一〇〇〇年が過ぎ、マナで世界を支える必要がなくなれば、余ったマナで新たな封印を構成できる。そのときには、おまえを解放してやる。

(魔族に魂を売り、世界を破滅させようとした男にとっては、ありがたい言葉というべきだな……)

リヒターは唇の端で微笑むと目の前に広がる暗い空間に視線を投げ、かつての親友に思いを馳せた。

共に書物を読み、研究に没頭し、意見を戦わせ、旅をしてパンを分け合った。

差別を知らない伸びやかな心を持ち、最期には冷たい骸を預けていったアステル――。

(アステル……。いつ解放されようと、戻った世界にお前がいることはない――)

あの馬鹿なお人好しは、自分の死に場所で一〇〇〇年過ごす俺をどう思っているだろう、とリヒターは静かに目を閉じた。

※

リヒターがアステルに初めて会ったのは、テセアラの王立研究院の地下だった。

その十日ほど前、彼はハーフエルフだという理由で生まれ故郷の小さな街で捕らえられた。

エルフである父親と人間の母親。リヒターたちは家族三人で、街を抱くように迫っている山の奥にひっそりと住んでいた。

「母さんと結婚してすぐにここに移ったんだ。リヒター、おまえが安全に暮らしていけるようにな」

折りに触れ、父親は幼いリヒターにそういって聞かせた。テセアラではハーフエルフは最低の身分であり、人間に混じって生活していることが発覚すれば処刑されると決まっている。山奥に隠れ住み、野菜や果物を作って街の市場に売りに行く生活は、だからリヒターを想う両親がとったただひとつの選択肢だったのだ。

両親は決してリヒターを街には連れて行こうとしなかった。幼いリヒターをひとり山奥の家に残しておく危険よりも、ハーフエルフであることが発覚することを、彼らは恐れたからだ。

リヒターは山の生活で、自然と一体になって成長していった。山の気候のわずかな変化が動植物に与える影響を見逃さず、雨や風、霧(きり)の発生、空気のように存在しているというマナの気配をも肌で感じられるようになった。そしてハーフエルフの持ち前である賢さで、それらと世界のあらゆる仕組みとの相関性を把握するまでに、たいして時間は

かからなかったように思う。

だからあの日リヒターが街へ行きたいと思ったのは、彼の内で目覚めた強い学究心のために、自然と対話する以外のことがしてみたくなったからなのかもしれない。

父親の作る農作物は評判がよかった。母親とふたりで運べる分しか作らないので数はたいして多くなかったものの、大きさと色艶、そしてなにより濃厚な味で固定客がついているほどだった。

いつになく果物が豊作だった日に、リヒターは両親の反対を押し切って市場に同行した。街へ降りてみたかったし、重い作物を入れた籠の紐が母親の肩に食い込むのを見ていられなかったのだ。彼の背丈はとうの昔に母親のそれを抜かしていた。

市場は思ったよりも規模が大きく、賑わっていた。雨風に晒されたテントを張った店が数十軒は並んでいるだろうか。リヒターの両親と同じ農作物を扱っている店だけでも七、八軒はあった。

「やあ、息子さんかい？」

いつもの場所に父親が荷を下ろすと、斜め向かいの店の親父が声をかけてきた。作物と自家製の惣菜を売る店だ。

リヒターは「こんにちは」とだけ挨拶した。絶対によけいなことはしないと父親と約束させられていたからだが、そもそも彼は人慣れしておらず、話し方も素っ気ない。愛

想よく話を弾ませることなどとても無理だったのだ。
「なんだ、元気がないな。ちゃんと食べてるのか？」
親父は自分の売り物の中からこのあたりの特産品である紫梨（むらさきなし）を選（よ）ってリヒターに投げてよこした。小さくて、固い梨だった。
「虫なんか一匹もついてないぜ。ていねいな袋がけ。俺の信条だ」
「まあ、どうもすみません」
母親がぺこぺこと頭を下げるのを見て、リヒターはなんだか嫌な気持ちになる。
「リヒター、いただきなさい」
「紫梨ならうちの……」
籠の中にもいっぱい入っている、と父親に言いかけ、約束を思い出して梨を齧（かじ）った。
「どうだい？　うまいだろ」
親父は押しつけがましい調子で訊ねてくる。
「まずい」
リヒターは口の中の果実をペッと吐き捨てると、
「……霧の朝を待たずに袋がけしたな。梨が水を吸っていない。だから紫の発色が悪い」
と顔を顰（しか）めた。

「なんだと!?」

「リヒターやめなさい!!」

父親が彼の腕を引いたが、もう止まらなかった。どうしてせっかくの梨をこんなに貧相な姿にして平気なのかと、腹立たしかった。

「とり入れを急いだので甘味が定着していない。換金を急ぐならせめて土壌に深山胡桃(くるみ)の粉を撒(ま)くべきだった。おおかた風向きも考えていないんだろう……」

「小僧!」

親父が顔を真っ赤にして怒鳴ったとき、がやがやと女客たちが歩いてきた。

「あっ、いたいた。このおじさんのはどれもおいしいのよ」

「そうなの？　まあ、立派な紫梨！　他の店の三倍は大きいんじゃない？　なんておいしそうなのかしら。試食させてよ」

間の悪いことに女たちのひとりは父親の得意客だった。知り合いを誘って買いに来たらしい。母親が梨を剝(む)いて振る舞うと、客たちの間から歓声があがった。

「おいしい！　もう他の店の梨は食べられないわね」

「でしょう？　みずみずしくて甘いわよね」

リヒターは、こちらを睨みつけている親父の視線に気づいていたが無視していた。あとで考えれば、このとき多少の慎(つつし)みを持って親父の前からしばらく姿を消していればよ

かったのだ。
「あっ」
突然、親父が何かに気がついたように声をあげた。そしてリヒターの父親に向かって声を張りあげ出した。
「おいおい、ちょっとおかしいんじゃないか？　こんなに梨がでかくなるなんて。ひょっとしてお前たち、人間じゃなかったりしてな。野菜も果物も魔術でちょちょいのちょいとでかくしてるんじゃねえのか⁉」
「なっ、なにを馬鹿な！」
父親がうろたえたとき、
「魔術だと⁉　ハーフエルフがいるのか⁉」
人ごみを掻き分け、近づいてくる軍靴（ぐんか）の音がきこえた。
「お、王立軍……？」
母親の顔色が真っ青になる。ハーフエルフ狩りと称して、王国の兵士たちがテセアラ全土を回っていることはリヒターも知っていた。
「ハーフエルフはどこにいる！」
兵士のひとりが親父に訊ねた。
「えっ……⁉　いや、あの……俺は……言ってみただけで……」

ちょっと嫌がらせをしてやろうというだけのつもりだったのだろう。しどろもどろになりながら、親父はリヒターと父親の上に視線をさまよわせた。
「この親子か」
客たちがさーっと引いてゆく。
「逃げろリヒター！」
父親に突き飛ばされて、リヒターは市場の店が並んでいる道を走り出した。
「待てっ！」
兵士たちが武器を構えたらしく、背後で人々の悲鳴があがる。足がもつれる。それでも走らなければならない。
リヒターは、走っても走っても前へ進まない悪夢を見ているような気分で喘いだ。
（くそっ……なんでこんな……！）
初めて来た市場で、たまたまそこに兵士が通りかかった偶然を呪いたかった。だが、そんなことをゆっくり考えている余裕もない。
「止まれ！　止まらないと処分するぞ！」
すぐ近くで兵士の声がしたと思ったとき、男の悲鳴が聞こえてきた。
（ま、まさか、父さん……!?）
「あなた!?　しっかりして！　あな――」

母親らしき女の金切り声が、絶叫に変わった。
(父さん！　母さん――！)
直後、衝撃が走ったと思うと、リヒターは倒れた。

気がつくと数十人ものハーフエルフたちと一緒に見知らぬ部屋に押し込められていた。おそらくは王都メルトキオまで運ばれていたのだろう。その後、十数人だけ別室に移され、簡単な試験を受けた。
いつ処分されるのだろうと生きた心地もしなかったが、数日後リヒターひとりだけが学園都市サイバックにある王立研究院まで送り届けられたのだ。そして、死ぬまで囚われの身として過ごさなければならないことを告げられた。
十三歳だった。
あれほどまでに自分を守ろうと心を砕いてくれていた両親のことを思うと、胸が張り裂けそうだった。突然ぷつりと断ち切られた生活は、もう二度と戻っては来ない。
山奥の質素な暮らしだったが、あの家はかけがえのない場所だった。それなのにもう一生涯、つまりハーフエルフの寿命である一〇〇〇年もの間、研究院から出ることはかなわないのだ。

あの様子では両親はおそらくもう生きてはいまい。ハーフエルフを庇（かば）えば、たとえ人間でもエルフでも同罪だ。ただでさえ母親とは残り数十年しか一緒にいられないとわかっていたのに――。

王立研究院に連れて来られてから丸一日、リヒターはあてがわれた地下の部屋――部屋とは名ばかりの牢（ろう）のような空間――に、休養という名目で放っておかれた。

連れて来られたときに見た限りでは、周りに同じ造りの部屋が四、五十ほどあったろうか。そこに入れられているハーフエルフたちは、定期的に回ってくる監視員によって管理されているようだった。

彼は堅牢（けんろう）な鉄格子（てつごうし）のはまった出入り口の扉を見つめ、ひとり怒りと諦めがないまぜになった気持ちを持て余していた。これからの日々を思うと、めちゃくちゃに叫び出したくなる。が、彼はそれを持ち前の強い精神力でなんとか押さえ込んでいた。

監視員のそれとは違う静かな足音が聞こえてきたのは、二度目の夜遅くのことだった。まわりのハーフエルフたちはとっくにみな眠りについてしまっている時刻だ。

「……リヒター」

囁（ささや）くような声がした。

「リヒター・アーベント？」

「誰だ」

リヒターは板のように固いベッドに腰かけたまま、鉄格子の向こうの薄暗い通路へと問いかける。
「あ。寝ていたのなら、ごめんなさい」
ひょいと顔を覗かせたのは、意外にもまだほんの少年だった。声変わりもすんでいない。
「こんなところで眠れるか」
リヒターは鉄格子まで数歩歩くと、
「ふん、処刑人じゃなさそうだな」
と吐き捨てる。
「処刑人って？」
やや丈の長い白衣を着た金髪の少年は、首を傾げた。
「一緒に捕まっていた連中は、途中で次々いなくなった。処分されたんだろう。次は俺の番かと思ったんだ」
ずっと黙っていたせいで、誰かと話したかったのかもしれない。つい皮肉まで口にしてしまう。
「まさか、違うよ。僕はここの研究員で、アステルっていいます」
研究員と聞いて、リヒターは驚いた。

（こいつ⁉　人間のくせに、この幼さで研究員なのか）

アステルのほうは、リヒターが自分とそう変わらない年齢なのを知ってほっとしたような表情で、

「今きみの……リヒターのレポートを読ませてもらったんだ。試験で書いたでしょ、『気象が農作物にもたらす影響と実践』……。これ、すごく面白くてよく書けてた。それでどんな人なのか知りたくて飛んできちゃったんだ」

と、手に持っている紙の束をちょっと持ち上げて見せる。一瞥して、リヒターは紙の上に自分の筆跡を認めた。

「何か書けと命令されたから、天気について書いただけだ」

「……そう。僕はここで精霊の研究をしているんだ。もう二年目になる。前はメルトキオの精霊研究所っていうところにいた」

アステルは九歳で親元を離れ、いまは研究院が用意してくれた近所の宿舎からここに通っているのだと、聞かれもしないのにリヒターに話した。

「きみはなにか専門があるのかな。やっぱり気象学とか……」

無邪気に問いかけるアステルを、リヒターは思わず睨みつけた。

「俺は一昨日連れてこられて、まっすぐこの牢屋みたいな部屋にぶち込まれたままなんだ。ここがどんなところなのかも知らない。なにが専門だ！」

「……そうか、ごめん。そうだよね」
アステルは細い肩をさらに縮めるようにして謝り、
「明日の朝、くわしい話は聞けると思うけど。王立研究院はあらゆる分野の学問研究をしているところだよ。王立だから資金も潤沢なんだ。きみと同じハーフエルフもたくさん働いてる」
と、説明した。
「働かされている、の間違いだろう」
「……」
アステルは何か言いかけたが結局その言葉を飲み込むと、軽い吐息をもらす。
「突然来て、ごめんね。じゃあ」
それだけ短く言うと、少年は来たときと同じように静かに引き上げて行った。

翌朝、監視員に起こされてリヒターは目覚めた。
「出ろ」
部屋の扉は魔術の効かない技術が施された鉄でできており、特殊なスティック状の鍵

がなければ開かない。鍵は毎朝監視員によって開けられるらしい。

リヒターは監視員に同じ地下にある食堂へ連れて行かれた。それまでは部屋に運ばれた食事をとっていたので、部屋の外へ出られただけでもほっとする。

数十人が朝食をとっていたが、一見してみんなハーフエルフであることがわかる。人間用の食堂とは区別されているのだな、とリヒターは納得した。こんなにたくさんのハーフエルフたちが実際に生活しているのを一度に見たのは初めてだった。

トレイを持っていちばん端のテーブルにつくと、すでに食べ終わっていた女性がふたり、あたりの様子を窺（うかが）いながらリヒターの向かいに座った。ひとりは痩（や）せぎすで、もうひとりはハーフエルフには珍しく、ふっくらと太っている。

「おはよう。ここの食事は悪くないわよ」

「他にたいした楽しみもないしね」

ふたりは小声で囁くと、顔を見合わせて微笑みあった。

「………」

リヒターは返事もせずにカップに入ったスープ——かなり濃厚な青豆のポタージュだった——を啜（すす）る。確かに、きちんとした料理の味がした。

「私たち、似てないって言われるけど姉妹なの。こっちは姉のイーラ、私はエマよ」

と、太っているほうが自己紹介した。イーラは昆虫から採れる繊維の研究を、エマは

永久保存食品の研究に携わっているという。
「あなた、一昨日来たのよね。ゆっくり休めた？　最初はとまどうかもしれないけど、何かあれば私や姉さんに相談してね。この食堂は一応、模範的なハーフエルフしか入れないことになっているけれど、ほんの少しのお喋り（しゃべ）なら見て見ぬふりをしてもらえるから」
エマは小声で続ける。
「そのかわり、問題を起こすと部屋で食べなきゃいけなくなるのよ。くれぐれも人間には反抗しないで」
「……」
相変わらず返事もしないリヒターに、イーラは妹の袖――ふたりとも白衣を羽織っていた――を引っ張ると席を立って行った。
（ふん。おせっかいなデブめ）
リヒターは皿の上の丸パンをわし掴みにすると、がぶりと噛みついた。噛みしめると思いがけず、母親が焼いてくれたパンによく似た味が口の中に広がった。
（母さん――！）
体の奥底からなにかが溢れてきそうになる。リヒターはあわててコップの水をあおった。

食事が終わったころ、別の監視員らしき男がテーブルまで迎えに来た。おそらくはずっとリヒターを見張っていたのだろう。朝の男と同じ制服——白衣だが、縫い取りの襟章(えりしょう)がついている——を着ていた。

「リヒター・アーベント。お前の仕事場へ行くぞ。ついて来い」

リヒターは他のハーフエルフたちの視線を感じながら立ち上がる。

「わかっていると思うが、ここは全館、完全警備されている。変な気を起こしても無駄だからな。今まで逃げおおせた奴はひとりもいないんだ」

「……」

男について、階段を昇った。長い廊下の両側にはいくつもの研究室があり、ほんのちょっと拾い読みしただけでも重厚な扉のプレートに天文、化学、歴史、文学、産業、生物、娯楽芸術などの文字が見てとれた。監視員はリヒターを『自然環境研究室』と書かれた部屋に入れると、戻って行った。

研究室の中は、広々としていた。中央には作業台を兼ねた机がいくつも並べられており、壁際には書物がぎっしりと詰まった棚と見たこともない実験器具らしきものが置いてある。白衣を着たハーフエルフが三人、人間は——いなかった。研究室も人間用とハーフエルフ用にきっちりと分けられているらしい。

リヒターが突っ立っていると、いちばん年嵩(としかさ)の男が気づいてやって来た。

「リヒターだね。さっき食堂を出るとき、入って来たきみをちらりと見かけたよ。私はサミュエルだ」
「……どうも」
差し出された手を無視して、リヒターはぼそりと挨拶する。他のハーフエルフは比較的若い男女ひとりずつで、ふたりともちょっと手をあげてリヒターを迎えた。そのさりげなさの中に、リヒターは同じ境遇の者に対する気遣いを感じた。
「あれはテニーとミリだ。さて、リヒター。あれこれ言うつもりはないよ。まずは学問に没頭してくれたまえ。それがつまり、いまのきみに必要なことだと思う」
サミュエルは慈愛のこもった瞳でリヒターをじっと見つめた。かつてこの男も理不尽に捕らえられ、何もかも奪われたのだろう、とリヒターは密かに思った。
「当面はここにある資料に当たって、興味のある分野を探してくれ。どんな研究をしてもかまわない……成果はすべて上に持っていかれるがね。一昨日、きみのレポートを読んだんだが……」
彼が言葉を濁すと、机で書き物をしていたテニーが、
「ここにありますよ」
と、紙束を指さす。
「おお、やっぱり机の上にあったか」

サミュエルはほっとした声で言った。
「いや、実は昨日、ちょっと見えなくなってしまってね。いつの間に戻ってきたんだろうな」
「サミュエルが整理整頓をしないからよ。ずっとそこにあったんじゃない？」
実験器具のスイッチを入れながら、ミリが振り返って笑った。
「確かに昨日見たときはなかったんだよ」
（あいつだ……）
リヒターは、昨夜やってきた少年のことを思い出した。新入りが来ると聞いて、わざわざハーフエルフの研究室にこっそりレポートを読みに入ったのだろう。
（よほどの物好きか、学究心の塊（かたまり）か、だな）
〝すごく面白くてよく書けてた。それでどんな人なのか知りたくて飛んできちゃったんだ――〟
アステルという少年の、ややソプラノがかった声が甦る。
「二、三、質問してもいいかな。こっちへ座って」
レポートを手にしたサミュエルに促されて、
「……はい」
リヒターは椅子に腰かけた。

王立研究院での規則正しい生活は、リヒターの気持ちをほんの少しずつ変えて行った。はじめのうちは、両親との幸せな暮らしを狂おしく思い出すことも少なくなかった。

しかし、研究院にはありとあらゆる学問の種が詰まっていた。ハーフエルフを含めた者たちの研究は多岐（たき）に渡り、各研究室の扉についている分類のプレートは実は極めておおざっぱなものであることもわかってきた。

リヒターが配属された『自然環境研究室』のテニーは風媒（ふうばい）の研究をしており、ミリは各地の虹の出現率と家畜生産量との関連性についての論文をまとめるのに余念がなかった。部屋の責任者であるサミュエルは若いふたりを導きつつ、テセアラに現存する動物を水に植えて繁殖させるという、一見荒唐無稽（こうとうむけい）な試みに長年挑戦している。

この環境にリヒターが強い反応を示したのは当然のことだったろう。当面の研究課題を気象全般に関するものとし、まずはテセアラ中の水と空気を集めることにした。

驚いたことに、研究費は本当にいくら使ってもよかった。請求したサンプルは遠隔地

からもたちどころに届けられたし、資料が必要な場合は購入はもちろんのこと、王立図書館の特別非公開リストから選んで取り寄せることもできた。行動の自由を奪われてはいたが、リヒターは以前より自分が自由になった気がすることさえあった。山奥での隠遁生活では到底手に入らなかった知識の海を泳ぐとき、リヒターはいっそ研究室に住みついてしまいたいと思った。

それでも夕食後は独房のような部屋に戻らなければならない。が、本や研究室から借り出してきた論文を読んで眠ってしまえば特に辛いということもなかった。

(俺は、以前の生活を思い出すことからの逃避のために、研究にのめり込みたいだけではないのか……？)

何度か自問も繰り返したが、次第にそれも間遠くなっていった。

リヒターが事件を起こしたのは、研究院内で暮らすようになってからひと月たったころだった。彼自身、きっとこのままこの生活に慣れていくのだろう、と思い始めていた矢先のことだ。

その日の夕方、いつものようにサミュエルから資料を借り出したリヒターは、食堂に

寄らずにいったん部屋に戻ろうとした。資料を置いてから再びテニーたちと食堂で合流する予定だった。

「おい、待て」

地下へ降りる階段の手前で、彼は監視員に呼び止められた。

「何を持ってる」

「……」

「今、何を隠した」

「……気温周期に関する研究資料だけど」

見慣れない顔だなと思いながら、リヒターは答える。入ったばかりか、あるいは人間専用階から異動になった新顔かもしれない。

「別に隠してなんかない」

リヒターは綴じられた紙束をひらひらさせて見せた。

「嘘をつけ。一切の資料の持ち出しは厳禁とされている。禁を破れば即処分だ」

「馬鹿か、おまえ」

ムッとしたリヒターは、監視員を睨みつけた。

「いつもこうして室長から借り出している。部屋には俺のサインもある。さっさと行って見てくるといい。それがおまえの仕事だろ？」

「貴様……ハーフエルフの分際でっ！」
顔色を変えた監視員が、腕を振り上げかける。が、リヒターが油断なく身構えたのを見て、
「待て待て。『反逆の際魔術使用の恐れがあるため、速やかに応援を呼ぶべし』、だったな」
と口の中でつぶやき、手首に装着している通信機の非常呼び出しスイッチを入れた。
「へえ、規則通りにしか動けないって訳か」
「なんだと!?　もういっぺん言ってみろ！」
「ふん、飼い慣らされた豚め」
捨て台詞を吐いたリヒターがさっさと地下へ降りようとしたとき、監視員たちが走ってくる足音が響き渡った。リヒターはたちまちのうちに羽交い絞めにされてしまう。
「処分だ！　処分しろ！」
新顔の監視員がヒステリックに叫んだ。近くにいた研究員たちも何ごとかと出てきた。
「放せ！　サミュエル室長に聞けばわかる！」
「いいから来い！」
男たちに引きずられながらも抵抗するリヒターの視界が上下左右に激しくブレる。そのとき一瞬、眉を顰める人間たちに混じって、アステルの顔が見えた。

(あ……あいつ……!?)

だが、リヒターの記憶はそこでぷつりと途切れた。

「……リヒター、リヒター」

密やかな声に、リヒターは目を覚ました。深夜特有のシンとした空気を感じる。

(……ここは……?)

今ではすっかり見慣れた天井らしきものが目に映る。間違いない、地下の自分の部屋だった。

(そうか。監視員と揉めて……)

誰かがここに運び込んだのだろう、とリヒターは夕方の出来事を思い出した。

「リヒター?」

「アス……テルか」

リヒターはゆっくりと起き上がり、目を細めて鉄格子の扉を見る。白衣姿の輪郭が浮

かび上がっていた。
「覚えててくれたんだね。はい、これ」
アステルはリヒターのメガネを鉄格子の間から差し出してくる。
「後ろから羽交い絞めにされたとき、メガネを落としたでしょう」
「気がつかなかった」
リヒターはメガネを受け取ってかける。アステルの体温だろう、あたたかく感じられた。
「監視員が蹴っちゃって……レンズが割れてたから、医療階に行って入れ替えてもらったんだ。合わなかったらあとで調整してくれるって」
「よく見える」
リヒターはアステルの顔を初めて真正面から見た。
「いや、待てよ。おかしいな。俺、気を失って……」
「監視員がきみに特殊な電流みたいなものを流したんだよ。そういう銃があるんだ。開発したのはここの研究員なんだけど……」
「だろうな」
故郷の市場で気を失ったときもたぶん同じ武器を使われたのだろう、と、リヒターは思った。

「しかし……たぶんその直前、俺はおまえを見た気がするんだが……」
「だって僕、あそこにいたからね」
アステルは密やかに笑う。まだ幼さが見え隠れする笑顔だった。
(そういうことではなく……なぜこいつの顔だけがあんなにはっきり見えたんだろう。他の人間たちはてんでぼやけていたのに……)
リヒターは不思議に思った。
「心配しなくても大丈夫だよ」
リヒターの沈黙を勘違いしたのか、アステルは言った。
「あれからすぐにサミュエル室長に確認が取られた。資料の持ち出しに問題はなにひとつなかった。でもね」
「なんだ」
「うん。問題は豚なんだ」
アステルは豚の鳴き声を真似てみせると、くすくす笑う。
「飼い慣らされた豚、って言ったでしょう？　あれが侮辱罪にあたるとかなんとか、例の監視員がキーキーブーブー喚(わめ)いてさ。きみは一週間の独房暮らしに決まった」
「ふん」
「この部屋から出られないけど、研究も食事もちゃんとできるよ」

ここに来たばかりのとき、イーラとエマの姉妹が問題を起こすと食堂に入れなくなると言っていたのをリヒターは思い出した。ふたりとはあのあとも食事のときに顔を合わせているが、今ごろ「私の忠告を聞かなかったせいでこうなったのよ」と、妹のエマが言っていそうな気がする。
「まずいな。雨水を含んだ土壌のサンプルが届くはずなんだ。示準土（しじゅんど）にしたかったんだが……」
「よかったら僕がここに届けるよ。他に必要なものは？」
「……おまえ……」
リヒターはまじまじとアステルを見た。
「どうしてそんなにしてくれる。俺は……、ハーフエルフなんだぞ」
「僕もある種、飼い慣らされた豚だからね。というのは冗談だけど……」
アステルは、ふっと真顔（まがお）になる。
「理由がわからないんだ、差別する理由が。それだけ」
瞬きひとつしない、単純明快な答えだった。
「ふたつの事象はすべて双方向であるべきだ。片方を無理に止めれば歪（ゆが）みが出る。わかるでしょう？」
アステルは一瞬真剣な光を緑色の瞳（ひとみ）に宿したが、すぐにそれをふっと和（なご）ませる。

「昼間は研究があるから、また夜にね。いまちょっと佳境に入ってるんだ」
「精霊の研究、だったか」
「そう。きみの意見も聞きたいな」
アステルはそう言い残すと、前回と同じように静かに戻って行った。
(双方向、か。人間がハーフエルフと交わろうとする訳がない。あの監視員が聞いたらまた喚きそうだな……)
皮肉っぽく唇を歪め、リヒターはひとりやれやれと首を振る。
アステルの若さが言わせた言葉なのだろう。どのみち彼も大人になればハーフエルフを忌み嫌うようになる。たとえハーフエルフを嫌いでなくても、処世術も立派な差別の理由だということをまだ彼は知らないのだ。
リヒターは簡素なテーブルの上にメガネを置くと、再びベッドに寝転がった。
アステルが深夜ひとりでリヒターを訪ねるにあたり、『ハーフエルフ逃亡に加担しない。また、ハーフエルフに殺傷されても文句はない』という内容の誓約書を書かされていたことをリヒターが知ったのは、あとになってからのことだった。

謹慎明けに食堂に行くと、リヒターは思いがけなく他のハーフエルフたちから歓迎を受けた。むろんそれはごく控えめなものだったが、監視員も事件のことを知っているので、咎めもせずに離れたところに立っているだけだった。

「リヒター。お帰りなさい」

イーラが声をかけると、朝食を前にしたリヒターの周りに他のハーフエルフたちも十数人ほど集まってきた。席を立たない者たちも、リヒターをちらちらと窺っている。

「聞いたわよ。やってくれたわね」

妹のエマがにやりとする。

「……大きな声じゃ言えないけど、みんなかなり胸がスーッとしてるの」

エマは豊かな胸を撫でおろしながら「ぶ、た」と唇の形を作ってみせた。ハーフエルフたちの間から失笑が漏れる。

「心配しなくてもいいぜ、リヒター・アーベント」

これまで挨拶もろくにしたことのなかった青年がリヒターの名を口にして、言った。

「あの新入りの豚はまたどこかに異動になったから。〝ハーフエルフが視界に入らない職場〟ってのを希望したんだそうだ」

「まあ、珍しくもないことだな」
別の男が頷く。そして、
「ところで……」と言いかけたとき、
「リヒター」
白衣を腕にかけたサミュエルが食堂に入ってきた。
「室長」
リヒターが腰を浮かしかけるとサミュエルはそれを手で制し、食事を取りに行く。リヒターの周りにいたハーフエルフたちは遠慮して離れて行った。
「今日からまた研究室だな」
「……すみません」
「いや」
リヒターの向かいに座ったサミュエルは、
「あの件はもういいんだ。これから少し気をつけてくれればいい。それより、研究は進んだんだろうね」
と言った。
「……アステルのことですか」
そうだ、とサミュエルは頷く。

「リヒター。今回のことで、きみは二重にちょっとした有名人になった。人間に反抗したこと、そして人間と親しくしていること」
「……」
「あの少年はうちの研究室に何度も来たよ。私の部屋はきみのところと少し離れているからわからなかったが、毎晩通っていたそうだね」
「ええ」
リヒターは目を上げ、食堂にいるハーフエルフたちを見た。みんなさりげなく耳をそばだてているようにみえる。
(さっきあいつが言いかけたのはアステルのことか……)
「俺が必要としているものを持ってきてもらったり、アステルの研究の話を聞いたりしてました。問題が？」
「いや、それは大丈夫だ。我々が人間の領域に入ったら大ごとだが、逆は禁じられてるわけじゃない。しかしとにかく前例のないことなので、みんな興味津々(きょうみしんしん)なのさ」
「勝手に来たんだ。俺が頼んだわけじゃない」
言いながら、リヒターは胸の奥に違和感を覚える。決して迷惑がったつもりはなかったが、自分が卑怯者(ひきょうもの)のように感じられた。そして、そんなことを考える自分に驚く。
アステルは約束をたがえず、本当にリヒターの元にやって来た。リヒターがいまやっ

ている漠然とした研究から課題を絞り込むヒントをくれたり、彼自身の精霊に関する研究考察を熱心に——しかし静かに——明け方まで話しこんで帰るのだった。

「とにかく彼と仲良くなったというわけだな」

「……今まで、ああいうやつがいなかったから」

楽しくなかったと言ったら嘘になる。リヒターは心の中で認めながら返事をした。

「きみの年齢を考えると、本来なら友だちが必要だとは思っていたんだが」

「友だち？　あんた、ここに閉じ込められて何年になるんだ。それはここで言っても無意味だろう」

リヒターが憮然（ぶぜん）とすると、サミュエルはあっさりと頷いた。

「そうだな」

それからふたりは、冷めてしまった食事を口に運ぶ。ふと顔を上げると、少し離れたテーブルから、テニーとミリが小さく手を振るのが見えた。

『精霊研究室』のアステルがハーフエルフの少年と親交を深めているという噂は、次第に王立研究院の中に浸透していったようだった。
エマなどははじめのうち、人間のことだから何か裏があってリヒターを利用しているのではと心配していたのだが、それはむしろ人間たちの言い分だったろう。
「僕がいつかきみに喰い殺されるって言ってきた人がいてね、笑っちゃった」
と、アステルがおかしそうに話していたことがあったが、まさにそんな風に思われていたに違いない。
リヒターは気づかないうちにアステルの存在を生活の一部として受け入れるようになっていった。
ハーフエルフとして生まれたため、物心ついたときにはすでに人目につかない山奥に住んでいたから、友だちらしい友だちは持ったことがない。自分の正体を隠してまで人間とつき合う必要などないと思っていたし、皮肉っぽい性格のせいか同じハーフエルフとも仲良くなれたためしがなかった。
毎日言葉を交わす相手が現れたことだけでも奇跡に近いとリヒターは思った。ましてや共に学ぶ仲間を得ることなど、どうしてこれまでの自分に想像することができたろう。
だからアステルが一緒に研究をしないかと言ってきたとき、リヒターは驚いたし、素直にうれしかった。むろんそれをそのまま顔に出すようなことはしなかったが。王立研

究院に連れてこられて、半年になろうとしているころだった。
「……これまで話を重ねてきてわかったように、リヒターと僕のやってる研究って関連性がたくさんあるよね。どうかな？」
「どうって」
深夜の部屋で、リヒターは渋い顔をしてみせた。彼はベッドに、アステルは椅子に腰かけている。以前は扉越しに話をしていたのだが、いつしかアステルは鍵を借り出し、折りたたみ椅子まで持参して中に入ってくるようになっていた。椅子はふだんは部屋の隅に立てかけられて、もう部屋の外に出ることはない。
「現実的に無理だろう」
リヒターは言った。
「それは確かに、おまえの話を聞いて精霊が気象に大きく関わっていることを知った。その気象が精霊の存在状況に影響を及ぼしていることもな。しかし、俺たちが一緒にやるとなるといろいろ面倒なんじゃ……」
「そうなんだよね」
アステルは急に子供のように脚を投げ出すと、
「毎日耳が痛いよ。ここに来るのも少しずつ減らしてはいるけど」
と、小さなあくびをした。

(昼間、仕事のときに嫌味を言われているんだな……)

リヒターは『精霊研究室』にいるほかの人間を知らなかったが、そう思う。

「おまえ、睡眠不足なんだろう。成長期に寝が足りないと短命になるっていうぞ。ただでさえ人間なんだから」

思わず言ってしまって、リヒターは口をつぐんだ。

アステルはそれを聞き流すと、

「もちろんすぐにはできないよ。今やってる研究をまずはやりとげて、認められないとね。あと一年くらいはかかるかなぁ」

と、のんびりした口調で言う。

「実地調査に行くんだったな」

リヒターは、アステルが世界各地にある精霊が祀られている場所を回って歩く予定を入れているのを思い出した。

「うん。だからどのみちちょっと時間が必要になるよ。悪いことじゃないでしょう？」

「……まわりを説得するつもりか」

リヒターは呆れてしまった。

(同じ研究室を使うとなると、こいつが俺のところに来るしかないだろうが……『精霊研究室』が認めるとは思えないな)

「どうかな？　リヒター」
「アステル」
リヒターは目に見えない深夜の空気を見つめるように宙に視線を上げてから、行儀(ぎょうぎ)よく返事を待っている少年に視線を戻す。
「帰って寝ろ」
「え？」
一瞬ぽかんとしたアステルは、笑い出しながら髪をかきあげ、
「じゃあそうする。ありがとう」
と、座っていた折り畳みの椅子から立ち上がった。
前髪が目に入りそうだったな、とリヒターはアステルが帰ってしばらくしてから気がついた。いつも身だしなみをきちんとしているアステルに伸び放題の髪は似合わない。自分との時間を作るために無理をして、髪を整えに行く時間もなくなっているのかと思うと、リヒターは複雑な気持ちになった。

アステルとの共同研究は結局、それから二年目に実現することになった。ふたりを遠巻きに見ていた研究員たちはもちろんだが、一番驚いたのはリヒター自身だったろう。

一緒に研究をしないかと誘われてからの一年あまり、アステルは月の半分以上を実地調査に当てて過ごしていた。外の風に吹かれると発想も書くものも何割増しか良くなるみたいなんだ、と彼はよく話していたが、このときの論文が認められて希望が通ったのだ。

「おかしな慣習より研究が大切だって判断したんだ。それだけでも王立研究院には価値があるよね」

『自然環境研究室』の片隅にふたりが小さなスペースを貰った日、机の上を整えながらアステルは珍しく興奮ぎみだった。

サミュエルはふたりのことに協力的だったし、テニーたちも言葉は少なかったが実験台の移動などを手伝ってくれる。人間がいきなり混じることに不安がないわけではなかったが、アステルはふたつの研究室をかけ持ちすることになっているので、四六時中ここにいるわけではない。リヒターが、これならば案外すんなり運ぶかもしれないぞと思ったとき、

「アステル！　アステル！　出てきてったら！」

廊下のほうでアステルを呼ぶ女性の声がした。かなり遠くから聞こえる。
「あ、いけない。荷物を持って来てもらうことになってたんだ」
アステルは、ちょっと行って来るね、と部屋を出て行った。
「ここまで持ってきてもらえばいいのに」
何の気なしにリヒターが言うと、ボードを使って計算をしていたミリがとんでもないという風に首を振った。
「このフロアの入り口までしか来ないわよ、人間は。しかも監視員を横に立たせてね。あの子――アステルは本当に特別なのよ」
「そうか」
リヒターは頷いた。
アステルはなかなか戻ってこなかった。廊下へ出てみると、ミリの言う通りフロアの入り口――頑丈(がんじょう)な通用門が設置されている――でこちらに背を向けているアステルと話し込んでいる若い女性が見えた。見回りにでも行っているのか、監視員の姿が見えなかった。アステルを呼んでもらうことができず、それで仕方なく大声を出したのだろう。
「おい、荷物が多いなら手伝うぞ」
リヒターがそう声をかけたときだった。女性は反射的に彼に視線を向け、本当に飛び上がったのではないかと思えるほどぎょっとなった。そして大あわてで走り去って行く。

うんざりするほど繰り返し向けられてきた感情だった。

「……」

「リヒター」

アステルは振り向き、両手に抱えていたぶ厚い事典を何冊か渡してきた。受け取ってやりながら、

「同僚か」

と、訊ねる。

「うん。リリーナっていうんだ。ここに入ったときからいろいろ世話になってる。宿舎も同じところなんだよ」

九歳で単身やって来た少年に、家具はもちろん鍋や食器まで見立ててくれたのがひとつ年上の彼女だったという。

「姉さんというところか」

廊下を戻りながらリヒターが揶揄(やゆ)すると、

「それどころか、みんなに母さんって言われて彼女怒ってた。まだ子供だったのに」

アステルは思い出し笑いをする。

「彼女はすごく優秀なんだ——精霊の宿る物質について研究してるんだけど、今度論文を見せるね。とにかく、ひとつしか歳が違わないなんて思えないくらい大人なんだよ」

アステルは残念そうに付け加えた。
「だからきみに紹介したかったのになあ」
そんなことはとても無理だろうとリヒターは思ったが、わざわざ口にするのはやめておいた。

翌日から始まった約三年間のアステルとの共同研究生活は、生涯の中でもっとも幸せな時期だった、とリヒターは思う。
精霊と自然環境の関連性について学ぶうち、次から次へと知りたいことが溢れてきた。アステルが喋ると、リヒターの内のどこかが刺激されるようだった。自分でも思いがけない言葉が口をついて出る。それはアステルを啓発し、新しい発想となってふたりの目の前に姿を現した。互いが互いを刺激する不思議さに、彼らはいつも時間を忘れて話を続けた。
もっともっと研究する時間が欲しかった。そしてリヒターには今、それに充(あ)てる未来の時間が与えられている。
ようやく、この先自分が生きていってもいいのだと信じることができるようになった。アステルと共に学問に明け暮れることで、自分のために命を落としたのであろう両親の

失われた未来や、ハーフエルフとして生まれたために諦めてきたものを懸命に取り戻しているような気がした。

それからふた月ほどして、アステルはリヒターの部屋に突然客を連れてきた。

「リヒター、起きてる？」

ベッドに寝転んでマナに関する資料を読んでいたリヒターは、驚いて起き上がった。研究室で会えるようになってから、アステルが地下に降りてくることはめったになくなっていたからだ。

「どうした、まだいたのか。何かあったか」

「ううん、一度帰ったんだけどね」

アステルは答えると、鉄格子の扉を開けて入って来た。

「さあ」

彼は廊下の暗がりを振り返る。

「誰かいるのか？」

「うん。ほら、前に論文見せる約束してたでしょ？　本人を連れてきたほうが早いと思って」

アステルの後ろから姿を現したのは、以前リヒターを見るなり逃げて行った女性だっ

た。緊張しきった顔が痛々しいほどだ。

(リリーナ、と言ったか)

リヒターはしきりに鉄格子を気にしているアステルの同僚を見、名前を思い出した。上背(うわぜい)があって大人っぽく見えるが、考えてみればまだ少女なのだ。

「大丈夫だよ。リヒターは逃げたりしない。そもそも、この扉はこのままじゃ中から開かないように造られてるんだ。魔術封じの逃亡防止ってやつ」

アステルが笑うと、リリーナは、

「でも……」

と、小声でつぶやく。

「でも、ここで喰われたら終わり、か？」

リヒターは思わず皮肉を言い、かつてアステルが自分に喰われると言ったのはこの人間ではないか、と思った。

アステルは折り畳み椅子を持ってくると、憮然としているリリーナをそこに座らせる。

「あの、私……、アステルに無理矢理連れて来られただけで……。何度もしつこく誘われていて、だから……」

リリーナは、落ちつかない様子で自分の髪を指にくるくる巻きつけながら――その仕草(しぐさ)は年相応に見えた――、目を伏せたままだった。



「しつこく……言ったのかお前」
リヒターはアステルを呆れたようにじっと見る。
「え、だって」
アステルの瞳が微かに揺れた。
「仲良くなってほしいから……絶対ふたりは気が合うと思っ」
「合うわけないでしょ、ハーフエルフとなんか！」
リリーナが激しく遮る。
「信じられない！　アステルが、あなたが、ハーフエルフと……！」
「ここでそんなことを言うと、本当に喰われるかもしれないぞ」
「!?」
肩をビクリとさせて、リリーナはあたりを見回した。この階にハーフエルフが五十人近く暮らしていることを思い出したのだろう。
「……冗談だ。俺たちはそんなに野蛮じゃない」
だが無理するな、とリヒターは抑揚のない声で告げた。
「あんたまで俺に付き合うことはない。こいつは頭が少しいかれてるんだ。自分が非難されることをなんとも思ってないからな」
「アステルを馬鹿にしないでっ！」

リリーナはキッとリヒターを上目遣いに見る。
「せ、精霊の話をしようよ！」
あたふたとアステルがふたりの間に割って入った。
「リリーナほら、きみの専門の、精霊と物質の話。世界のマナのバランスの話！　あれをリヒターにしてあげて。ね？」
「嫌よ」
リリーナはきっぱりと言い切った。
「その話なら論文に書いたわ。知りたきゃ読めばいいでしょ」
「リヒター」
アステルは、助けを求める目でリヒターを見上げた。
「……その論文には興味がある」
仕方なくリヒターが言うと、リリーナはすっくと立ち上がる。
「その論文には興味がある？　なによその言い方、偉そうに」
「すまん、悪気はなかった。興味があるのは本当だ。読んでみたい」
「べ……別に、謝ってもらわなくてもいいけど……」
リリーナは唇を尖（とが）らせ、
「今日は持ってこなかったから、また今度貸してあげる」

と、ぷいと横を向いた。素早くアステルはリヒターに「ごめんね」と目で告げる。
「アステル、帰りましょう。早くここを開けて！」
彼が扉を開けると、リリーナはあまりにあわてていたため、頭をぶつけそうになり、真っ赤な顔で振り返るとリヒターをひと睨みした。
扉が閉まる重たい音。続いて内部の特殊錠が閉まるいつもの機械音がした。
「…………」
(なんだあれは)
ふたりが帰ってしまってから、リヒターはしばらく呆然（ぼうぜん）としてしまう。
(えらく混乱していたようだが……それにしても)
なぜアステルはリリーナを連れて来たのだろう。リヒターは椅子に手を伸ばす。
そのとき、以前廊下で言っていたアステルの言葉が甦った。
〝だからきみに紹介したかったのになあ〟
「あ？」
椅子を片付けるリヒターの手が止まった。
「なんだ、そういうことか」
彼はひとり、くっくっと低く笑い続けた。

翌朝アステルが研究室に入ってきたとき、リヒターはひとり壁際に置かれた簡易ベッドに仰向けに寝ていた。
「おはよう……どうしたの？　みんなは？」
「サミュエルもミリも別室でテニーの実験を手伝ってる。俺はミリの実験台だ」
アステルはリヒターの頭と腕、心臓のあたりに装着された線がミリの使っている器具に繋がっているのを確かめ、頷いた。
「しばらく動けないぞ」
「いいよ、別に。話くらいできるでしょう」
「定時になると俺の上に型（パターン）の違う虹が発生するんだ。そのときの変化を記録するらしいんだが……」
リヒターは天井を指差し、口をへの字に曲げて見せた。
「俺は虹が作物に与える影響は知っているが、動物のことはよくわからないと言ったのに」

「脳波が動物並みって思われてるんだよ、きっと」
アステルは軽口を叩き、それからリヒターの顔を上から覗き込む。
「……ごめんね、ゆうべは」
「いや。彼女、俺のこと怒っていただろう」
「『なんであんなに投げつけるような話し方をするのよ！』、だって」
「はは……」
リヒターは思わず笑った。
「しかしあれくらいしっかりしているほうがいいんだろう、おまえには」
「え!? そ、そんなんじゃないよ」
あわてて手のひらをひらひらさせるアステルに、リヒターは続けた。
「思い出したんだよ。最初に彼女と廊下で顔を合わせたとき、おまえは言った。きみに、紹介したかった、って。きみを、じゃなかった意味がゆうべわかった」
「そんなの言葉のあやだよ。どっちでもたいして変わらない……前に言ったじゃない。世話になってるんだ、ずっと」
アステルの頬が染まっているのを、リヒターはちらりと目の端に捉えた。
「俺はそういうことには疎いが、おまえは女に好かれると思うよ」
「なんで？」

ミリの機械が低く唸り始める。

「そうだな……強(し)いて言えば、育ちのよさと人なつこさの程度がいい、とか？」

「意味わかんないよ」

「鼻持ちならないやつが多いなかで、おまえはそうじゃない。あくが強くない。言いかえれば毒にも薬にもならない……」

「ええっ、ぜんぜん誉めてないじゃない、それ」

アステルが眉を顰めたとき、水晶(クリスタル)を鳴らすような澄んだ音と共に、虹が発生した。

「うわあ、綺麗だな」

彼は目を輝かせてリヒターを覆うようにかかる虹を見上げる。虹は七色ではなく、緑の階調色(グラデーション)だった。

「こういう型の虹が出ると、たいてい野菜の葉は厚く硬くなってしまうんだ」

「ふうん……ということはマナの量とも関係してるのかな」

「それは当然だろう」

「……いつか」

微かな声でアステルが呟(つぶや)いた。

「え？」

「ううん、なんでもないよ」

アステルは首を振り、ベッドの傍らに置いてあるファイルを手に取る。中にはミリが作った記録用紙が挟まっていた。

「これ、数値を記入しておいてあげたほうがいいんじゃない？」

「頼む。さっきは寝たまま自分で書いたんだが」

「ほんとだ。毒へビみたいにあくの強いひどい字だな」

アステルは楽しそうに機械を覗き込み、表示されている数値や記号を写し取る。そして、ふと思い出したように、

「リリーナ、そのうちまたきみに会うってさ」

と告げた。

「……そうか」

虹が消え始めている。儚(はかな)い緑色の帯を見上げたまま、リヒターは答えた。

リリーナが再びリヒターを訪ねてきたのは、彼が珍しく熱を出して仕事を休んだ日の

午後だった。
昼ごろには熱も下がったので、起きて書き物をしていた。
「寝ていなくていいの？　風邪をひいたってアステルに聞いたものだから」
彼女は部屋に入ってくるなり、言い訳めいた調子で言った。
「驚いたな。あんたがお見舞いに来てくれるなんて」
「お見舞い？　違うわよ」
リリーナはむっとし、
「届けものがあるからきたのよ。ほらこれ」
と、机の上に紙の束を投げ出した。前に読ませてくれるといっていたリリーナの論文であることはすぐにわかった。
「投げるな。大事なものだろう」
「……ごめんなさい」
彼女は肩をすくめる。
「読んだらアステルに返しておけばいいか？」
「……ええ。私は二度と来ないと思うから、そうしてくれる？」
それからリリーナは、耳をそばだてるような仕草をし、
「みんないないのね。仕事の時間ですものね」

と、確認するように言う。
なにか聞かれたくない話があるのだろう。だからこの好機を逃さずに来たのだな、とリヒターは察する。
私ね、とリリーナが口を開いた。リヒターは折り畳み椅子を目で示したが、首を振って続ける。
「私、生まれつきすごく頭のいい子供だったの。ここの研究員の多くはそうだと思うけど、周囲の期待を背負って育ったわ」
「何の話だ」
「アステルの話よ、決まってるじゃない。あなたはきっと彼を誤解してるわ」
リリーナは焦れたような声を出した。
「私、とても孤独だった。優秀すぎて学校で疎まれてたから。そのうち兄と妹も私を無視するようになって……とうとう親も冷たくなった。できすぎる子は人間離れしてて気持ち悪いって。それで、望んでここへ来たの。ここでの生活に慣れたころ、アステルが精霊研究所からこっちに入ってきた。彼、付き添いもなしにひとりで来たのよ。私のあの冷たい親だってしぶしぶ挨拶に来たっていうのに。身の回りのものもほとんど持たされてなくて……おかしくない？」
「俺はひとりで来たどころか、連行されてきたがな」

リヒターが口を挟むと、リリーナは唇を噛んだ。
「それはリヒター、あなたがハーフエルフなんだから当然でしょ。アステルは人間なの」
「そしてあんたは、あいつの恋人なんだろう？」
リリーナはハッとし、
「私はそう思ってるけど……アステルもたぶん……どうかしら……」
と、すぐに目を伏せる。
「彼、家族のことなんかを聞いても私には何も話してくれない。あなたには話してるんでしょう？」
いや、とリヒターは首を振った。
「聞いたことはない。要するにあんたは、アステルも自分と同じように不幸に違いないって言いたいのか」
「アステルがここに来てすぐ、私は自分の生い立ちを話したの。誰かに聞いて欲しかった。同年代の子なんてここには他にいなかったしね。そしたら彼は泣いたのよ、自分のことみたいに涙を流して。私、まるで神様が与えてくれた自分の片割れのように感じたわ……気がついたらふたりとも泣きながら眠っちゃってた」
リリーナはふっと遠い目をし、

「あのころアステルが私になついてくれていたのは、代償行為じゃないかと気づいたのよ。お母さんかお姉さんか……」

と言った。

「考えすぎじゃないのか。いかにも女が好みそうな話だ」

「……知らないならいいわ。なんでも仮説をたてて考えてみるのは仕事の悪い癖ね」

リリーナは扉に向かいかけ、足を止める。

「ハーフエルフのことも、なぜ嫌いなのか考えてみたの。別に恨みがあるわけじゃない。しょせんは世間とか習慣からの刷り込みなのよ。でも私はやっぱりハーフエルフが苦手だわ」

「…………」

話すだけ話してしまうと、リリーナは出て行った。

(……アステルの情報を探りにきたのか)

リヒターはベッドに腰を下ろすと彼女が置いていった論文に視線をあて、ぼんやりと考えた。

(確かに俺はあいつを自分より幸せな人間だと思って疑ったことはなかった。しかし、人間だからって幸せとは限らないものな)

逆にハーフエルフでも、捕まる前の自分のように暖かな家庭に暮らす者もいるはずだ。

しかし、アステルを好きなリリーナが彼を気にするのは当然としても、自分はどうも詮索する気になれない、とリヒターは思う。

（あれだけしゃべるくせに、ハーフエルフは苦手、か……）

差別をなくすのは簡単だ。人々が頭の中から、リリーナが言う刷り込みを含めたあらゆる知識を捨ててしまえばいい。だがそれはリヒターやアステルの生き方とは真逆の方向にあるものだった。

「……俺はまた、なにを非現実的なことを……」

やはりまだ調子が悪いのかもしれない、とリヒターは熱っぽいため息をついた。

リヒターとアステルが精霊と自然現象の関連性についてまとめた共同論文の骨子がようやくまとまりかけた時期に、テセアラ各地に小さな異状がみられ始めた。ふたりが研究を始めて丸二年過ぎたころのことだった。

その時期には論文のための調査結果と資料だけでも膨大な量に膨れ上がっていたため、

特別な索引をつけることにしたのだが、その整理作業だけでも大変な時間を要した。論文そのものも相当分厚いものになるだろうと思われた。
異状は論文のための調査結果の中から見つかった。その多くはちょっとした天候不順であり、おそらくそれを気にしたのはリヒターたち研究者と林業や農業に従事している者のごく一部だけだったろう。だが、気象の異常に気を配り始めたとたん、それは収まってしまう。しばらくするとまたごく短期間の冷害や日照りが発生する。
テセアラの繁栄は安定した気候やマナの供給の上に成り立ってきたが、いま緩やかにその堅固な土台が揺らぎ始めているようだった。
「……だから、月の満ち欠けを含めた自然現象が世界のすべての生き物に影響を与えていることを前提とした場合、そこにマナの干渉が入るとたとえ精霊の強い影響下でもブレがでちゃうんだよ。僕が集めたデータは誤差が大きすぎて役に立たなくなる」
火や水を司る精霊の精妙な力が熱帯や寒冷地に働いているように、すべての自然現象における精霊の役割を証明するために長い年月をかけてきたアステルは、研究室の片隅で、肩をすくめた。
「問題は、それがなんでかってことなんだ」
「つまりおまえの専門外の力が働いているということか」
「……残念だけどね。ほら、これを見て」

リヒターはアステルの示す膨大な量のグラフの一部を覗き込む。
「……え、おかしくないか、このマナの量の推移」
「でしょ？」
ふたりが定点観測(ていてんかんそく)しているいくつかの場所でのマナの不安定な増減に目を止め、アステルは頷いた。
「テセアラのもともとの成り立ちを考えれば、衰退(すいたい)世界に持っていかれているのかとも思ったけど、そんな技術はおそらく向こうにはないはずだし。いつの間にか安定するのも変でしょ？　何かの意志が働いていたりしてね」
「何かって？　精霊じゃないとすればなんなんだ」
「うーん」
アステルはちらりとリヒターを上目遣いに見る。
「たとえば魔物、とか」
「魔物!?」
リヒターは驚いた。魔物の存在と世界を構成するマナとに関係があるとは考えたこともなかったからだ。
「あくまでも仮説だよ。魔物がマナの調整役を買って出ている、っていうのはどう？」
「何のためにだ？」

リヒターは忙しく頭の中でアステルの仮説を検証しようと試みながら訊ねた。
「だって。マナを制するものは世界を制す、でしょ」
「なるほど。魔物は、人間や俺たちを滅ぼして世界を独り占めしたがっているというわけか」
うーん、とアステルは唸り、
「よくわからないんだ。精霊と魔物……もっと調べないとね」
と机の上に広げてしまった紙の束を集め、角をきれいに揃える。これだけの量の資料が一度も迷子になったことがないのはアステルのきちんとした性格のおかげだ、とリヒターは常々心の中で感謝していた。
「大樹カーラーンが枯れてしまった時代からのことを、もう一度調べ直したいから資料を集めるよ。もし……」
「なんだ」
リヒターが訊ねる。
「もし何も見落としていないとしたら、これから起こる何かの前兆かもしれない……」
「……」
何が、とリヒターは訊ねない。
継続中の研究を中断してまでじっと考え込んでいるアステルの横顔に、漠然とした不

安を感じたからかもしれなかった。

王立研究院の内部に世界再生の噂がまことしやかに流れ出したのは、いつのことだったろう。

リヒターは、『歴史学研究室』で衰退世界を専門にしているハーフエルフの男性からそれを最初に聞いたのだった。

「衰退世界シルヴァラントで、世界をもう一度統合しようという動きがいよいよ始まったらしい。我々にもマナをよこせとね」

「確かなのか？　八百年も低迷している世界なんだろう？」

もう十年以上、『化学研究室』で特殊な接着剤を作っているという男が訊ねた。

「昼間、軍の筋から偶然入ってきたっていう情報だから間違いないよ。むろん王国はすでに極秘の阻止活動を始めたってさ」

夕食どき、ハーフエルフたちは額を集めてこの話題に熱中していた。リヒターはテニ

ーとふたりで食事をとりに来て、彼らの輪の中に手招きされたのだった。
話の内容を聞いたとたん、反射的に出入り口の監視員を振り返った。が、監視員はむしろ漏れ聞こえる話に耳をそばだてているように見えた。
(世界の統合……世界再生……マナ……衰退世界……)
「リヒター。おい、リヒター」
名前を呼ばれて、ぼんやりしていたリヒターはハッと顔を上げる。ハーフエルフたちの視線が集まっていた。
「おまえは人間と一緒にやってるんだから、なにか聞いてるんじゃないか。人間は俺たちからは取り上げるばかりで、なにひとつ与えないからな。情報はないのか?」
「いや、全然。専門が違う」
彼は即座に首を振ってみせた。
「そうか。そうだろうな」
「天気とはまたちょっと違うしな」
男たちは特別がっかりした様子もなく、すぐにリヒターから視線をはずすとまた話を始める。
「テニー。俺、先に戻る」
「え、どうかしたのかい。研究室を出るときは腹ぺこだって言ってたのに」

テニーが怪訝そうにリヒターの顔を覗き込んだ。
「なんでもない」
リヒターは素っ気なく言うと、ハーフエルフたちに背を向けた。
部屋に戻るとすぐ、ずっと以前アステルに貰った資料――どこにでもある歴史本の写しだった――を取り出して読み始めた。
「……古代大戦の結果大樹カーラーンが枯れて、マナを生み出すものはなくなり……その後世界はふたつに分けられた。マナの均衡は危ういが、テセアラは繁栄している……ふん、子供だって知っていることだ」
リヒターはつぶやき、資料を放り出した。
「だが世界が再び統合したら……大地は、マナは、俺たちの研究は……一体どうなるんだ？」
シルヴァラントにいる精霊たちについて、アステルの研究はまだこれからというところだし、気象に関しても確実に大きな変化が現れるだろう。
（今まで積み上げてきたものをいったん捨てなければならなくなるかもしれない……）
リヒターは難しい顔でじっと考え込んだ。
――地を揺るがし引き裂く大地震が起きたのは、それから約半年後のことだった。

あとで知ったところによると、被害が甚大だったシルヴァラント側に比べれば、テセアラはずっと楽に大地の統合を乗り越えたようだった。それでも各地で打撃を受け、一時的にではあったが、あらゆる制度が必要最低限しか働かなくなった。研究院でも警備体制が甘くなり、監視員がいない箇所が目立つようになった。

テセアラには再生直後から大勢のシルヴァラント人が流入してきた。家を失った貧しい人々が街に溢れることにより、新たな身分差別が生まれつつある。これによってテセアラのハーフエルフはさらなる不安を抱えることになった。

「シルヴァラントのハーフエルフとテセアラの俺たちじゃ、どっちが身分が上になるんだ？」

「シルヴァラント人は貧しいからこっちの人間からは虐げられるだろうが、あっちじゃハーフエルフだというだけの理由で処分されることなんかないっていうからな」

いつもの食堂では連日ハーフエルフたちが騒いでいた。もう声高に話をしても咎めら

れることはなくなっている。
「冗談じゃないわ。じゃあ私たち、ますます下の下ってこと？」
「これ以上どうしろっていうのよ」
ふだんは目立とうとしないエマをはじめとした女たちも、話に加わった。
驚いたことに、それからしばらくして研究院のハーフエルフたちは突然自由を言い渡された。
世界再生の混乱の中でまず王族が救おうとしたのは、当然の事ながら被害に遭ったテセアラ人だった。それだけでも手一杯なのに、ハーフエルフを養ってやり、管理する必要はないと判断したのだろう。ハーフエルフたちは事実上の自由――研究院の地下に住み続けてもいいし、外へ出てもかまわない――を得ることになったのだ。
この通達がなされたとき、アステルはサイバックを留守にしていた。マナを始めとするあらゆる数値のデータが研究院に届かなくなったせいもあるし、できるだけ早く環境の変化を知りたかったからだ。
不幸中の幸いだったのは、ひたすら集め続けてきた各地のデータが変化の振れ幅を知るための貴重な資料となったことだった。心配していた研究の中断もしなくてすみそうだった。リヒターはほっとし、自分の身の振り方はアステルが戻ってから決めることに

した。
（あんな理不尽なやり方でハーフエルフを捕まえてきておいて、いらなくなったから自由にする、か――）
リヒターは素直に喜ぶ気持ちになれなかった。
（父さん、母さん――）
両親はなんのために犠牲になったのだろう。試験の結果で処分されたハーフエルフたちは……。
あと五年世界再生が早かったら、リヒターが捕まることもなかったに違いない。王立軍にハーフエルフ狩りなどしている余裕はなかったはずだからだ。家族はあの山あいの家で平穏な日々を過ごしていたろうか。
今さら考えても仕方のないことだ、とリヒターは自分に言い聞かせた。

薄暗い室内から明るい日差しの中へ歩み出してから、リヒターは自分が今、出てきた

王立研究院を振り返った。世界再生から数か月が過ぎていた。
ひどい地震のために一部崩れてしまっているところはあるが、建物自体はまだ重厚な圧迫感を持ってそびえ建っている。
(こんな姿だったのか……)
連れて来られたときに見たはずの建物の記憶はほとんどなかった。
五年ぶりだ、とリヒターが思ったとたん、傍らのアステルが、にこっとしてリヒターを見上げた。
「外に出るの、五年ぶりなんだよね」
「ほう、そんなにたつのか」
とぼけて答えるが、少し声が震えた。
サイバックの歩道は想像していたより破損が少なく、歩きづらいというほどでもない。しばらく行くと、
「ここだよ、僕の家」
と、アステルは目の前に現れた集合住宅を指さした。
「おまえは毎日ここから通って来ていたんだな」
「うん」
研究員宿舎は堅牢な三階建てで、アステルの部屋は階段を昇った二階の端だった。あ

の地震に遭っても、幸いなんともなかったという。
「きみをここに招待するのが夢だったんだ。でも、叶うと思っていなかったから……」
アステルは少し照れたような表情で入り口の扉を開け、リヒターを招じ入れた。
「殺風景でびっくりしたでしょ」
「……いや。こんなものだろう」
リヒターは言ったが、その実あまりの質素さに驚いていた。
小さなダイニングキッチンと、ベッドと机が置かれ、窓際に予備の白衣がかけられた部屋。それだけのささやかな住みかだった。
(なんというか……いじましいほど清潔だな)
おそらくは九歳のときにリリーナに選んでもらったという生活用品のみで暮らしてきたのではないか。
「そこに座って」
リヒターが入り口を背にしてテーブルの前に座ると、アステルも向かい側に腰を下ろす。
「あのとき勇気を出して、きみを訪ねてよかった。共同研究をさせてくれと上に言ってみてよかった。勇気を出したから、夢が叶った」
ああ、とリヒターは短く返事をする。

「……へんな感じだね、ここにふたりでいるの。慣れなくて」
アステルは笑った。
「でも本当によかった。ハーフエルフが……きみが解放されて。みんなずいぶん故郷に戻ったらしいね」
「ああ。家族のあるやつはな」
テニーもミリもいまはもう研究院にはいない。虐げられ、自由を奪われる生活に別れを告げ、昔の自分に会いに戻ったのだ。研究室には、動物を抱えているサミュエルが残っているだけだった。
「リヒターはどうするの」
「俺は……もう親はいないし、戻る家もない。人間の勝手で出て行っていいといわれても、研究があるからな。当分は研究院暮らしだろう」
「そうか……」
アステルは軽いため息をつく。
「こんなはずじゃなかった。俺は……いずれ研究院から世界へ出て行くおまえに、すべてを持たせてやろうと思っていた。だからいまは正直ちょっと、気負っていた自分が面食らっている感じなんだ」
「リヒター……」

アステルはリヒターを見つめ、「僕も……」と微かな声でつぶやいた。
「ん？　なんだ？」
「なんでもないよ。あ、いけない」
アステルはあわてて立ち上がると、机の上からひと抱えもあるファイルを持ってきた。
「いろいろわかったんだ。大樹カーラーンに宿っていた精霊のこと！」
「カーラーンはマナを大量消費した戦争のために枯れたんだろう」
「でも、精霊にとっては宿り木をなくしたっていうだけで、いなくなったわけじゃなかったんだ」
アステルは実地調査の結果をリヒターに説明し始めた。なんのことはない、場所がどこであれ、ふたりにはそこが研究室になってしまう。
「王立図書館にかなりの数の古書が残っていてね。リストには載ってないやつ。それをしらみ潰しに当たってみたんだよ。精霊はラタトスクっていうんだけど……、ええと、それより新しい樹が生まれた話は聞いた？」
「……筋道をたてて話してくれ」
リヒターは苦笑した。
アステルは、かつての大樹カーラーンに宿っていた精霊ラタトスクはいまどこかで眠りについており、そのためにマナが不安定になっていること、シルヴァラントの再生の

神子によってラタトスクとは別の精霊が宿った新しい樹が芽を吹いたことなどを、熱っぽく話してきかせた。
「それでその精霊ってやつはどこに……」
リヒターが訊ねかけたとき、地鳴りが聞こえた。続いてぐらりと大きな揺れ。が、地震はすぐにおさまった。
「……危ないね……こういうのがだんだんひどくなるよ、きっと……」
アステルは眉を顰め、続けた。
「古書によると、ラタトスクはギンヌンガ・ガップっていうところで眠っているらしい。場所は不明だ」
「精霊ならなんでお前にわからなかったんだろう」
「それが、ラタトスクは精霊であり、魔物の王でもあるんだよ。盲点だった。魔物を支配する精霊がいるなんて。ラタトスクはセンチュリオンという八体の、水や火や風などそれぞれの属性を司る部下を持ち、彼らが世界にマナを運んでいたらしいんだ」
センチュリオン、と聞きなれない言葉をリヒターは繰り返す。
「そいつらはどうしてるんだ」
「……わからない。少なくともぼくが知っている精霊の神殿や、封印され祀られているという場所には今までそれらしき生き物はいなかった。いまはたぶん……暴走している

んじゃないかな。だから異常気象が起きているんだよ。ラタトスクはそれを知らないのかもしれない」
「新しい樹というのはどうなんだ」
それが、とアステルは首を振った。
「残念ながら、マナの流れを整える力はないんだ」
「じゃあやはりそのギンヌンガ・ガップというのが要なんだな……」
「これを見て」
アステルは大きな巻紙を広げて見せた。
「メルトキオで手に入れた新しい世界地図だよ。まあ、まだいろいろ適当だけど、敏い人たちもいるもんだよね」
「確かに、やることが早いな」
アステルは地図の上に薄い半透明の紙を重ねる。
「こっちが僕が観測してきたいつものやつ。全部の数値を波動に変換して乗せてみると、ほら」
「……すべての線がこのあたりに集まっているな」
リヒターは唸り、薄紙をどける。
「アルタミラのあたり……。トイズバレー山脈の近くか」

「そうなんだ。ただ、この地図が信用できればの話だけどね」
アステルは笑い、
「もう少し調べてみて……あ」
と、ふいに顔をあげ、リヒターの肩越しににっこり笑った。
「いつからいたの？　入ってくればよかったのに」
「今来たのよ」
リヒターが振り返ると、入り口の扉のところにリリーナが立っていた。
「いやだわ、アステル。お客さんにはお茶くらい出すものでしょ」
ごめん、とアステルは肩をすくめる。
「私がいれるから続けていて」
リリーナはリヒターの脇を通りざま、
「こんにちは、リヒター」
と挨拶した。
「……」
黙ってリヒターがアステルを見ると、彼は笑っている。
「……久しぶりだ」
「そうね」

リリーナは答え、湯を沸かし始める。
「会わない間に世界は再生されるし、ハーフエルフは解放されるし、人生なにが起こるかわからないわね。おまけにまた異常気象の報告が入ってたわ」
彼女は研究院から持ってきたという各地の異常な現象——洪水、津波、湖の渇水(かっすい)、地割れや陥没、温暖化と寒冷化などの情報をまとめた報告書をテーブルの上に置いた。
「人々はみんな大地がひとつになった衝撃が原因の、一過性のものだと思っているみたい。でもこれは明らかにマナのせいよ」
「……ひどいね」
報告書をざっと見て、アステルがため息をつく。リヒターは、故郷のあの恵み豊かな山はどうなっただろう、とちらりと考えた。
「どうぞ」
と、リリーナがカップを置く。食堂とは違う香りのお茶だった。
「……もう五年になるのね」
壁に寄りかかり、リリーナがしみじみと言う。
「リヒター。あのころアステルはよく双方向という言葉を口にしていなかった？」
「……聞いたような気がするな。無理な力をかければ歪むと」
そうそう、と彼女は頷いた。

「あれって、人間とハーフエルフのことでもあったのよ。私がハーフエルフを忌み嫌うものだから、アステルによく言われたわ。さっき入り口であなたたちを見て思い出したの」
「俺たちは……うまくやれているか？」
リヒターは訊ねた。人間に親しくしてもらっているという負い目がいつもある、と彼は思う。
「決まってるじゃないの。双方向どころか、循環してるって感じ」
その口調に軽い嫉妬が含まれているのを聞き取って、リヒターは「ありがとう」と素直に礼を言った。
「さあ。いろいろ相談があるでしょうから、私は仕事に戻るわね」
「相談って？」
「相談？」
アステルとリヒターが同時に聞き返す。
「あら、行くんでしょう？　ギンヌンガ・ガップへ」
リリーナは言い、手早くキッチンを片づけると出て行った。
ふたりは異常気象の報告書と地図に再び目を落とした。
「もしこのまま放っておいたら……」

「生物が死に絶え、世界は滅びるだろうな」

「……」

「……」

ふたりは無言のまま顔を見合わせた。

学園都市サイバックを出てすぐ、リヒターは子供のころも空が広かったことを思い出した。

山あいから昇る太陽や、直接肌に吹きつける風、谷間を隠すミルク色の霧——。

リヒターにとってギンヌンガ・ガップを探す旅は、失われた五年間を取り戻すと同時に、アステルとの共同研究に明け暮れた三年間の幸せの延長かと思われた。

一緒に旅をしてみると、実地調査に慣れているアステルは健脚(けんきゃく)ではあるものの、ろくに武器が使えないことがわかった。子供のころから研究しかしたことがないというのでは無理もない。今までよく魔物に襲われて命を落とさなかったものだ、とリヒターは

思う。彼は旅のために吟味した剣と斧を購入したが、結局どちらも自分が使うことにした。護身用の基本的な使い方はエルフの父親に教わっていたからだ。
「気持ちがいいね」
「ああ、本物の空だ。だが色が悪い」
アステルは、
「相変わらず辛辣だよなあ」
と、白衣の裾を風になびかせながら笑う。
「最初にきみに会いに行ったとき、ひどい目に遭って疲れているから皮肉ばかり言うのかと思ったよ。でもそうじゃなかった、そういう人だった」
ふたりはサイバックから東に向かい、緩やかに北上した。
あははは、とリヒターは声をあげて笑った。アステルがそれをまぶしそうに見上げる。
「気の毒だったな」
倒壊したままの宿屋も少なくなく、ふたりは長旅になることも考えてできるだけ野宿することにした。
幾晩目の焚き火だったろう。ふたりは平原に熾した炎を見つめながら深夜まで話し込んでいた。朝になれば遥かに望めるはずのトイズバレー山脈も、いまは深い闇の中に沈み、空と区別がつかない。

「もうすぐアルタミラの近くだね」
膝(ひざ)を抱えて、アステルが言った。
「そうだな。どこかに精霊ラタトスクのいる場所がある」
「うん……。あのさ、リヒター。忘れないうちに言っておきたいことがあるんだ」
「なんだ」
リヒターは炎でオレンジ色に照らされたアステルの横顔に視線を当てた。
「ずいぶん前に、きみに言いかけてやめたことがあるんだけど……。覚えてるかな、ミリの虹の実験台になってたでしょう」
「……ああ、あったあった。寝てたらおまえが入って来た」
リヒターはすぐに思い出して頷いた。
「うん。あのとき、きみの虹と作物の話を聞いて僕、いつか一緒にこうして実地調査の旅をしたいなと思ったんだ。またひとつ夢が叶ったけど、なんだか怖いよ」
「どうしてだ」
「……」
アステルは答えず、横にいるリヒターのほうを向く。
「この間、僕に全部持たせるつもりだったって言ってたね」
「え？　ああ、研究のことか」

「僕もまったく同じことを考えてた。僕は人間なんだよ、リヒター」
パチパチと爆ぜる炎に瞳を戻しながら、アステルは唇を動かし続ける。
「どんなに頑張っていい研究成果を残そうと、結論の糸口まで辿り着こうと、あと何十年かしかこの世にいられない。だから、僕が持つんじゃないんだよ。リヒター、きみに全部あげたいんだ。僕が死んだあとも、僕の研究は死なせないで――」
「……アステル」
「精霊や魔物たちから見たら、人間の一生なんて、ほんの一瞬みたいなものなんだろうね……」
アステルの頬に、涙が流れ落ちた。
「悔しいよ。どうして人間なんかに生まれたんだろう。ずっとずっと生きて、永遠に研究をしていたいのに。差別だよね、人間だけ早死になんてさ」
「……馬鹿かおまえは」
リヒターは、こみ上げてくるものを振り払うように、ぷいと横を向く。
「へへへ……。そうだよね、馬鹿なこと言っちゃった」
泣き笑いの表情で、アステルは深呼吸をした。
「もう寝るよ。おやすみ」
恥ずかしかったのか、彼は背を向けてごろりと横になってしまった。

やがて小さな寝息が聞こえ始めると、リヒターは、アステルがしていたように深呼吸をひとつしてみた。そうしなければ眠れそうになかったからだ。
夜の大気の中に、水の匂いをかいだ気がした。

昨夜の水の匂いは気のせいではなかったのだ、とリヒターは腿(もも)のあたりまで伸びている草を掻き分けながら歩いていた。日照りの土地ではこうはいかない。
「だんだん背が高くなってない？」
アステルは、腰までくる草を摑んでリヒターに言う。
「しかもほら」
ぽきりと茎(くき)を折ると、透明な水が滴った。
「待て」
リヒターは腕を伸ばしてアステルを制すると、

「あれは？」
と、前方を目で示した。背丈のある草の間から、すでに傾いてきている日差しを受けた古い建物が見え隠れしている。
「えっ!?　ほんとだ……なんだろう。遺跡かな」
「行ってみよう」
「うん」
近づいてみると、建物は石造りの神殿のように見えたが、たいして奥行きがない。
「あんまり大きくないね。たぶん下に広がってるんだろうな」
崩れかけた入り口から下へ伸びる階段を見つけたアステルが推測する。
「こういう神殿にはいくつか調査に来たことがあるけど……うわっ！」
突然、ふたりの前に魔物が飛び出してきた。
「危ないっ！」
叫びざま、リヒターが一刀の下（もと）に斬り捨てる。
「下がっていろ。あと三体、草の中に潜んでいる」
言い終わらないうちに、魔物は次々飛び出してきた。リヒターは斧を素早くホルダーからはずすと二体を倒し、残りを剣で仕留めた。
「ああ、びっくりした。この神殿を護（まも）ってたのかな」

アステルが首を傾げる。
「それなら中身は空(から)ではないということだ。行ってみればわかるだろう」
リヒターは先に立って階段を降り始めた。
清冽(せいれつ)な水の匂いと流れの音がふたりを包み込む。階段を降りきるとそこは広間のような空間で水路が巡らされていた。奥には滝も見える。
「水の神殿てわけか……どうりで植物が育つわけだよね」
アステルは豊かな水が小さな湖ほども湛(たた)えられているのを見て、感心したように言った。
「しっ」
リヒターは人差し指を唇に当て、耳をそばだてた。
「……なんだろう、女の人の声？」
アステルもじっと耳を澄ます。
そのとき、目の前の暗がりにぽうっと青い女の姿が浮かび上がった。青白い肌に長く伸ばした青い髪。耳はヒレのようで、魚の形をしたピアスを揺らしている。
「せっ、精霊!?」
アステルが叫ぶと、
「違うわよ。アタシはアクア。センチュリオン・アクアって名前なんだから」

アクアはキッとふたりを睨んだ。
(センチュリオン・アクア……センチュリオンだと⁉)
リヒターはアステルと顔を見合わせる。
「せっかくここでゆっくりしてたのに、なんなのよ。まあ、アタシのしもべちゃんを全部やっつけちゃった腕は認めるけど」
アクアは宙に浮かんだまま言い、リヒターをじっと見た。
「センチュリオン・アクア。おまえは魔物の王・精霊ラタトスクのエイト・センチュリオンか？」
アクアは一瞬目を見開き、にっと笑う。
「よく知ってるじゃない。そうよ、アタシはラタトスクさまのエイト・センチュリオンのひとり」
「精霊ラタトスクはどこにいるんですか？」
アステルが急きこんで訊ねた。
「あ、あの、僕はアステルといいます。こっちはリヒター。僕たち、ラタトスクに頼みがあってギンヌンガ・ガップを探しているんです」
「……驚いた」
アクアはふうっとため息をつく。

「人間風情がラタトスクさまを訪ねてくるとはねぇ」
それから彼女はすーっとリヒターのところまで移動してくると、
「どうしても行きたいの？」
と訊ねた。
「ああ。頼む」
アクアは笑みを浮かべると、
「いいわ。ちょうど暇を持て余してたところだし、ラタトスクさまのところまでアタシが案内してあげる」
と言った。
「本当か。それは助かる」
「ありがとう！　アクア」
礼の言葉を背中に受けながら、アクアは神殿の入り口まで移動してゆく。ふたりはあわてて後を追い、地上に戻った。すでにあたりは暗くなっている。
「人間て不便ねー。いちいち歩かなきゃならないなんて」
茂った草の上に浮かび、アクアはおかしそうに笑った。
暗くて歩きにくいことこの上なかったが、リヒターとアステルはアクアを見失うまいと、ときには走りながら必死でついてゆく。

どれくらい夜の道を進んだろう。

「ここよ」

巨石がいくつか倒れている場所で、アクアが振り返った。

「ここからラタトスクさまのいるところへ行けるわ」

再び背を向け移動を始めたアクアの後ろで、アステルが囁いた。

「移動距離と方角からすると異界の扉だよ、ここ」

「本当にギンヌンガ・ガップへ繋がっているのか」

リヒターはアクアを完全に信用しているわけではなかった。

「どうだろう、以前は次元の歪みでここからシルヴァラントへ繋がっていたはずなんだけど……もう地続きだしね。世界再生で変化があったのかもしれない。とにかく行ってみるしかないよ」

「そうだな」

ふたりは時折赤い光が明滅するだけの暗い空間を、ぽうっと発光するアクアに導かれて歩き続ける。

「うわ、これって骨だ……！」

ブーツにゴツゴツ当たるものの正体に気づいて、アステルは思わず声を上げた。

「あたり前じゃない。ここは魔物の墓場だもの」

アクアが前を向いたまま応える。
「ラタトスクさまは魔界ニブルヘイムへ続く扉の前にいらっしゃるのよ」
「魔界!? そうか。ここは魔界に続いているのか」
「そうよ。ラタトスクさまは魔界の扉から魔族たちがこちらの世界へ出てこないように見張ってるの。怖気(おじけ)づいちゃった?」
振り返ってアクアがふたりを小馬鹿にしたように笑った。
「どうする? ラタトスクさまはすぐこの先よ」
「行くよ。ここからはふたりで行く。案内してくれてありがとう」
アステルがアクアを見上げた。
「なによ、用がすんだらさっさと帰れっていうの? 人間のくせに、アタシに命令しないで!」
プンプン怒りながらも、彼女はリヒターのところへ来て、
「気をつけてね」
と囁いた。
そこからリヒターとアステルはふたりだけで歩き続けた。やがてアクアから離れてしまうと、
「リヒター」

アステルが立ち止まる。
「なんだ」
「……握手して」
「え？」
リヒターが思わず聞き返そうとしたとき、アステルの細い手が目の前に差し出された。
「なんだ、あのセンチュリオンの話を聞いて怖くなったのか」
「違うよ」
一瞬とまどった後、リヒターはアステルの手をとった。
「こんなことするの、初対面の人たちみたいだね」
アステルは微笑む。
暖かいものが流れ込み、それが再びアステルの中へと出てゆくのをリヒターは感じた。
――循環してるって感じ。
リリーナの言葉が甦る。
「勇気は夢を叶える魔法だよ」
「え？」
ううん、とアステルは笑う。
「ありがとう、さあ行こう。なんとしてでも精霊ラタトスクに僕たちの頼みを聞き届け

てもらわなきゃね」
先に立って、アステルはラタトスクの間へと足を踏み入れた。
松明(たいまつ)のような炎が激しく燃え上がっていた。円形の広間の床には、明滅を繰り返す譜陣の群れ。
なにかの紋章を散らした扉が真正面に見える。八つあるところを見ると、エイト・センチュリオンの紋章なのだろう。扉の向こう側はたぶん、魔界ニブルヘイムだ。いまも何かの気配が向こう側でうごめくのが感じられる。
ラタトスクはマナの調整をすると同時に、魔界から魔族たちが出てこないよう見張るためにギンヌンガ・ガップをつくってここにいることにしたのだろう、とリヒターは思った。
「リヒター!」
アステルが鋭くリヒターを呼んだ。

「見て。いたよ」
リヒターはアステルの視線を辿り――上からこちらをじっと見下ろしている存在を見つけた。
一歩、アステルが前へ出る。
「アステル……」
大丈夫、と彼は拳を握り、コクリと喉を鳴らした。
「あなたが大樹カーラーンの精霊ラタトスクですね」
震える声は存在に届いたようだった。
――……そう、呼ぶ奴らもいたな。
ラタトスクの声は低かったが、空気がびりびりと震えた。その声に反応して扉の向こうが騒がしくなる。
リヒターは、ラタトスクの視線が自分の上に止まったのを認めると、アステルの白衣の肩に自分の肩を並べて立った。
「ラタトスク」
リヒターは精霊の姿を見つめながら、
「今、世界の自然はマナのバランスを欠いて狂い始めている。これをただすにはあなたの力が必要だと推測するが」

と話しかけた。
——……バランスを整えても樹がなけりゃ、世界は滅びるな。
ラタトスクは素っ気なく言い放った。
「新しい樹が誕生したと聞いています」
アステルが再び言った。今度は声を張っている。
「でも調べたところ、新たな樹の精霊にはあなたのようにマナの流れを操る力はないようです」
——……ふん。それで？
「お願いです！　センチュリオンを使ってマナのバランスを整えて下さい。そうすれば、世界は救われる」
ほんの束の間、沈黙があった。次の瞬間、精霊は叫んだ。
——……目を覚ませ、センチュリオンども！　魔物どもと縁を結び、マナを整えろ。そしてこの俺の宿り木を滅ぼした『ヒト』を根絶やしにしろ！
（！　な、なんだと……⁉）
リヒターは自分の耳を疑った。
「な……何を言うんですか！」
横でアステルも真っ青になっている。

――世界が救われればいいんだろう？

精霊は揶揄する調子だったが、

「人間を滅ぼす必要がどこにあるんです！」

というアステルの言葉に激高した。広間を震わせてラタトスクの声が響き渡る。

――大樹カーラーンを滅ぼしたのは誰だ？　人間とハーフエルフじゃねぇか。なら同じように滅びてもらわないとな。

アステルは必死で、

「で、でも、世界には新しい世界樹が生まれました！」

と言い返す。

――そして、それをまた滅ぼすだろうよ、おまえたちは。いいか、そもそもヒトってのは世界にとって害虫なんだよ。

「そんなことはありません！」

傷ついた表情だった。アステルは必死で訴え続ける。

「人間もハーフエルフもこの世界を構成する大切な……」

まずいな、とリヒターが思った瞬間、

――うるせぇんだよ！

ラタトスクの非情な声が轟く。

（っ!?）

リヒターの目の端で、白衣が翻った。アステルがラタトスクの力を食らい、背後に吹っ飛んだのだった。激しく床に叩きつけられ、そのまま転がり続ける。ようやくその体が止まったときリヒターが見たものは、どこか不自然に体の捩れた白い塊——すでに動かなくなっているアステルだった。

「アステル!?」

リヒターは目を見張り、叫んだ。

——ほら。害虫一匹死んでも世界にはなんの影響もない。

「アステルっっ!?」

ふらふらとリヒターの足がアステルに近づく。

——手遅れとわかっているのに何故叫ぶのだ。世界はなにも変わっていないというのに。

足が止まる。

「アステル、アステル」

リヒターが振り向いた。

「……貴様……っ！　よ……よくもアステルを……！」

剣と斧を手にすると、血が沸き返るようだった。リヒターは精霊に向かって突進する。



「うおぉぉおおおおおおおおっ！」

振り上げた剣に、ラタトスクがたじろぐように動いた。鋭い刃は精霊を捉える。

——ぐわぁっ！

ラタトスクを倒したら世界が滅びてしまう。

一瞬、リヒターの脳裏をその事実が掠めた。それでもかまわなかった。

「よくも我が親友アステルをっ！　——陽流・丙！」

振るう斧からゴウッと噴き上がる炎が、ラタトスクの間の床を舐める。だが精霊には効かない。

「くそっ！」

投げつけた斧がラタトスクの足を貫通し、床に留めた。その隙にリヒターは剣を両手で真上に構える。

「タワーリング・インフェルノ！」

相手が誰であろうとかまわない。目も眩む光の帯がラタトスクに襲いかかる。だが、絶妙の間で、

——アイン・ソフ・アウル！

斧を跳ね飛ばしたラタトスクの力が返された。

「うわああああああっっ！！！」

リヒターは、体が粉々になるほどの衝撃の中で最後の力を振り絞る。
死んでもかまわない。アステルはすでに虫けらのような姿で殺されたのだから。
――ちっ！
なおも食い下がるハーフエルフに、ラタトスクが舌打ちしたときだった。
死物狂いで再び振り上げたリヒターの剣がきらめく。
炸裂する光の中でラタトスクがのけぞるのが辛うじて見えた。光が消えたとき、精霊の姿は消えていた。
「どこ、へ……行った……」
はぁはぁと荒い息を吐きながら、リヒターはがくりと膝をついてしまう。
その拍子に、赤く輝く大きな宝石が床に転がっているのが目に入った。
（あれは……何だ……あれ、が……ラタト、スク、か………？）
血の流れるどくどくという音で鼓膜が破れそうだ。リヒターはしばらく蹲っていたが、
（アステル……！）
必死の形相でアステルの元へと這いずり始めた。
（……アステル……!!）
そのとき、頭上を青い影が何度か横切った。気遣わしげなセンチュリオン・アクアにリヒターは気づかない。アクアはそのまま暗がりに姿を隠した。

「アス……テル」

ようやく白衣の裾を掴む。一縷の望みをかけて、リヒターはその捩れた体を仰向かせた。だがアステルは白い顔で目を閉じており、決して動こうとはしなかった。

〝いずれ研究院から世界へ出て行くおまえに、全てを持たせてやろうと思っていた――〟

〝リヒター、きみに全部あげたいんだ。僕が死んだあとも僕の研究は死なせないで――〟

〝双方向どころか、循環してるって感じ――〟

一体これは誰の声だったろう。頭の中で幾重にも反響し、痛みを与える。

「ラタ……トスク……許せ……ん！」

リヒターは転がっていた宝石――ラタトスク・コア――についての知識は持ち合わせていなかったが、それを破壊しておくべきだということはわかっていた。

アステルを抱き上げ、コアのところまで戻ろうと思うのだが、傷のためにすでに意識が朦朧としている彼にはそれができない。それでも必死に体を支え――座っているのが精一杯だった――、コアを見失わないように血に染まった視界を凝視する。

そのとき、黒い影がしなやかに宙から飛び出した。
（あっ!?）
影は素早くコアをくわえて闇の中へ走り去る。
「く……くそ……ぅ。ぐうっ！」
ふと目を落とすと、腕の中のアステルの白衣が真っ赤に染まっている。
なにもかもお終（しま）いだ、とリヒターはようやくはっきりと理解した。二度と彼が生き返ることはないのだ。
それでも叫ばずにはいられない。残りの命を全部使って、空っぽになりたかった。
「アステル！　アステルっ！　アステル――――っっ！！！」
絶叫の余韻がきえないうちに、ぐらりと体を傾かせ、リヒターは床に倒れた。

※

どれくらいアステルの思い出に浸っていたのだろう。
一瞬も、一年も十年も、いまのリヒターにとっては大して変わるものではない。
目を開けると、変わらぬギンヌンガ・ガップの光景が広がっていた。
あのままだったら間違いなく命を落としていた、とリヒターは思い出す。

あのあと、気がつくとセンチュリオン・アクアが心配そうに覗き込んでいた。

「アタシが案内したせいであんなことになっちゃったから……」

瀕死(ひんし)のリヒターを安全な場所に移し、介抱(かいほう)してくれていたのだという。

アクアはリヒターの親友を死なせてしまったことを深く悔やみ、悲しんでいた。だからこそリヒターの話を聞き、心を寄り添わせたのだ。

リヒターが彼に接触してきた魔族と、〝魔界の扉を開けばアステルを甦らせる〟という契約を結んだとき、エイト・センチュリオンのうちの一体であるアクアもまた精霊ラタトスクを裏切り、リヒターに同行する道を選んだのだった。

魔族に渡されたソルムのコアをシルヴァラント解放戦線ヴァンガードの総帥(そうすい)であるブルートに差し出し、そこそこの地位を得た。ラタトスク・コアの捜索——コアを破壊し、ラタトスクを殺して魔界の扉を開くつもりだった——に出ていたおりに、エミル・キャスタニエに出会ったのは偶然ではなかったのだろう。

アステルの顔をしたアステルの仇(かたき)……精霊ラタトスク。

そして現在、その精霊の宿り木としてアステルの死に場所で一〇〇〇年を過ごす自分が、リヒターには次第に定められていたことのように思えてきている。

(今ごろエミルはなにをしているだろうな)

自分の道を定め、マルタと共に進んでいるだろうか。

リヒターには、決して口には出せない密かな望みがある。

エミルがヒトとしての一生を終えたときには、エミルの姿のままでここに戻ってきてほしい――。

年老いたエミルなら、自分が見守るはずだったアステルの人生を垣間見ることができるだろう。

十六歳のままのエミルで戻って来たのなら……、リヒターは薄く笑う。ラタトスクのやりそうなことだ。そのときは一〇〇〇年を超えてここにいてもかまわない。

アステルを育んだ世界のために、アステルと出会わせてくれた世界のために、それが恩返しになるというなら、自分は喜んでそうするだろう。

願わくは解放された世界で、アステルと再び研究に明け暮れる日々を過ごしてみたい。不可能とわかっていても、その想いはリヒターの胸に何度も去来し、あの懐かしい日々へと連れ戻す――。

再びぼんやりしかけたとき、くすくす笑いが聞こえた。いかめしい咳払いの音。再び

くすくす笑い――。

センチュリオン・アクアと、センチュリオン・テネブラエ――あのときコアを砕かれまいとくわえて逃げた――だろう。姿は見えないが感じることはできる。

彼らは他のエイト・センチュリオンたちと共に魔物を操り、世界からマナを切り離す作業にいそしんでいるが、ときおり戻ってきてはリヒターをからかう。彼らなりの気遣いに違いない。

リヒターは額に埋まっているラタトスク・コアに手をやった。

せめてヒトとして生きたラタトスクの幸せな土産話（みやげばなし）を聞くことを楽しみにしていよう。その中にアステルが生きているのを自分はきっと見つけるはずだ、とリヒターは信じた。

第三話　コレット・ブルーネル

風に混じる細かな砂が擦れあう音がする。それらがたてる微かな軋みを、コレット・ブルーネルの耳は聞き分けていた。
（もう朝……）
ほの明るくなった外に目をやり、彼女は腰かけていた宿屋のベッドから立ち上がると窓を開けた。
キンと冷えた空気が襟元から忍び込む。
かつて砂漠の花と呼ばれた街とは思えない寒さだった。
世界再生ののち各地で異常気象が続いているが、ここトリエットでは日に日に寒さが増している。
灼熱の太陽の下ではどんな飲み物より美味だったオアシスの水も、できれば温かく沸かしたいほどの気候だ。
コレットは小さなくしゃみをし、きゅっと身を縮めた。
「ロイド……寒くないかな」
窓を急いで閉めながら、彼女の瞳は視界の中にロイド・アーヴィングを捜す。だが、彼の姿はどこにもない。
（とうとう昨夜も帰って来なかった……一体どこに行ってるの？　ロイド）
コレットは深いため息をついた。

あと一日だけ待ってみようか、とコレットは思う。
(もしも、もしも今日も戻って来なかったら明日早くこの街を出て、いったんイセリアの村に行ってみよう……)
決めてしまうと、眠気が襲ってきた。少しでも休んでおくために、ベッドに体を横たえる。
微かな砂の軋みを自分の心の音のように聞きながら、コレットはまぶたを閉じた――。

※

エクスフィアを探して回収する旅に出て、コレットは世界各地をロイドとふたりで巡ってきた。
無機生命体であるエクスフィアは、再生前に世界中に存在していたものだ。それを装着した者の潜在能力を限界まで引き上げてくれるが、ひとつ間違えばその人間は怪物化してしまう。その危険性もさることながら、エクスフィアが牧場と呼ばれる場所で強制労働させられていた人間たちを糧(かて)に製造されていたことを思うと、コレットもロイドもそれを少しでも早くなくさなければならないという気持ちに駆られるのだった。
そんな旅の途中で、このトリエットに宿をとったのが一昨日の昼過ぎのことだ。

ロイドはいつも一緒にいるノイシュ——彼が犬だと主張して譲らない古代生物——を裏口につなぎ、水をたっぷり与えてから、食堂で遅い昼食をとった。

それからいつもそうするようにふたりは、エクスフィアを探すために街の中を歩き回ったのだった。

他の街でもみられる地割れや隆起している地面に注意しながら、夕方までひと通り民家の建ち並ぶあたりを見て回る。

「ねえロイド、確かあのへんにテントがいっぱいあったよね」

「ああ、露店（ろてん）のな」

コレットが指さす砂地に目をやり、ロイドは頷いた。

「俺、ここで店をやってたおっさんにノイシュを預けたことがある。確かそのあとディザイアンに捕まっちまって……」

「それってジーニアスと一緒だったときだね」

コレットは微笑んだ。

「そうそう。あいつ、自分だけガキのふりしてちゃっかり逃れてさ。もちろん、作戦だったんだけど」

ふっ、とロイドが笑う。

「まだ旅に出たばっかりのころだった。懐かしいっていっていいのかどうかわかんねぇ

けど……」
「ほんとにいろいろあったよね。いろいろあって、ここもこんなに変わっちゃった」
コレットは、日よけのテントを張った店が並んでいたあたりをじっと見つめる。いまはただ黄色い砂が、吹く風に形を変えて渦巻くように動いているだけだ。
「さあ、本格的に動くのは明日からってことにして宿に戻るか。ノイシュが腹をすかせてるだろうし」
「そだね。ずっと移動が続いてたし、今夜はゆっくり眠りたいな」
コレットは言い、宿に向かって踵(きびす)を返(かえ)した。

宿の入り口をくぐると、主人がなにやら荷解(にほど)きをしている。
「ああ、お帰りなさい」
主人は肩をすくめ、あたりに積み上げられた箱をふたりに示した。コレットは、
「なんですかこれ」
と、訊ねた。
「防寒用の品々ですよ。長袖の服とか、燃料とか。ここでも売ろうかと思ってね」

「へえ、ほんとだ」
ロイドは勝手に箱を覗き込んで、温かそうな毛糸の上着を手に取る。
「まったく、長袖を着る日が来るなんてねぇ。寒いってことは物入りってことなんだとよくわかりましたよ。宿代(やどだい)も値上げせにゃならんかな」
「えっ、それは困るなあ」
ロイドが上着を戻すと、主人は笑い出した。
「ははは。お客さんたちはまだ大丈夫ですよ。このまま雪でも降り出したらの話」
「よかった～」
コレットが笑うと、主人は、
「あ、そう言えば」
と、受付のカウンターの中に入り、棚から一通の封書を手に取る。
「お客さん、ロイドさん？　ロイド、ええと、アーヴィング」
表書きを読む主人に、
「俺だよ。誰か来たのか？」
と、ロイドは手を伸ばした。
「お客さんたちが出かけてしばらくして届いたんですよ。持って来たのは使いの子だったけど」

「そうか。ありがとう」
ロイドは封筒を裏返し、ふっと考える目になる。覗き込んだコレットが、
「差出人の名前、書いてないね」
と、首を傾げた。
「ああ。開けりゃわかるさ。それよりコレット、悪いけどノイシュを見てきてくれないか」
うん、とコレットは頷いた。先に客室へ戻るために階段を昇ってゆくロイドの背中を見て、ゆっくり手紙を読みたいのだろうと思う。幼馴染ではあるけれど、その程度の節度を持ち、自然な距離はいつも置いてきたのだった。
コレットは主人に頼んで厨房(ちゅうぼう)にある残り物を貰うと、宿の裏口に回る。そして、待ちかねて尻尾を振っているノイシュに向かって駆け出しかけた。
「あっ」
そこに置いてあった、水を張ったバケツにつまずいてしまう。
「いけない。こぼしちゃった」
コレットはノイシュに向かって「えへへ」と笑いかけた。

夜にかけて、ロイドに特別変わったところはなかった、とコレットは思い出す。
もう何度も何度も自分に確かめたことだ。
あれから――、ノイシュに食事を与え、飲み水を新鮮なものに替えてやったあと部屋に戻った。
ロイドはすでに手紙を読み終わっていたのだろう。封筒は見当たらなかったし、コレットも何も訊ねなかった。
「ノイシュ、やっぱりおなかすかせてたよ」
「そうか」
ロイドはにこっとする。
「昼飯を少し残してやるつもりで、全部食っちまったんだ。野宿するときは絶対忘れないのになあ、あいつのメシのこと」
「うん。一緒に食べるもんね」
コレットは、焚き火(たびび)の灯り(あか)に照らし出されるノイシュの、美しい薄緑の柔らかな毛並みを思い出し、微笑んだ。

「ほんとはあいつも部屋に泊まれればいいんだよな」
「それは……いろいろ無理なんじゃない？」
コレットが苦笑すると、
「まあな。さすがにあんなでかい犬と一緒はダメだよな」
ロイドはあっさりと頷いた。
しばらくしてふたりは夕食をとり、昼間話していた通りに早めに眠ることにしたのだった。
いつものコレットなら、夜中に出て行くロイドがたてる物音を聞き逃しはしなかっただろう。だがあの夜は疲れていたし、きっと夜じゅう吹き荒れていた冷たい風の音に消されて気づかなかったのだ。
朝早く目覚めてみると、隣のベッドで寝ていたはずのロイドの姿が消えていた。散歩にでも行ったのかと思ったが、彼がコレットより早起きすることはまずない。いつも出発ぎりぎりまで寝ていて、朝食を掻き込むように食べるのだった。
（ノイシュのところかな？）
コレットは宿の外へ出ると、裏口に回ってみた。
「いない……」
ノイシュがつながれていた杭だけが、寒々とした地面に立っている。

（一緒に散歩に行ったのかな……でも、こんなに寒いのに……）
ひとりの少年に声をかけられたのは、そのときだった。
「どうかしたの」
「えっ」
驚いて声のする方に目をやると、十歳くらいの男の子が首を傾げてこちらを見ていた。
「さっきから杭ばっかりじーっと睨（にら）んでてさ」
「え……あ……、そ、そんなにずっと見てたかな？」
コレットは恥ずかしそうに笑い、
「えっとね。ここにいた犬……じゃなくて大きな動物、知らないかな？」
と少年に訊ねる。
「それって昨日の昼間いた、白と緑のやつのこと？」
「そう、そうだよ！　知ってるの？」
うん、と彼は大きく頷き、
「ちょっと前からこの近くに泊まってるからさ。おれ、テグっていうんだ」
と、胸を張った。
「テグ？」
「そう。たしか昔はクラテグスなんとかっていう長い名前だったんだけど……」

「うん？」
コレットは思わず興味をひかれ、テグの顔を覗き込んだ。
「母ちゃんは世界再生のとき行方不明になったままだし、父ちゃんもふた月前に死んじゃったんだ。父ちゃんにも母ちゃんにもテグって呼ばれてたし、もう、それでいいやって」
「いい名前だよ。よろしくね、テグ。私はコレット」
コレットが名乗ると、テグはにやりとした。
「へえ。おねえちゃん、再生の神子さまと同じ名前なんだ」
「あ、うん……」
「お互い、名前には苦労するよな」
「ふふふ」
コレットとテグは顔を見合わせて笑った。
「それで？　あの動物がどうかしたの？　おれが来たときはもういなかったよ」
「そう。それじゃやっぱりロイドが……」
「ロイド？」
テグは聞きとがめ、
「それってここに泊まってるロイドって人のこと？」

と聞いた。
「うん。どうして知ってるの」
「昨日このあたりをぶらぶらしてるとき、頼まれて手紙を受付に届けたんだよ」
「そうだったの」
宿の主人が言っていた使いの子というのはテグのことだったんだ、とコレットは思った。
（あれ……？　ひょっとして、あの手紙とロイドが出かけたのと、なにか関係があるのかな）
「どんな人に頼まれたの？」
「さあ……身長も歳もおれよりは絶対上で……すぐ行っちゃったからよく覚えてないけど、マント着てたかなぁ。きっと寒かったんだろ。顔は……うーん、わかんないな」
「そっか……」
要領を得ない説明に、コレットは軽いため息をついた。
「で、ロイドって誰？」
テグはまっすぐにコレットを見上げる。
「私と一緒に旅をしてる人だよ。ここにいた動物はノイシュっていって、ロイドのなの。朝の散歩に行ったらしくて、今はどっちもいないけど」

「なるほどね。おねえちゃん、置いていかれてガーンってなってたわけか」
テグは笑い、それからハッとなった。
「いけねぇ！　こんな話してる場合じゃなかったんだ！」
「ど、どうしたの!?」
「ロイドとノイシュが帰って来るまで手伝ってくれない？」
「うん、いいよ」
話も聞かずに頷くコレットに、テグはちょっと目を丸くしたが、やや離れたところにある——裏口の扉の近くだった——木箱を指差した。大人でもひと抱えはあろうという大きなものだ。
「あれ見てよ。おれの大切な商売物なんだ」
テグは行商人だった父親の仕事を継ぎ、五日ほど前に木箱を担いでトリエットにやって来たという。泊めてもらっている知り合いの商人の家が手狭なため、荷物を宿の主人に頼んで裏庭に置かせてもらっていたらしい。
「取り引き場所が別の街になったって昨夜遅く連絡が来て。だからすぐ出発しようと思って取りに来たんだけど」
「すごく大きい箱だね。重くて持てないの？」
「バカにするなよ！　おれに持てない荷物なんかねぇ！」

テグはまだ筋肉が充分ついていない腕を振り回して憤慨(ふんがい)し、それから急に子供らしい顔つきになると、
「夜のうちに凍りついちゃったんだよ……」
と、うなだれた。
「……ほんと。ものすごい氷だね」
コレットは身をかがめると、木箱が白く凍りついているのを認める。
「でも、凍ってるのは下だけなんだから、蓋(ふた)を開ければいいんじゃない？」
「ダメなんだ。これ、底から開ける箱なんだよ。蓋ごとくっついちゃってる」
確かに、地面から盛り上がった氷がぐるりと木箱の周りを囲んでいた。これでは動かすことも中身を取り出すこともできないわけだ。
「中身はなに？」
「それは秘密だ。どこに商売仇(がたき)がいるかわかんないからな」
テグは言い、
「ああ、でも昨日ノイシュに少ーしだけ分けてやったぜ。ちょうどおやつの時間だったし、あいつ、わふわふ言いながらヨダレたらしてたからさ」
と、思い出し笑いをする。
「ありがと。食べ物なんだね」

「あ、しまった」
テグはさっと頬を紅潮させたが、すぐに怒りの表情を見せる。
「どこかのバカが水を撒きやがったんだ。この寒いのにご丁寧に！　それが夜のうちに凍って！」
「なるほどね……あれ？」
コレットは宿の裏口と木箱を交互に見、首を傾げた。
(たしか昨日は裏口の扉の近くに、バケツが置いてあったよね……)
「ああっ！　私だ！」
「え？」
突然叫んだコレットに、テグが驚く。
「私だよ、水。水こぼしちゃったの、夕方。ここにあったバケツにつまずいて……でもテグの荷物があったなんて知らなかったからそのままにしちゃって……ごめんね」
「なんだ……マジかよ、おねえちゃんだったのか」
テグは怒りの矛先をどこに向けていいのかわからなくなったように、指折り数えながらつぶやいた。
「どうしよう。ものすごく急いで走って行くとしても……あと二日でここを発たないと間に合わないのに……」

ほんとにごめんなさい、とコレットは頭を下げた。

「私、ここのご主人になにか借りてくる。ハンマーとかツルハシとか……」

「ダメ！」

テグはものすごい速さでコレットの腕を掴む。

「そんなの使ったら箱が傷ついちゃうじゃないか。おれもプロだから中に入ってる商品の震動や防水対策は完璧にしてあるけど、箱がなくなるのは困るんだよ」

「じゃあどうしたら……」

「だから、いまそれを考えてたらおねえちゃんが来たんだ」

「そ、そっか」

コレットは木箱の前にしゃがみ込むと、そっと押してみた。やはりびくともしない。

「壊すのはダメだけど、傾けたり揺らしたり、濡れちゃうのは大丈夫ってことだね？」

なぞなぞみたいだと思いながら、コレットは考えた。しばらくして、

「濡れてもいいんだし、やっぱりお湯をかけるしかないいんじゃないかな？」

とテグを見上げると、彼も頷いた。

「そうだな。じゃあいったん解散して、お湯持って集合。おれ、朝飯食ってくる」

小走りに駆けてゆく少年の後ろ姿を見送ってから、コレットは立ち上がる。

（朝ごはん……ごはんには戻って来るよね）

彼女は急いで部屋に戻ってみた。ロイドが戻ってきた形跡はない。それから再び階下に降りると、食堂を覗く。すでに朝食の用意はできており、早発ちの旅人たちが席に着いていたが、やはりロイドの姿はなかった。

（もう、ロイドったらなにやってるの）

午前中のエクスフィア探しに支障がでることを前もってロイドに伝えておきたかったが、仕方がない。テグが戻ってくるまでに準備をしておかなければならない。

コレットは微かな苛立ちを覚えながら、湯を沸かしてもらうために厨房に入った。

その日はロイドを捜しに街へ出た午後の数時間を除いて、テグと一緒に過ごすことになった。

木箱のまわりに、ちょろちょろと湯をかけ——テグは大きなやかんを借りてきていた——、少しずつ氷を溶かしてゆく。コレットはこの分ならすぐに作業は終わるだろうと思っていたのだが、おかしなことに溶かしたはずのところがいつの間にかがっちり凍りついているのだった。

「どう考えてもおかしいよ、コレット」

テグが思い切ったように口を開いたのは、昼少し前になってからだった。
「ここってもともと砂漠の街だったろ？」
「うん。砂漠の花って呼ばれてたんだよ」
コレットは照りつける太陽と熱砂の匂いを思い出しながら答えた。
「おれ、前に来たのうんとチビのころでさ。でも覚えてるよ。暑さでへばったおれを父ちゃんがおんぶしてくれて」
テグは「よいしょ」とやかんを地面に下ろすと続けた。
「生まれて初めてアイスキャンディーを買ってもらった。そんですげー腹こわした」
「かわいそうに」
コレットはそう言いながらも、なんだかおかしくて笑ってしまう。
「だからよけい覚えてるんだよ。腹が痛くて、すごく暑くて。たしかここってイフリートってやつのせいで暑かったんだろ？」
「……よく知ってるね」
コレットは木箱に手をかけながら微笑む。
「それなのに世界再生っていうのがあって、あちこちめちゃくちゃになった。天変地異、だっけ？　おれ、地割れに落ちそうになったし、洪水みたいな大雨にも遭ったよ」
「うん……」

そっと目を伏せたコレットには気づかず、テグは拳を握りしめた。
「そりゃ仕方ないと思うよ。トリエットだけがおかしいんじゃないからさ。でも、いくらなんでもここはヘンだよ」
「ここって？」
コレットが聞き返すと、テグは黙って木箱の下のほうを指差した。
「まわりを見回してみてよ、コレット。いくら寒いったってどこにも氷なんかないのに、この箱だけがいつまでも凍りついてるなんておかしいだろ」
「……うん」
確かにそうなんだよね、とコレットは思う。
（普通の氷と違うのかな……）
コレットは片手の手袋（グローブ）をはずすと、ひとさし指でそっと氷に触れてみる。
「あっ」
「どうしたコレット」
「指、くっついちゃった！」
「えっ。バっ、バカだなあ！」
テグがあわててやかんの湯を氷にかけると、表面にぴたりと吸い付いていた指が離れた。

「あはは、ごめん。私って昔からドジなの」
そんなこと言って、とテグは横目でコレットを見る。
「うわの空なんじゃないか？　ロイドのことばっかり考えててさ」
「あ……そんなことないよ、うん」
コレットはあわててまだ温もりの残っている手袋に手を突っ込むと、
「ロイドのことは、あとで街の中を捜してみるつもりだし、だいじょぶだよ。私、もう一度お湯貰ってくるね」
と、そばに置いてあった空っぽの鍋を掴みあげた。

「うわああ！　大変だよ、コレット！」
翌朝、コレットはテグの叫び声で目を覚ました。帰って来ないロイドを待ってようやくうとうとしたのが明け方だった。
昨日は午後から街を歩いてロイドらしき人物を見かけなかったか聞いて回ったのだが、

ひとかけらの情報も摑むことはできなかった。宿にも伝言ひとつ届いてはいなかった。
「早く来て！　大変だ！」
声は裏庭のほうから響いてくる。コレットは急いで起き上がると、宿の裏口へ急いだ。
裏口の扉を開けるやいなや、コレットは待ち構えていたテグに外へと引きずり出された。
「痛たたた。おはよう、テグ」
冷え切った空気に、息が白く見える。
「のんびり挨拶なんかしてる場合じゃないよ。あれ見ろよ」
「なに……え、ええっ⁉」
コレットはテグの視線の先にある木箱に目をやって、驚きの声をあげた。
「な、なにあれ？　なんで⁉」
昨日、夕方までかかってもとうとうピクリとも動かすことができなかった木箱を、ふたりは放置して——夜の間にさらに凍りつくのは覚悟のうえで——それぞれ帰ったのだった。
それがどうだろう。予想をはるかに超えた量の氷が幾重にか層を成し、まるで木箱を包むように伸びている。
「どうしてこんなことになっちゃったの」

「わかんねえ……」
テグは最初の勢いはどこへやら、力なく首を振った。が、思い出したように顔を上げ、
「ロイドは？　ゆうべ帰って来たのか？」
と訊ねた。
ううん、とコレットも首を振る。
「そっか。ノイシュがいないからそうだろうなと思った」
繋がれるもののいない杭に目をやり、テグはため息をついた。
「ううん、心配ないよ。きっとなにか急用ができて、ちょっとよそへ行ってるんだと思う。ロイドは私に黙ってどこかに行っちゃうような人じゃないもの」
コレットは握りしめた両の拳を上下させながら力説する。
「なにムキになってるんだよ」
テグは、ふっと笑い、
「わかってるよ。待ってれば戻ってくる人なんだろ」
と、木箱に向き直る。
「この氷、花みたいだなあ。母ちゃんが好きだった花にちょっと似てるかも」
「…………」
(テグ……。テグのご両親はもう戻ってこないんだね)



ロイドがほんの少し留守にしたくらいで騒ぐのは大人げないかな、とコレットは反省した。そして少年のほっそりした背中を見ながらしみじみしていると、くるりと彼が振り向いた。
「おれ、なんだかこの氷を溶かすの、無理な気がしてきた。でもあと一日だけやってみることにする」
「もちろんだよ。私も手伝うからね」
「ありがとう」
ふたりが自然に握手を交したときだった。裏口の扉が開いて、コックが顔を覗かせた。手にベーコンの塊(かたまり)を持ったままだ。
「朝っぱらからなにを騒いでるんだ……!?」
コックは氷の塊を見つけると、目を丸くしながらコレットたちの方へ歩いてきた。
「驚いたな。お客さん、昨日あんなに湯が必要だったってのは、ひょっとしてこれかい?」
「そうなんです。氷を溶かそうと思って。昨日はこんなじゃなかったんですけど……この場所だけ凍っちゃうみたいなんです」
と、コレットが説明する。
「へええ。この街でこんなものを見るなんて……なんだか知らないけど、すごいもんだ

なあ」
　コックは氷のまわりを一周したり、中央にある木箱を透かし見たりしていたが、
「あれっ、そういえば……」
　と、立ち止まり、腕組みをした。
「確かこの場所、以前は特に暑くなるところだったよ。水を置いとくだろ？　あっという間に沸かした風呂みたいになっちまうんだ」
「………」
　コレットはテグと顔を見合わせた。
(すごく暑いところからすごく寒いところへ、極端に変わっちゃったんだね)
「イフリートの呪いだって、前にここで働いてたヤツは言ってたけど、どうだかなぁ。あのときはともかく、こんなに寒いのはあのひどい世界再生のせいだ。あれ以来世界がおかしくなっちまったとしか思えないね」
　コックがぼやいていると、男の声が聞こえてきた。宿泊客が数人、こちらへやって来るところだった。彼らはコックを見つけると、
「いたいた。おーい、注文した朝飯はどうなってるんだ？」
「急ぐんだけどなあ」
「ああ、いけない！　料理の途中だったのをすっかり忘れてた」

コックは手にしているベーコンの塊に目を落とすと、あわてて厨房に戻りかける。
そのとき、低く垂れ込めた雲がゆっくりと動いた。コレットたちがいる裏庭に薄日が差し始める。木箱を包み込んでいる氷は僅かな光を受けると、まるでこれからさらに花弁を開こうとしている花のように生き生きと輝き出した。
「うわあ、芸術作品だね」
「彫刻……とも違うみたいだけど、お嬢ちゃんたちが作ったのかい？」
「どっちかというと飴細工みたいじゃないか」
客たちの視線は氷の花に釘付けになる。
「きれい……だな」
テグの声は心なしか震えているように聞こえた。コレットも深く頷く。
「……あ、と、とにかく俺は仕事に戻るよ。お客さんたちも、食事はすぐできるからどうぞ中で待っててください」
コックは明らかにこの場を去りたくない様子で言い、コレットに向かって付け加えた。
「もしまた湯が必要なら、いつでも取りにくるといい」
「ありがとう」
コレットはコックと宿泊客たちを見送ってしまうと、軽いため息をもらす。
(でも、こんなにキレイだと溶かしちゃうのがもったいないなあ……。ううん、テグに

は荷物が必要なんだもんね）
　コレットはふるふると首を振り、もう一度氷の花を間近で見ておこうと一歩踏み出した。
「あっ、危ない！」
「⁉」
　テグが叫ぶのと、上体だけがぐっと前へ出たのはほとんど同時だった。ほんの少しの地面の隆起にブーツのつま先が引っかかったのだ。
「きゃあ～」
　コレットの体はそのまま前へ飛び、氷の花びらの付け根へと、まっすぐ伸ばした両手から突っ込んだ。
　パリ――――ンッ！
　氷が砕け散る澄んだ音が響く。コレットの体はつるつるに凍りついた地面の上でくるりと反転し、そこで止まった。
（あ…………）
　仰向けになった顔の上に、粉雪のように繊細な氷の粒が舞い落ちる。それはキラキラと輝きながら、コレットを静かに濡らした。
（キレイ……）

「大丈夫か!? コレット!」
テグが駆け寄り、コレットの両手を掴んで引っ張り起こす。
「だいじょぶだいじょぶ。えへへ、転んじゃった」
コレットは立ち上がりながら、
「そ、それよりごめん。きっと木箱、傷ついちゃったね」
と、あわてて振り向いた。
「それが、見てくれよ。氷は根元からパッキリ割れて、箱は無傷みたいだ」
テグはパリパリと氷を踏みながら木箱に手をかけ、「よいしょ」と力を入れる。するとあれだけ凍りついていたはずの箱が、難なく持ち上がった。
「やったぁ、取れたよ!」
コレットが叫ぶ。
「……うわ」
彼は驚き、それからうれしそうに笑う。
「なんだか知らないけど、転んでくれてありがとう、コレット。昨日あんなにお湯かけて頑張ったのは何だったんだろうな」
「ふふふ、ホントだね」
「とにかく助かった。これで父ちゃんが続けてきた商売を潰さなくてすむよ」

テグは安全な場所に木箱を下ろすと、器用にそれを底からこじ開けた。
「お礼にこれ、食べてよ。初めておれが加工したんだぜ」
現れた包みをごそごそと開け、彼は薄赤色をした短い棒状のものを数本コレットの手に握らせる。
「えっと、なにかなこれ。初めて見るよ」
「サンザシの実だよ。形を整えて砂糖を少しまぶしてあるんだ。おいしいよ」
コレットはそっとサンザシを齧ってみた。甘酸っぱい味が舌の上に広がる。
「……おいしい」
にっこり笑うと、テグは急にどぎまぎしだした。
「……そうか。父ちゃんがこれをうちの目玉商品にした訳がやっとわかったぜ」
「うん？」
「サンザシの花言葉は『ただひとつの恋』っていうんだ。何度も父ちゃんに聞いてたのに、ぜんぜんピンとこなかった」
（ただひとつの恋……）
コレットは心の中で反芻してみる。
（そっか。テグのお母さまはサンザシの花が好きだったんだね……）
氷の花に似ていると言っていたのもその花のことかな、とコレットは思った。

（私が育ったイセリアの家もお花に囲まれてたなあ。おばあさま、育てるのが上手だったから。あの村にはみんながいて、ロイドともいつも一緒で……）
「あっ、いまロイドのこと考えてたろ！」
「ちっ、違うよ。別のことだもん！」
テグに図星をさされて、コレットはあわててそっぽを向いた。
「……ま、いいけどさ」
手早く木箱を閉めるテグの表情がほんの少し口惜（くや）しげなことに、コレットは気づかない。
「おれ、支度（したく）ができしだい、この街を発つよ。コレットはその……ひとりで平気？」
「え？」
テグに向き直り、コレットは笑う。
「もちろん、平気。ひとりで待てるよ。ロイドだってもうすぐ戻ると思うし」
「そうだよな……それじゃあ、いろいろありがとう」
「ううん。元はといえば私のせいだもの。ごめんね」
テグは木箱に紐をかけ、慣れた様子で背負うとコレットに背を向けて歩き出した。そして宿の敷地から出る少し前に、振り返る。まるでコレットがずっと自分を見ているのを知っていたように、ぴたりと視線を合わせた。

「さっきの花言葉のことだけど」
「え?」
首を傾げるコレットに、テグは、
「『ただひとつの恋』のほかに、サンザシにはもうひとつ花言葉があるんだ」
と言った。
「へえ、どんなの?」
「『希望』」
「……希望?」
そう、とテグは頷き、
「いま作った話じゃないぜ」
と笑う。コレットもつられて微笑み返した。
「さすがサンザシ屋さん。詳しいんだね」
「じゃあな、元気で。ノイシュにはもう一度会いたかったなあ」
コレットが手を振るとテグはあっさりと前を向き、歩いて行ってしまった。
生意気(なまいき)な口をきいていたけれど、まだまだ伸びきらない背丈は木箱にほとんど隠れてしまっている。
少年の未来に幸運が待っているよう、コレットはそっと祈った。

※

「ノイシュ！」
草地につながれているノイシュを見るなり、コレットは駆け寄った。
ここはいつもロイドがイセリアにいるとき、日差しの暖かい時間にノイシュを連れてくる場所だった。
「本当に、ロイドはひとりで行っちゃったんだね？」
クゥ～ン、とノイシュが鼻先を押しつけてきて淋しげに鳴く。
コレットはその柔らかな首に頬を寄せた。
トリエットで突然姿を消してしまったロイドを三日待ったあと、彼女はまっすぐにふたりの生まれ故郷であるイセリアの村を目指し、ついさっき戻って来たのだった。
ところがロイドの父親であるダイクによると、ロイドは帰ってくるなりノイシュを預けてどこかに旅立ってしまったらしい。行き先は告げなかったという。
(もっと早くここに戻って来ればよかった――！)
トリエットで時間を無駄にしてしまったのが悔やまれた。
「どうして私に黙って行っちゃったの？　何があったのか、言ってなかった⁉」

クゥゥ〜〜ン……、とノイシュが情けない声を出して後ずさる。
「あ、ごめんごめん。怒ってるわけじゃないの。だいじょぶだよ」
コレットはノイシュの背中を優しく撫でてやった。
「そだ。いいものがあるよ」
ポケットを探り、サンザシの実のお菓子を取り出す。
「これ、ノイシュもあの子にもらったんでしょ？」
わふっ、とノイシュが興奮して応えた。
「食べていいよ。半分こね」
コレットはサンザシを半分に折ると、ノイシュに食べさせてやった。それから手のひらの上の残り半分をじっと見つめる。
（ロイド……これはロイドにあげたかったのに……）
「……そうだ、ここにいないなら、いるところまで行けばいいんだよね——この世界のどこに行ったのかわからないけど、私、ロイドを捜しに行ってくる」
顔を上げると、サンザシを飲み込んだノイシュが青い草の中にぺたんとすわり込むところだった。
「疲れちゃったんだね。ノイシュはゆっくりお留守番しててね」
コレットはノイシュのかたわらに腰を下ろすと、

「ねえ、知ってる？　今食べたサンザシの花言葉——」
その長い耳へと唇を寄せ、あの少年に教えてもらった花言葉のひとつを口にした——。

第四話　マルタ・ルアルディ

石畳（いしだたみ）を走る足音が近づいてくる。酒屋に飛び込んできたのは、パルマコスタ軍の軍服に身を包んだ若い男だった。

「おい、ワインをくれ。いちばんいいやつだぞ！」

息を弾（はず）ませた軍人に、店にいた客たちの視線が集まる。

「今日は軍でなにかあるんですか。昼間っからワインだなんてうらやましいねえ」

店の主人は、棚からとっておきのワインを取ると、訊ねた。

「あら、でもうちは軍の御用達（ごようたし）ですからね。行事があるなら、注文が入っているはずだけど」

おかみが首を傾げる。

「軍は関係ない」

若者は上気した顔で答えた。

「子供が生まれたんだ。俺の跡継ぎだぞ！」

「まあまあ。そうだったんですか。それはおめでとうございます」

おかみが相好（そうごう）を崩した。ちらちらと男の様子を窺（うかが）っていた客たちの間にも、和（なご）やかな空気が戻ってくる。

「それじゃあ綺麗にリボンをかけなくっちゃね」

必要ない、と男は足踏みせんばかりに遮（さえぎ）った。

「あっちの角の店にもワインを置いてあるだろう？　寄っていかないとな。とにかくパルマコスタ中のいいワインを全部買い占めたい気分なんだよ」
「……」
主人とおかみは顔を見合わせ、苦笑しながらワインの瓶をそのまま手渡した。
支払いを済ませて店を出ると、
「おーい！」
男を呼ぶ声がした。やはり軍服を着ており、両手に五、六本ものワインの瓶を抱えている。
「遅いぞ、ロン」
男は笑った。
「次の店に行くぞ」
「待てよ。少しは自分で持ってくれ。落としそうで走れないんだよ」
「縁起の悪いことをいうな。今日は俺の跡継ぎが生まれためでたい日なんだぞ。そもそも我が家はな……」
「知ってるよ」
ロンと呼ばれた男はようやく男と肩を並べると、
「シルヴァラント王家の末裔なんだろ。聞き飽きたよ」

と呆れながら言った。
「それより早く家に帰ってやれよ。俺が連絡を受けてからもうずいぶんたつぞ。だいたいおまえ、酒飲まないじゃないか」
「これは、別さ。今日の日に買ったワインを、いつの日か跡継ぎの息子とふたりでだな……」
「待て。ちょっと待て」
ロンは男の前に回りこむ。
「軍本部でもやたら跡継ぎ跡継ぎって言ってたから、なんか変だと思ってたんだが……いいかよく聞け、生まれたのは女の子だぞ？」
「え」
男の顔が一瞬固まる。
「俺はあのときちゃーんと伝えたからな。おまえが勘違いして飛び出したんだぞ。心配してついてきてやったってのに、荷物持ちなんかさせて……。おい？」
「……」
「どうした。男の子じゃなかったのがショックか」
「いや」
男は頬を紅潮させて首を振った。

「うれしぃよ……娘か。やった！　娘だ！」
「なんだ。どっちでもいいんじゃないか」
ほっとした拍子に、ロンの手からワインが一本するりと落ちた。
「あっ！」
石畳の上で、瓶は粉々に砕ける。濃い葡萄色の液体が飛び散った。
「しまった。高級品なのにもったいないことを……」
立ち昇る芳醇な香りがふたりを包む。
「祝いだ。気にするな、ははは」
男はよく晴れた空の下、幸せな笑い声をあげた。ロンもつられて笑ってしまう。
「おまえ、匂いだけで酔ったんじゃないのか、ブルート」

※

マルタ・ルアルディはパルマコスタで生まれた。大陸の南に位置する港街だ。
頑丈な造りの灯台や、港の設備、宿泊施設など、船乗りたちにとっては特に便利に使える街だった。
マーテル教会の隣にある総督府は、ドア総督の下、住民と旅行者の世話や税金の管理、

軍用船の運用など、かなり細かく組織され、機能している。おかげで人々はよく整備された石畳の続く道を歩き、軒を連ねた店に入れば各地から運ばれてきた豊富な品物を簡単に手に入れることができた。

マルタが産声をあげたとき、父親のブルートはパルマコスタ軍の陸上勤務についていた。謹厳実直で正義感の強い彼は、有事の際に支障が出ると困るという理由から、普段は一滴の酒も飲まない。だが、報せを受けた彼は家に帰る許可を貰ったにもかかわらず、街中の酒屋を回って、祝いに特産品のパルマコスタワインを買い漁ったそうだ。マルタはそれを父親の同僚だったロンから、のちに笑い話として聞かされた。

庭付きの家にはマルタが生まれる前から子供部屋が用意されていたし——海が望める、明るくて清潔な部屋だった——、ベッドも服もおもちゃも潤沢にあった。

「うちのパパほど子煩悩な人はめったにいないわよ」

小さなマルタは母親からよくそう言って聞かされたものだった。

愛情をいっぱいに注がれて育つということは、ときになんと哀しいことなのだろう、とマルタは思う。

両親との幸せな思い出なら数え切れないほどある——。

マルタの母親は手先が器用で、料理はもちろん、マルタの服もすべて手作りしていた。季節ごとの庭の草花も、潮風に強いものを選んで見事に開花させた。

マルタが最初に作った料理はおままごとのケーキだった。ルアルディ家のケーキはいつもクリームのほかに庭で摘んだ小さな季節の花や、果物(くだもの)が載っている。マルタは庭に出て泥のスポンジ台を作ると、見よう見まねで庭の花を引きちぎって上に載せた。

「パパ、たべて」

ちょうど一週間にわたる海上勤務を終え、久しぶりに帰宅したばかりのブルートは、娘にふるまわれたケーキに大喜びした。

「ぱくぱく、もぐもぐ……ごっくん」

勤務先ではとても見せられない仕草(しぐさ)で、ブルートは泥んこケーキを食べるふりをする。

「ママ、マルタは天才だよ。いまから料理を仕込めば相当な腕になるぞ。そうだ。明日は休みだし、これから材料を買いに行こう」

「ほんと？　マルタ、ママのクッキーがつくりたいの」

マルタは褒(ほ)められたことを真(ま)に受け、くるりとした目を輝かせた。

母親の焼くプレーンなクッキーが大好きだった。篩(ふる)った小麦粉に砂糖とバターと卵を入れただけなのに、なぜあんなにおいしくなるのか、いつも不思議に思っていた。

「クッキー？」
母親は泥んこケーキの皿をさり気なくテーブルの隅におしやり、
「おやつはいま食べたでしょ。今度はごはんにしましょう。オムレツなんかいいんじゃないかしら？」
と提案する。
オムレツかぁ、とマルタは小首をかしげて考えていたが、にこっとした。
「じゃあそうする。このあいだパパにもらったリボンをつけていってもいい？」
「いいわよ。結んであげるから取っていらっしゃい」
微笑みながら母親は、ブルートの頬についた泥を指先でぬぐってやった。
三人で家を出たときには、すでに夕刻が迫っていた。石畳の道を商店のある港の方へ向かってぶらぶらと歩く。
「最近はどうなの？　海より陸の勤務のほうが大変なのかしら」
「そうだな。牧場もなにかときな臭いしな」
「きなくさいしなー」
マルタはブルートの真似をして、けらけらと笑う。母親はブルートに肩車されている娘を見上げ、スカートからのぞいている素足を優しくぽんと叩いた。
食料品から雑貨まで手広く扱っている店に入ると、時刻のせいか客で賑わっていた。

マルタは床に降ろしてもらい、母親と手をつないで店内を見て歩く。
「クッキーはこの次ね、マルタ。どうやって作るか知ってる？」
「しってるよ。わたし、いつもママのみてるもん。こなに白いのと黄色いのをいれて、ぐちゃぐちゃまぜてやくと茶色くなるんだよ」
「……その通りよ」
母親は、後ろにいたブルートと顔を見合わせて笑った。
そのとき、マルタと同い年くらいの黒髪の男の子が走ってきて、危うくマルタにぶつかりそうになる。
「エミル、そっちじゃないわよ。釣り針はこっちよ」
母親らしき人の呼ぶ声に、男の子はくるりと方向転換して戻ってゆく。
「元気ね、男の子は」
「ママ、あの子がぶつかりそうになって、リボンほどけちゃった」
「あらあら」
母親はすぐにマルタの前にしゃがむと、リボンを直してやる。目の高さが同じになると、
「マルタ、ほんとはママのかみかざりがほしい」
と、マルタは母親がつけている白い花の髪飾り（かみかざ）りを指さした。

「これはダメっていつも言ってるでしょ？　大事なものなの、思い出の品。ごめんね」
「うーん、つまんない」
「もしマルタが大人になってもまだ欲しかったら、そのときはあげるわ」
母親は言い、頭を撫でてくれた。
買い物をすませ——卵とバターはブルートが選んだ——、外に出ると夕陽が海に沈んでゆくところだった。マルタはブルートに肩車されて幾度パルマコスタの夕陽を見送ったろう。長身の父親の肩にいると、空がぐんと近くなる。海の中に沈んだ夕陽まで覗けそうな気分になるのだった。

マルタが突然激しい腹痛を起こしたのは、その夜もかなり遅くなってからのことだった。買い物から帰ると軍からの伝言が届いており、ブルートは数時間家を空けていた。
「あなた。マルタが……！」
「どうした!?」
妻の顔を見て、帰宅したブルートは娘が寝かされているソファへ駆け寄る。
「マルタ、大丈夫か？」
「パパ……」
マルタは海老（えび）のように体を丸めていたが、うっすらと目を開けた。

「お腹(なか)が痛いなんて、一体なにを食べたんだ？」
するると、背後から母親が答えた。
「オムレツよ」
「ああ、そうだった。一緒に料理をしてやれなかったんだった」
ブルートは、
「この時間じゃどこの医者も診(み)てくれないだろう。無用心(ぶようじん)だから夜は扉を開けないよう通達を出したのは軍だしな……」
と、ちょっと考え、
「よし。軍本部まで連れて行こう」
と脱ぎかけた軍服を再び着込んだ。
「本部って……こんな小さな子を診てくださるの？　こんな時間に？」
「軍は年中無休だよ」
ブルートは妻を安心させるように笑ってみせ、
「それに今日は総督夫人が来ていたから、軍医もまだ残っているはずだ」
と、つけ加えた。
「さあ、マルタ」
マルタは母親に抱き上げられ、ブルートの大きな背中に下ろされる。

（あったかい……）

腹痛は治まっていないのに、マルタは安心してそのまま眠ってしまった。

夜道を駆け、医者に診てもらったような気もするのだが、よく覚えていない。マルタが次に目を覚ましたときには、元のソファに寝ていた。

（パパ……、ママ……）

ふたりが食堂のテーブルで話をしているのが見える。テーブルの隅にはマルタが半分食べ残したオムレツの皿が載っていた。

「軽い食中毒だろうと言われたよ」

「まあ」

「薬ももらったしもう心配ないが……俺のせいだ」

ブルートはがっくりと肩を落とす。

「俺がきっと古い卵を選んでしまったんだ」

「あなたは悪くないわ。そんなのお店のせいじゃない」

違う、とブルートは言下に否定した。

「こういうことが命取りになるんだ。一瞬の隙が。それが大勢の命を奪うことにだってなりかねない」

「大げさね、オムレツくらいで」

母親はあくまでも柔らかな口調で言った。
「おい。そこの勤務表を見てくれ。明日俺は間違いなく休みだよな」
「そうですよ。船に一週間乗ったら翌日はお休みって決まってるでしょう」
母親は壁に張ってある表をちらりと見ただけで答えた。
「ならいい」
マルタはこのやりとりを横になったままじっと見ていたが、父親の考えていることがよく理解できた。
（パパ、たべちゃだめ！）
それなのに声がうまく出ない。
ブルートはマルタの視線に気づかず、オムレツの皿を引き寄せると、意を決したようにフォークで口へ運んだ。
「ちょっと、なにするの⁉」
母親が驚く。
「食べてみればこれが原因かどうかわかる。それに、マルタだけが苦しむなんて公平じゃないからな」
「……あきれた」
母親はとうとう笑い出した。

「子煩悩というか、親バカというか……知りませんよ、どうなっても」
「なんだ、冷めてるけどうまいよこれ。大丈夫だ」
腹が減ってたんだ、とブルートはとうとう皿を空にしてしまった。
――翌朝、すっかり元気になったマルタが見たものは、ベッドで脂汗を流して苦しむ父親の姿だった。
「パパだいじょうぶ?」
「ああ……大丈夫だ……」
ブルートは手を伸ばすと、マルタの髪を撫でた。
「パパはね、人の役に立ちたくて軍隊に入った。人の痛みがわからなければ人を助けることはできないと思ってるんだ。マルタ、昨日はお腹が痛くてつらかったね」
「……パパぁ……」
マルタは泣き出した。ブルートのいうことは理解できなかったが、本能的にこの人を信じていていいのだとわかった。
「マルタ」
母親の明るい声に、マルタは涙で濡れた顔で振り向く。
「こじつけよ、こじつけ。パパったらかっこいいこと言ってるけど、ちょっと食べ過ぎちゃったのよ」

「ははは、ばれたか。痛ててて」

ブルートは毛布をすっぽり被ってから、そうっと目だけ出してマルタに笑いかけた。

「パパだいすき」

ママも、と小さなマルタは母親に抱きついた。

成長するにつれ、マルタは一見豊かに見えるパルマコスタの街がさまざまな問題を抱えていることを知っていった。

ディザイアンというハーフエルフの組織が、牧場と呼ばれる場所に街の人間を連行してゆく。連れて行かれた者は強制労働をさせられ、帰ってくることはない。税金やマーテル教会が行っている旅業の代金の度重なる値上げも、人々を苦めている要素のひとつだった。

当然、人々の注目と期待は人徳のあるドア総督に集まったが、街の状況は改善どころか改悪の方向へ向かっているようだった。ドアの下にいるブルートとしては、焦れるよ

うな思いで毎日を過ごしていたに違いない。だが総督府へ押しかける人々を目の当たりにしていたせいだろう、彼は家族には極力ごく普通の生活をしていてくれるよう望んでいた。

マルタは毎日母親と一緒に料理をしたり、花を育てたりして暮らしていた。だが十歳をいくつか過ぎる頃から、家にあった剣やいかつい武器などを持ってみるようになると――それまでは危ないからと触らせてもらえなかったのだ――、漠然とした強さへの憧れが芽生えた。

「ママ、女の子も強い方がいいの？」

母親に聞いてみたのは、庭で摘んだ薔薇を花瓶に活けているときだった。

「私、武器に触るとなんだか強くなるのもいいなって思っちゃうんだ」

「それはどうかしら」

茎から棘を丁寧に取り除きながら母親はのんびりと言った。

「女の子は強い男の子に守ってもらう方がよくないかしらねぇ」

「じゃあ、ママはパパが強いから結婚したんだ」

「それだけじゃないけど……でもパパは強いわよ。部下たちからの信頼も厚いし」

母親は誇らしげににっこりと笑い、

「マルタにも自分を護ってくれる王子さまが現れるといいわね」

と、薔薇を一輪手渡してくれる。受け取ったマルタの目が突然輝き出した。
「王子さま⁉　王子さまってあの、お話の中に出てくる？」
「そうよ」
「えええええっ、私にも王子さまがいるの？」
「そりゃあいるわよ。今はまだ出会いのときを待っているのね」
どうしよう、とマルタは身を捩った。幼い頃から甘やかされてきたおかげで、自己否定したり自分を疑ってみるという習慣がない。その気になりやすいことこの上ないのだった。
「ねえママ、王子さまってたいていお姫さまがきれいだから結婚を申し込むよね」
「そうね」
活け終わった花瓶をリビングの出窓に運びながら、母親は頷いた。
「きゃ〜。じゃあ私、急いできれいにならなきゃ。髪ももっと伸ばして、もっと痩せて、優雅な女性に……あ」
マルタはぱちんと手を合わせる。
「そうか。それなら、かわいい服を着ていても似合う、かわいい武器にすればいいんだ。ママ、なにかない？」
母親は「そうねぇ」と考えていたが、ブルートの書斎から一冊の書物を持って来た。

「パパの本だけど、武器ばかり載っているの。この中によさそうなのがないかしら。でも買いませんよ。やっぱりママは、マルタが危ないものを持つのには反対だわ」
「わかってる。見るだけね」
マルタはソファに腰かけると、本を開いてパラパラと見た。それぞれ絵が入っているので、どんな形の武器なのかが一目瞭然（いちもくりょうぜん）だった。
「うわー、いかついのばっかりだよ。鎖鎌（くさりがま）とか刺又（さすまた）とか、名前からしてカンベンて感じだよね」
マルタは笑い、やがて、
「あ、これかわいい！」
と、ひとつの武器を指さした。
「回転刃……スピナーだって。天使の輪みたい！」
（これならきっと蝶々（ちょうちょう）みたいにかわいく使えるよね。パパにおねだりしちゃおうっと）
母親にはダメだと言われたが、マルタが頼めばブルートは必ず買ってくれるはずだった。案の定、あくまでも護身用にという条件付きではあったが、マルタはスピナーを手に入れた。

ブルートの身辺が騒がしくなってきたのは、それからしばらくしてからのことだった。

連日マルタの家には見知らぬ男たちが訪ねてくるようになった。パルマコスタ軍の制服を着ていることもあれば、他の街からやって来たような風体の男たちもいた。

「やはりドアの動きはおかしい」

「裏でディザイアンと通じているという噂が……」

「早く……証拠を……」

お茶を運ぶ際に耳に入ってくる話をつなげてみただけでも、この街に大変なことが起きつつあるのではないかと思える。

(でも、パパにまかせておけば大丈夫だよね)

マルタは深くは考えず、いつも通りに過ごしていようと思った。買い物に行ったときに銀色の制服に身を包んだディザイアンの男たちを見かけたことは何度もあるが、自分には関係のないことだと信じていた。

ある日、庭に出てスピナーの構え方を練習していると、

「やあ、マルタ」

玄関の前で軍服姿の男が手を振っていた。
「ロン！」
ブルートと同期だというロンだった。ロンは未だ独身だが、ここ数年とみに恰幅がよくなってきていた。二年前に弟夫婦が牧場に連行され、以来まだ小さな甥っ子を引き取って育てていると聞いている。
「久しぶりだね」
ロンは家の中には入らず、よく手入れされた芝生を踏んで庭へ回ってきた。
「マルタ、少し見ないうちにきれいになったなぁ」
「えへへ……それほどでも」
マルタは背中の真ん中あたりまで伸びた髪を撫でつけながら、照れ笑いをする。
(やっぱり髪を伸ばすときれいになるんだ！)
「パパなら中にいるよ。最近お客さんが多いの」
そうだろうな、とロンは言った。
「きみのパパはみんなに慕われているからね。頼みに思ってやって来る人が多いのさ」
ロンはよく日焼けした顔で笑った。それからマルタの手元に目をやると、
「ところで、それは？」
と訊ねた。

「スピナーだよ。おねだりしたらパパが取り寄せてくれたの。護身用なら武器を持ってもいいって」
「護身用……」
ロンは微かに顔を曇らせたが、
「使えるのかい、マルタ」
と聞いた。
「ううん。だからいま練習してたところ」
マルタはロンの前でスピナーを構えると、咲き乱れる花壇の脇でくるくると回ってみせた。スカートが丸く開き、髪が宙に遊ぶ。
「ははは。戦うというより……なんだかお嬢さんが舞ってるように見えるぞ」
笑い声をあげるロンに、
「本当？」
マルタはうれしそうに問い返す。
「ちゃんと鏡の前でポーズを決めて練習したの」
「そうかそうか、それで可愛いんだな」
ロンは笑いながら、家の中に入って行った。
「……」

なんだか子供扱いされた気がしないでもなかった。

「どちらかというと、きれいって言ってほしかったんだけどな。そうじゃないと王子さまが来ないじゃない」

マルタは再びスピナーを構えると、今度は見えない敵に向かって斬りつける練習を始めた。

いつもは穏やかなパルマコスタ港の内海が頻繁に時化(しけ)るようになったのは、マルタが十四歳の誕生日を迎えたころからだった。

もともと海の天候は変わりやすい。ブルートが海上勤務のときに突然時化になり、母親が青い顔で心配しているのをマルタは何度も見てきたのでよく知っている。

だが、最近の時化は以前のそれとは違うように感じられた。埠頭(ふとう)のすぐ近くまで海水棲の魔物が現れて船を引き込んだり、大波と一緒に地震が起きたりするのだ。

「ねえマルタ、神託(しんたく)の村を旅立った再生の神子(みこ)さまのご一行がこの街に立ち寄られたん

ですってよ」
その日、雨の中をひとりで買い物に行ってきた母親が興奮気味に言った。マルタは彼女の髪からしずくが落ちているのを見て、タオルを渡してやる。
「再生の神子？　それ誰？」
マルタはこれまで神子の話を聞いたことがなかった。
「この世界をもう一度いい世界にしてくださるかたよ。それがね、いま肉屋の奥さんに聞いたら、どうもあなたとたいして年の違わない女の子らしいのよ」
「へえ……」
神子というからには光り輝いていて神々しかったりするのだろうか。マルタは考えたが、よくわからなかった。
「パパも頑張ってくれているけど、この街もどんどん荒れてきているみたいだし……」
母親は少し淋しそうに語尾を濁した。
「そういえばパパ、ここしばらく帰ってこないけど、船？」
「船は時化でいまは出せないみたい。パパはお友達だちと一緒にお仕事よ」
「……そうなんだ」
(どうしてお友だちと仕事なんだろう。軍はどうしちゃったのかな)
マルタは不思議に思ったが、髪を拭いている母親には訊ねなかった。

「とにかく、神子さまには頑張ってほしいわね。昔シルヴァラントはとても栄えていたっていうもの」
「あ、それ知ってる」
マルタは使い終わったタオルを受け取りながら言った。
「パパがいつも言ってたもん。うちってシルヴァラント王家の末裔なんでしょ？　ほんとなら私はお姫さまなんだよね」
「世が世ならね」
母親は笑った。
「王朝は一〇〇〇年近く前に滅んでるのよ。だけどマルタはいまでもお姫さまじゃない」
えへへへ、とマルタはうれしそうに笑った。

牧場が爆破されたのは、再生の神子コレットがパルマコスタを訪れたと聞いた翌々日のことだった。マルタは爆破と神子を結びつけて考えることはしなかったが、神子というものはやはり幸運の象徴なのだろうと好意的に受け止めていた。
「カイたちが帰ってきたそうだ」

家に戻ってきたブルートは開口一番、ロンの弟夫妻――カイとアイリーン――が牧場から解放されたことを母親に伝えた。
「本当!? よかったわねぇ」
無精ひげの目立つ夫の顔に満面の笑みを向けて、母親は喜んだ。
「ああ。ロンのところにいた甥っ子も、無事彼らのところへ戻った」
「パパ、爆破って一体なにがどうなっちゃったの？」
マルタが訊ねた。牧場には近づいたこともなかったし、その規模も知らなかった。
「うん？　誰がやったのかはまだよくわからないんだよ。爆破自体については、もともとディザイアンどもが設置していた自爆装置が作動していたから、その結果のことだろう。捕まっていた人たちが避難し終わると同時に爆発が起きているから、かなりの手練れの仕事かもしれない」
「ひょっとして、再生の神子コレットの神通力じゃないの？　タイミングがよすぎるよ」
マルタが真剣に言うのに、ブルートは首を振る。
「まさか。世界を再生するのに牧場だけ爆破していくはずがない。糾すべきことは他にもたくさんあるからな」
それを聞いて、母親は眉を曇らせた。

「それじゃあドア総督は……」
　ああ、とブルートは頷く。
「俺はやはりパルマコスタ軍を辞めるよ。仲間たちもそれを望んでいるんだ。拠点も確保したし、すぐにでも活動は始められる……」
　ブルートはマルタに向き直ると、
「マルタ。パパはこれからやっと人々のために働くことができるんだ」
と言った。
「ドア総督がどうかしたの……？」
「あの人は悪い人だった。ディザイアンと手を組んでいたんだ」
「ええっ!?」
　マルタは驚いた。
「そんな……。だって総督は捕まった人を解放するために頑張っていたんじゃないの？　みんなウソだったの？」
「ああ。……それもあって、パパはもう別のところで仕事をすることにしたんだ」
「……そっか」
（昔パパに肩車してもらって、よくあの広場のあたりをみんなで歩いたっけ。いちばん立派な建物が総督府とマーテル教会——）

沈んでゆく夕陽の逆光の中にそびえ立っていた重厚な総督府の姿を、マルタははっきりと思い出すことができる。その大切な思い出を汚されたようで、マルタは唇を噛んだ。

数日後、ブルートは彼を慕って集まった仲間たちと共に正式に組織を設立し活動を開始した。とりあえずは街の警備や、海の安全を見張るだけで、まだ確固たる目的を掲げたわけではない。だが彼は所属希望者の面接などで忙殺されていた。

母親も淋しかったのだろう。ちょうどマルタの身長がぐんと伸びていた時期でもあり、娘の服を作ろうと思い立ったのだった。

「マルタ。ママ、これから生地を買いに行くけど、あなたはどうする？」

「一緒に行く！　自分で選んでいい？」

「もちろんよ。あなたの服だもの」

その日マルタは母親と連れだって、街外れにある店まで出かけて行った。巨大な地震に見舞われたのは、買い物をすませ、店から外に出た直後だった。

突然、ゴウッという恐ろしい地鳴りが聞こえたと思うと、メキメキと何かが折れるような音がした。

「ママっ⁉」
「危ないっ！」
思わず母親にしがみつこうと振り向きかけたマルタの背中がドンと押される。
「⁉」
マルタは訳もわからぬまま、道の反対側までよろけて行き、
「ママ……」
ようやく母親を振り返る。
「ああっ⁉　ママっ‼」
マルタの目に映ったのは、倒壊してこちらに迫ってくる分厚い壁——ついさっきまで楽しく生地を選んでいた店のもの——だった。
「きゃあああああっ！」
マルタはそのまま何もわからなくなった。

目を開けると、心配そうなロンの顔が見えた。
「マルタ⁉　よかった、気がついたね」
「私……」

「もう心配ない。ここはきみの家だよ」
ロンはブルートと一緒に軍をやめて活動しているはずだった。
マルタはぼんやりと、自分のベッドに寝ていることを理解しながら、
「なにがあったの……？」
と訊ねる。
「どうもなんだかわからないが、大きな樹の化け物が突然地下から現れたんだ。建物は土台から持ち上げられて倒壊するし、とにかくめちゃくちゃさ。報せを受けて、俺たちたまたまそこで救助活動をしてたんだよ。そしたらマルタ、倒れている人たちの中にきみを見つけたんだ……驚いたよ」
いつもは日焼けして色艶（いろつや）のいい顔が、妙に青白く見える。彼の服は泥だらけだった。
「私、服の生地を買いに行ったのよ。そしたら……！」
マルタはハッと体を起こした。肩のあたりがズキンと痛む。
「ママは？　ママも一緒だったの！　ママはどこ？」
「…………」
ロンは力なく首を振ってみせた。
「行かなくちゃ！」
「おい、やめなさい！　危険だ！」

ロンが止めるのも聞かず、マルタは家を飛び出した。

街の惨状はかなり遠くからでも見てとることができた。それほど隆起した地面は山のように盛り上がり、建物と土を一緒に抱くように幾本もの樹の根が巻きついている。近くへ寄ってみると、無残に引き裂かれた生木やすっぱりと分断された道路が、樹の動きの速さを物語っているのがわかった。

あとで知ったことだが、古代に枯れてしまった大樹カーラーンの実である〝大いなる実り〟が精霊の楔(くさび)を失い、本来とは違う形でシルヴァラントに発芽(はつが)してしまったのだという。そのために起きた地震だったのだ。

「あっ、パパ！」

マルタは人ごみの中に長身のブルートの姿を認めると、走り出した。

「マルタ！」

しっかりと抱きしめられると同時に、マルタの中にブルートの強い感情が流れ込んでくる。憤りと悲しみ――。

「マルタ、ママが……」

ブルートは、道端に並べられた簡易棺(ひつぎ)の中に眠っている母親のもとへマルタを連れ

て行った。
白い顔で、母親は横たわっていた。一緒に入れられた紙袋から布地が覗いている。マルタが選んだシャーベットオレンジは破れ、無残に泥に塗(まみ)れていた。
「壁の下敷きになっていた……あまり苦しまなかったようだ」
「うそ……ママは私が呼べばすぐに起きるもん。ママ！　ママっ！」
冷たい肩を掴んで揺すると、花の髪飾りが落ちた。マルタが大人になったらあげると言っていた、大切な思い出の品。
（ママ……マルタはまだ子供なのに……！）
こらえきれなくなり、マルタは「うわあっ」と泣き出した。

母親の葬儀が済んでしばらくすると、シルヴァラント全土が激しい天変地異に襲われた。世界再生の洗礼(せんれい)を受けたのだ。
かつて世界がふたつに分けられ、それが再生の神子によってまたひとつに統合された

と言われても、シルヴァラント人にはその知識がなかった。
　もうひとつの世界がテセアラという名であることをマルタが知ったころには、地続きになった大地を通ってシルヴァラントにはテセアラ人の、テセアラにはシルヴァラント人の流入が始まっていた。そして、衰退（すいたい）世界であったシルヴァラントの人々は、繁栄するテセアラ人から虫けら同然のひどい差別を受けるようになっていった。
　一部で略奪などの被害報告が出ていたため、ブルートはマルタの安全を考え、活動の拠点へ一緒に連れて行くことにした。おかげでマルタは毎日そこへやって来る人々の声を聞いて過ごすことになった。
「俺は牧場で文字通り命を削る思いをしてきたんだ。せっかく帰って来たのに、これじゃあ前よりひどい」
「マーテル教会が派遣した神子がよけいなことをしたから、こんなことになったんじゃないのか」
「今こそ立ち上がってくれ、ブルート！」
　突然いなくなってしまった母親がマルタの心に空（あ）けた穴を埋めることはできなかったが、おかげで落ち込んでいる暇もなかった。人々は皆苦しんでおり、ブルートを頼りにしている。
（私って、何にも知らずに生きてきたんだなぁ……ありがとう、パパ、ママ……）

時を経ず、ブルートが『シルヴァラント解放戦線ヴァンガード』を立ち上げたとき、だからマルタは迷わず自分も所属することにした。テセアラ人とマーテル教会からシルヴァラント人を守るレジスタンス組織だ。

（私だってきっと役に立てることがいっぱいあるはず……）

噂を聞いて、シルヴァラント全土から所属希望者がやって来た。膨れ上がった人数を有効利用するため、ブルートはロンと相談し、徹底した組織作り——戦闘班、工作班、技術班などの専門チームを構成する。その振り分けにはロンの古い友人のタームスという男をおく——や拠点の数を増やすなどして、シルヴァラント人へのテセアラ人とマーテル教会からの風あたりを少しでも弱めようと心を砕いた。

だがマルタには——とても不満だったのだが——なんの仕事も与えられなかった。強いて言えばブルートの秘書だが、事務的なことは別の人間が責任を持ってやっているので、拠点に行ってもなにもすることはない。

それなのに総帥の娘なので一切咎められることはないし、下手をするとお茶が出てくる。一般の構成員は呼び捨てなのに、マルタはたいてい「マルタさま」と呼ばれてしまう。

最初こそ違和感があったものの、マルタは大甘の両親にそだてられたせいでもともとそういう対応に慣れていたので、いつしかそれが当たり前になって行った。

ヴァンガードの拠点へ通うようになって間もなく、マルタは目つきの鋭い若い男をちょくちょく見かけるようになった。
赤い髪を長く伸ばし、メガネをかけている。誰かと一緒にいることは皆無といってよかった。
ある日、ブルートに弁当を届けようと執務室へ向かって廊下を歩いていると、扉が開いてその男が出てくるのが見えた。
(パパと話をしてたのかな)
視線を感じたのだろう、若者はマルタをじろりと見た。
「あ、こんにちは」
マルタはぺこりと頭を下げる。
「……おまえは……」
(おまえ？)
私のことを知らないのかなと思いながら、
「私、マルタ・ルアルディです。ブルート総帥の娘の」

と自己紹介する。
「ああ、そうか」
そのまま立ち去ろうとする男を、
「あの」
と、呼び止めた。その瞬間、なんともいえない冷たい視線を感じ、
「あ、いいです、別に。すみません」
マルタははからずも謝ってしまう。
「…………」
男はそのまま歩み去った。
「ちょっとパパ！」
マルタは執務室のドアを勢いよく開けると、
「なによいまの男」
と唇を尖らせる。
「リヒターがどうかしたか？」
大きな机に向かっていたブルートは、マルタを見てにっこりした。
「リヒターっていうの？　なんか超失礼。挨拶もちゃんとしないの」
ぷりぷり怒るマルタに、ブルートは言った。

「まあそう言うな。あの若者には見どころがある。俺がヴァンガードの活動骨子になぜシルヴァラント王朝の復活を謳わないのかと言ってきたんだ」
「ええ？」
マルタは一瞬耳を疑った。
「パパ……だってそれって、あれでしょ……八百年だか昔の……」
「テセアラを潰せばシルヴァラントの天下になる。そうしたら王朝を復活させて、王は俺だ」
ブルートは冗談とも思えない顔でにやりと笑った。
「なに言ってるのパパ。そうだ、お腹がすきすぎて変になってるんだよ、きっと」
マルタは抱えてきた弁当箱をドンと置くと、包みをほどいてブルートの前に並べた。
「さ、食べて食べて」
色の悪い、黒ずんだ卵焼きと、塩の結晶がキラキラきらめいている野菜炒めを蓋にとりわけ、フォークを添える。
「どれどれ」
「どう？　パパ」
ブルートは娘の手料理を口に入れ、しばらく嚙んで味わっていたが、すごいような笑みを浮かべて、

「おいしいよ、マルタ」
と言った。
「ありがとうパパ。また明日作ってくるね」
「いや、いいよ……大変だろう」
コップの水を飲み干して、ブルートが遠慮する。
「どうして？」
マルタは納得いかないという顔で聞いた。
「……ママがいなくなって、家事だけでも大変なのにと思ってな」
「パパ……」
ブルートはそれからマルタをじっと見上げると、
「よく似合うよ、その髪飾り」
ママが初めてのデートのときつけていたんだ、と言った。
「そうなの？　それで私になかなかくれなかったんだ。思い出の品ってそういうことだったのね。いいなあ、ロマンチック」
マルタは左右につけた髪飾りに両手で触れ、うっとりする。
「さあ、パパは仕事の続きだ。集中させておくれ」
「仕事っていえば、私も何か仕事したいんだけどな。戦闘班とかで……」

マルタはのろのろと弁当箱を片付けながら文句を言う。
「マルタの仕事はパパに仕事をさせてくれることだよ」
「うまいこと言っちゃって」
マルタはため息をつき、「じゃあね」と執務室を出た。とたんに、
「あっ、マルタさま」
「マルタさま、こんにちは」
構成員たちが声をかけて通る。
「こんにちは〜」
笑顔で応えながらマルタは、やっぱりこういうのも悪くないかも、と密かに思った。

ヴァンガードが拠点の数を順調に増やした結果、ブルートはかなりの数の出張をこなさなければならなくなってしまった。
そうなると、ますますマルタはひとりでいる時間が長くなった。

（ほんとに早く王子さまが現れてくれないかなぁ。ママはもういない、パパも留守がち……さみしすぎるよ）

時間が余るので弁当を作って拠点に行くことくらいしか、結局マルタにはやることがない。それなのに急な出張でブルートがいないことも少なくない。

戦闘班のアリスと工作班のデクスに初めて会ったのも、そんな日だった。

「パパ～」

執務室のドアを細く開け、覗き込むと中はシンとしていた。

「いないの？」

ちょうどそのとき若い構成員が数人、廊下を歩いてきた。

「マルタさま」

「総帥なら急用でお出かけになられましたよ」

「え、そうなの？」

露骨（ろこつ）にがっかりした顔を見せると、若者のひとりがドアを開けてくれる。

「どうぞ中へ」

「いいの？」

「もちろんです。僕たちは入れませんけれど、マルタさまは総帥のお嬢さまなんですから」

彼はマルタの腕から弁当箱をとると、持ってくれた。
「あ、ありがとう。せっかくだからみんなでお茶でも……」
マルタは言い、中へ入る。若者たちも恐縮しながら足を踏み入れた。ひとりがものすごい速さでお茶をいれに部屋の隅へ走る。弁当箱は執務机にきちっと九十度を保って置かれ、気がついたらマルタはソファのいちばんいい場所に座って笑っていた。
「マルタさまのお弁当を食べられるなんて、総帥がうらやましいなあ」
「僕たち、親元を離れてヴァンガードに入ったんで家庭の味とかに飢えてるんですよ」
「マルタさまは家庭的だな～」
歯の浮くようなお世辞に、マルタはついつい、
「ちょっとだけならお弁当見せてあげようか？」
と、立ち上がった。包みをほどきふたを取ると、若者たちが歓声を上げる。
「僕、ときどき総帥のお手伝いをさせていただいてるんで何度かお弁当は見てるんですけど、いつもおいしそうですよね」
「えっ、そうなの？　はずかしい」
マルタは、見るからにべちゃべちゃした海老のフリッターと、真っ黒な煮物らしきもの、苔むしたような質感のサラダがいっぱい詰まった弁当箱の蓋を閉じた。
「ああ、いけない。僕たち戦闘班なんですけど、これから訓練なんです」

「じゃあ私もそこまで一緒に行くよ。戻ったら食べられるようにお弁当はここに置いていこう」
若者たちに囲まれるようにして、マルタは廊下へ出た。
「あっ、アリス！」
ひとりが片手を上げて向こうから歩いてくる少女に声をかけた。
「ちょうどいい。こちら、ブルート総帥のひとり娘でいらっしゃるマルタさまだ」
少女はかわいらしい顔で、マルタをじっと見た。
「マルタさま、こっちが最近戦闘班に入ったアリスです」
「こんにちは、アリス。はじめまして。私もヴァンガードに入ってるんだよ」
マルタは余裕の微笑で挨拶をする。
「……はじめまして」
アリスはぼそりと返事をしたが、マルタはまったくそんなことは気にしていない様子で、
「あっ！　そうだ、ねえねえ、クッキー食べない？　私が焼いたんだよ～」
と、肩にかけたバッグからクッキーが入っているらしい紙袋を取り出してみせた。
構成員たちはさり気なくふたりのそばを離れて行く。
「パパの部屋で食べていいよね？」

と、アリスの袖を引っ張って廊下を戻り始めた。
ブルートの部屋に入ると、マルタは今度は自分でお茶をいれ、アリスにすすめる。アリスは当然のようにソファの上座にすわり、足を組んでいた。
「いつもお弁当を届けに来るの？」
正面にある執務机の上の巨大な弁当包みに視線を当て、アリスが訊ねた。
「ううん。パパがパルマコスタにいて、私の気が向いたときだけ。今日はちょっとすれ違っちゃったの」
「毎日なにしてるの？」
本当にヴァンガードに所属してるの、とでも言いたげに、アリスが訊ねる。
「いろいろ、かな。お花を育てたり、前にママに教わったお料理したり、あと、ちょっとだけど戦闘の訓練もしてるよ。可愛い武器なんだ～」
「へえ」
アリスは気がなさそうに答えた。
マルタは紙袋の封をびりびりと破り、
「ねえ、クッキー食べて」
「……ええ」
ざらざらと皿にクッキーをあける。アリスに差し出したそれは、形も焼き色も不ぞろ

いだ。アリスはいちばん小さいのをつまむと、思い切って口に入れた。
「っ!?」
「どう？　おいしい？　もっと食べる？」
アリスはまだ熱いはずのお茶をぐびぐびと飲み干し、
「私、仕事があるから」
と厳しい表情で立ち上がった。
「なんだ、もう行っちゃうの。じゃあ残りは全部アリスにあげる。おみやげだよ～」
マルタは残念そうに言い、遠慮するアリスに紙袋を無理やり持たせた。
アリスが出て行ってしまうと、
「みんな忙しそうでいいなあ」
と、マルタはため息をつく。
「やることないし、帰ろっかな」
部屋を出ようと執務机の脇を抜けたとき、引き出しのあたりが目の端で光った。
「え？」
なんだろうとマルタは引き出しを上から順番に開けてみた。ペン皿やインク壜(びん)、レターペーパー、ハンカチ……特に光るものなどない。
残るは一番下の深い引き出しのみだ。鍵つきだが、手をかけてみるとスッと開いた。

「なにこれ!?」
そこには大ぶりの宝珠のようなものが数個、しまわれていた。
(これが光ったのかなぁ……)
マルタは首を傾げたが、よくわからない。あまり深く考えずに引き出しを閉めると、再び廊下へ出た。
共同の洗面所の前を通りかかると、
「うえええぇぇぇ〜〜〜〜、おげぇぇぇぇぇぇぇぇ〜〜〜〜〜」
情けない声が聞こえてきた。
紫色の髪の若い構成員がひとり、両手で洗面台につかまって、嘔吐に苦しんでいるようだ。
「どうかしましたか?」
マルタはそっと近づいて声をかけた。
「!?」
くるりと振り返った涙目の若者は、喉の奥で「ひぇっ」と声をあげた。
「お、驚かせちゃってごめんなさい。あの、私、ブルートの娘でマルタっていいます」
「……て、手作りクッキー……!?」
若者は思いきり目を剝いた。

「えっ、なんで知ってるんですか？　あっ、アリスのお友だちね？　あの子にクッキー分けてもらったんでしょ」

マルタはにっこりした。すると若者は手の甲でぐいっと口元（くちもと）を拭（ぬぐ）うと、

「失礼。ちょっとしょっぱくて調子が出ないが、俺はヴァンガード工作班所属のデクスだ」

と、ポーズを決めながら名乗った。

「デクスね。よろしく」

「マルタ……あんた、友だちいないだろう」

デクスがぐさりと言い放つ。

「そ、そんなこと……ないよ」

（たしかにそうだ）

マルタはどきっとした。以前はともかく、確かにヴァンガードに入ってからは親しい友人ができてもおかしくない環境にいる。

（みんなにちやほやされてるのに、どうして私には友だちができないんだろう。実は好かれてないってことなのかな……だったら私、バカみたい）

ハッと気づくと、デクスの姿はとうに消えていた。

（あのアリスっていう子もデクスも……それからリヒター……よくわからないけど似て

る気がする。なんでかな)
　おべっかを使わない三人に共通するものが、孤独で生きてきた者の匂いであることにマルタが気がつくのは、まだずっと先のことだった。

「マルタ・ルアルディです。入ります」
　ドアをノックして中に入ると、執務机についているブルートが目に入った。
「総帥、お呼びですか」
「確かに呼んだが……どうしたんだマルタ」
　ブルートは突然の娘の変化に驚いているようだった。
「どうもしてないけど、仕事のときくらい公私混同しないほうがいいのかなって……」
(いつまでもちやほやされて喜んでるようじゃダメだよね)
「偉いぞ、マルタ」
　ブルートは娘を褒め、それから言った。

「今日は大掃除の監督をしてくれ。戦闘班の非番の者がＤ会議室の掃除をしているから」
「掃除〜？　なによパパ、もっとすごい仕事かと思って期待しちゃった」
マルタはたちまち公私混同してしまう。
「でも、Ｄ会議室って建物のいちばん奥にある部屋でしょ？　荷物置き場じゃなかった？　あそこ片づけてなにかするの？」
「あそこは……」
そのとき、ブルートの目に異様な光が浮かんだようにマルタには見えた。
（え……？）
「あそこにはコアを陳列する」
「コア？　なにそれ」
「……」
「おまえは知らなくていい。シルヴァラント王朝を復活させるために重要なもののひとつだ」
「パパ、まだそんなこと言ってるの？」
次の瞬間、
「うるさいッ!!」

ブルートが怒鳴った。ガラスがびりびり震え、マルタは縮み上がる。
「パパぁ、どうしちゃったの。なんだか……ヘンだよ」
「早く行け。早く行け！」
マルタはあわてて執務室から飛び出した。

（なんなの、今の……。パパ、一体どうしちゃったの？）
落ち着かなきゃ、とマルタは自分に言い聞かせた。とにかく今は仕事をしなくては。
「入りまーす」
D会議室のドアを開けると、五、六人の若者がいっせいにマルタを振り向いた。床いっぱいに置いてあった物資はいま壁際にどけられ、床を掃除しているところらしい。
「あ、アリス！」
ひとりだけ混じっている少女は先日会ったアリスだった。手にほうきを持っているが、働いているのはもっぱら男性たちのようだった。
「あら、マルタちゃんじゃないの♡」
アリスにちゃん付けで呼ばれ、マルタはいきなり沈んでいた心が浮き立った。
（なにか話さなきゃ……）

「あ、あのね、アリスちゃん。この前、デクスっていう人にクッキーあげたでしょ」
「デクスに？　ああ、あげたわよ」
「あの人、アリスちゃんの王子さまなの？」
「…………」
沈黙が流れた。
「さすがはお姫さまね～。言うことが違うわ」
アリスがほうきを放って笑うと、若者たちも失笑を漏らす。
「え……」
「ちょっとマルタちゃん。なんで私が、あんなやつを王子さまとか思わなきゃいけないわけ？」
アリスは強い視線でマルタを睨みつける。
「だ、だって、せっかくのクッキーあげたりしてるし、てっきり……」
「バカね。クッキーがとーってもまずいからデクスに食べさせたんじゃない。アリスちゃん、あんな固くてしょっぱくて焦げてるの食べたらお腹壊しちゃう♡」
「……あ、あんたねぇっ！」
マルタはカッとなったがなんとか自分を抑え、
「そ、掃除しよう、掃除。ほらアリス、そっち持って」

会議用テーブルを指さすと、
「お姫さまは邪魔なんですけど〜」
と、そのテーブルの上に座ってしまう。足を組み、手に持った鞭をペチペチと鳴らす。
「今日は私、監督に来たんだよ？」
「だから？」
うふふふふふ、とアリスは笑い、
「困ったわねー。パパのところに泣きついたらどう？　お・ひ・め・さ・ま♡」
「んもう、あったまきた！　知らない！」
マルタはＤ会議室を飛び出すと、廊下をブルートの部屋へ向けて走り出した。
（あ、でも……）
ちょっと今は会いたくないかな、と足を止める。さっきの異様な目の光を思い出すと、なんだか怖い。
「ふう」
少し迷ってから、マルタは建物の裏庭に出た。ここに来るのは初めてだ。砂利道と、いくらかの緑の繁み。古い物置小屋。殺風景だがひと気がない分、気が楽だった。
（もしかしたら、まわりのみんなも本当は私のことバカにしてて、アリスはただ正直なだけかもしれない……）

「なんだか、世界にひとりぼっち、って気がするなぁ」
はああっ、とため息をついたとき、砂利を踏む微かな音がした。
「？」
マルタが音のした方へ顔を向けると、誰かが建物の角を曲がって消えるところだった。
（あれっ。あれは確か……リヒター……？）
メガネの奥のあの鋭い目を、マルタは思い出す。
（なんでこんなところにいるんだろう……これからまたパパのところに行くのかな）
だとしたらいったい何の話をしてるんだろう、とマルタは訝しげに思った。

ヴァンガードの各拠点は順調に軌道に乗ったと聞いていたが、この頃からブルートは家に帰ってこないことが多くなった。たまに帰ってても、ぶつぶつとなにごとか呟いていて、マルタの話を何も聞いていなかったりすることがほとんどだ。
「マルタ」

ある夜、ブルートは珍しく早く帰って来ると、マルタをテーブルに呼んだ。
「なに、パパ」
「よく聞くんだ。ヴァンガードは明日、再生の神子コレットを指名手配し、各拠点で総力を挙げて探し出し、捕えることになった」
「えっ!?」
「あの神子はシルヴァラントをテセアラに売った張本人だ。その大罪は許されるものではない。むろん確保ののちは公開処刑する」
「ちょ、ちょっと待って！　いきなりなんなの!?」
マルタは驚いて叫んだ。
「神子コレットは、シルヴァラントのために頑張ったひとなんでしょ？　味方じゃないの」
一体パパはどうしちゃったんだろう、とマルタは思った。
「だがな、マルタ。ママが亡くなったときのことは覚えているかな」
「当たり前じゃない！　ママは私のために出かけて、それで大樹の暴走に巻き込まれて……」
マルタは俯く。まだあのときの光景を思い出すと、体が震える。
「あの暴走が神子コレットのせいで起きたものだと言ったら？」

「……うそ」
「嘘(うそ)ではない。調べはついている。ママを殺した原因を作ったのは神子コレットだ。これでも神子をかばうのか？」
「それは……」
マルタは口ごもり、
「でも、神子の処刑なんてヴァンガードの仕事じゃない気がするんだけど。私たちはシルヴァラント人を救うために活動しているんだよ、パパ」
と言った。
「大罪人の処刑は立派な仕事だ」
それだけ言ってしまうと、ブルートはもう神子の話を口にしなかった。
(ほんとかな……神子コレットのせいで大樹が暴走したっていうの……だったら神子はママの仇だよ……)
マルタは複雑な思いにふけった。

その後、再生の神子が捕まったという報告はなかなか聞こえてこなかった。マルタは心のどこかでほっとしている自分を感じていた。それでももしいつか神子コレットに会う機会があれば、問いつめて真実を聞いてみたいものだと思う。

それより気になるのは、神子の指名手配のことだけでなく、ヴァンガードの活動内容が次第に残忍になってきていることだった。逆らう者には武器を向け、殺してしまってもかまわない……そんな風潮ができてきたような気がする。

ブルートは相変わらず各地を飛び回っていた。ある日マルタはヴァンガードの拠点で構成員たちとすれ違いざま、

「総帥はコア探しに没頭しておられるから……」

「もう少し内部のことも考えてくだされば……」

という会話の断片を耳にした。

(コア探し……コアってたしか……)

ブルートがD会議室に陳列すると言っていたのもコアではなかったか？

マルタはD会議室に行ってみたが、案の定しっかりと施錠されていた。執務室に忍び込み、机の引き出しを探る。するといちばん下の引き出しが空(から)になっており、かわりに銀色の鍵がしまわれていた。

D会議室にとって返し、人目がないのを確かめてそっと中へ忍び込む。分厚いカーテ

ンで窓からの日は遮られていたが、薄明かりに大きな透明の陳列ケースが置かれているのを見て、マルタは驚いた。
(この間、掃除していたときにはこんなものなかったのに……)
ケースの中はいくつかに仕切られており、大ぶりの宝石のようなものが安置されている。空のスペースもまだまだある。
(これって、前にパパの机の引き出しの中に入ってた……。これがコア？)
ただしよく見ると、『模造品(レプリカ)・資料』と書かれた小さなステッカーが貼られていた。どこかの博物館か研究所が使いそうな簡素なものだ。
(なにこれ。こんなのパパ、誰かにもらったのかな)
いちばん高い位置には、ひときわ立派な別のケースが置かれている。中身は空っぽだ。
(パパは、ここに飾るコアを探してあちこち行ってるの？)
どういうことなんだろう、とマルタは考えた。コアとは、なんの役に立つものなのだろう。
「これを持ってるとシルヴァラント王朝復活の夢が叶って王さまになれる、とかね。まっさか～」
自分の発想がおかしくて、マルタは声をあげて笑ってしまう。あわてて廊下に人がいないことを確かめると、会議室のドアを元通り施錠して鍵を返しておいた。

コアらしきものは見つけたものの、マルタの生活は相変わらずのものだった。家でも拠点でも、孤独だった。
ヴァンガードは日に日に力を持ち、目に余るような行為もたびたび起きていた。だが総帥であるブルートがそれを望んでいるのだからどうしようもない。
永久にこんな暮らしが続くのかと思い始めたころ、突然変化がやってきた。それは何の予兆もなしにいきなり開く花の蕾（つぼみ）にも似ていた。
その夕方、マルタは最近よくそうしているようにひとりで拠点の裏庭にいた。近ごろではお気に入りの石を自分専用の椅子にみたて、休むことが多い。夜の闇が降りてこないうちに、久しぶりにスピナーの練習でもしようかなと思ったとき、砂利を踏む音が聞こえてきた。
反射的にマルタは繁みの陰に身を隠した。
葉の間からそっと覗くと、あのリヒターがこちらにやって来るのが見えた。大きな檻（おり）のようなものを両手で抱えている。
「おとなしくしていろよ」

檻の中には真っ黒いなにかがうずくまっているようだった。もしかしたら眠っているのかもしれない。大きさからするとやはり犬だろうか。
「この檻にはおまえの力は通じないからな」
(なに……？　力ってなんのこと？　犬じゃなくて魔物なのかな)
マルタは思いがけない光景を、食い入るように見つめる。
やがてリヒターは物置小屋の扉を開けると、中に檻をしまい込んだ。扉がギイッと閉められる。リヒターはマルタには気づかず足早に裏庭を横切って行った。
「な、なんだったんだろう、いまの……」
マルタは繁みの陰から出ると、物置小屋にそっと近づいてみた。耳を澄ますが、なにも聞こえない。
「やっぱり寝てるんだ、いまの犬。死んでるってことはないよね」
マルタがつぶやいたとたん、
「失礼ですね、生きていますよ」
中年男のような声が物置小屋の中から聞こえた。
「えっ!?」
「それに私は犬ではありません。私はセンチュリオン——、センチュリオン・テネブラエです」

「セ、センチュリ、オン……？」
マルタは後ずさりしてその場を離れようとした。
「テネブラエ、です。おや、どちらへ行かれるんです？」
「どちらって……ほら私、仕事中だから。精霊とか魔物とかと遊んでる時間は……」
（な、なんで私のことが見えるんだろう）
マルタは気持ちが悪くなってきた。
「私は精霊でも魔物でもありません。センチュリオンです。そんなに怖がらないでこちらへ来てくれませんか」
センチュリオン・テネブラエの言葉遣いはあくまでも丁寧だった。
マルタは好奇心から、そろそろと物置小屋に近づいてみる。手を伸ばす――。
「そうそう、そのまま扉を開けてください。はいありがとう」
ギイッという音と共に扉が開くと、たいして広さのない小屋の床の上に先ほどリヒターが抱えていた檻が見えた。
「……ほんとに喋（しゃべ）ってるの？」
「はい」
センチュリオン・テネブラエはこっくりと頷いてみせる。檻のせいでよくは見えないが、やはり真っ黒い犬に似た生物（いきもの）だ。

マルタは檻につけられた鍵をひと目見るなり、これはダメだ、と思う。
「すごく頑丈そうな鍵だよ。なんだかよくわからないけど、特別なものだってリヒターが言ってたよね」
「お嬢さんはリヒターをご存知なんですね」
「あ……私はマルタ・ルアルディ。リヒターとは顔見知りってだけ」
ふむ、とテネブラエは言い、
「鍵のご心配はご無用に願います。壊されるとかえって面倒ですから」
「どうして……って、ええっ!?」
驚くマルタの目の前で、テネブラエは檻の隙間からにょろにょろと細長い姿になって這い出してきた。尻尾まで出てしまうと、再び先ほどの姿に戻る。襟の詰まった燕尾服を着込んだようにも見える真っ黒な生き物だった。しかも四本の足先は地面に着いておらず、浮揚している。
「私はどんなものにも姿を変えられるのです」
「すごいねー。うなぎに化けられるなんて」
「失敬な。いまのは蛇です」
テネブラエはいささか機嫌を損ねた様子だった。
「そっか、ごめん。ねえ、檻から出られるのにどうしてわざわざ捕まってるの？」

マルタが訊ねるとテネブラエは、悲しげにもともとあるかないかわからない肩を落としてみせた。
「マルタさんのような人が来てくれるのを待っていたからです……」
「なにか困ってるの？」
「……大事な大事な、命より大切なラタトスク・コアをリヒターに奪われてしまいました」
「コア……」
（またコア？　まさかリヒターって……）
ブルートの執務室から出てきたリヒターの姿が脳裏に甦る。
「コアって、これくらいの、いろんな色の宝石みたいなやつのこと？」
そうです、とテネブラエが頷く。
「パパが急にコアを集めようとし出したのって、リヒターの影響なのかな。あ、私のパパってヴァンガード総帥なの」
「おそらくそうなのでしょう。しかし、だとするとラタトスク・コアはリヒターの手からマルタさんのお父上に渡ったと考えたほうがいいでしょうね」
「コアを陳列するための部屋を最近作ったばかりだから、そこにあるかも……」
マルタは言いかけ、



「でも、テネブラエって……何者なの？　センチュリオンなんて聞いたことないし、そのラタトスクっていうのは……」
　と訊ねた。
「世界再生についてはご存知ですよね」
「そんなにくわしくない」
　マルタは首を振った。
「よろしい。大昔、大樹カーラーンが枯れて世界に滅亡の危機が訪れたとき――、女神マーテルと勇者ミトスが世界を二つに分けることで滅亡を阻止しました。そして新しい世界を支える世界樹が芽を出したため、再生の神子コレットが世界を再生し、世界をもとのひとつに戻しました」
　テネブラエは説明を続けた。
「ラタトスクさまは古の大樹の精霊であり、魔物の王なのです」
　魔物の王、とマルタはつぶやく。
「はい。世界がふたつに分けられていた間、ラタトスクさまもコア化して眠りについておられたのです。そのため自然界がバランスを崩し、世界はいま滅びの方向へ向かっています。早急にラタトスク・コアを孵化させ、ラタトスクさまを目覚めさせる必要があるのですが……」

「それをリヒターに奪われちゃったんだね。大変じゃない！」
ようやく話が飲み込めてきて、マルタは憤った。
「で、センチュリオンっていうのは？」
「はい。ラタトスクさまにはエイト・センチュリオン……八体のセンチュリオンの配下がいて、それぞれ水や火、風などの属性を持っています。ちなみに私はなかでもいちばん美しい闇のセンチュリオンです」
テネブラエは胸を張った。
「ああ、それでそんなに真っ黒なんだ」
マルタは納得する。テネブラエは咳払いをし、さらに続けた。
「センチュリオンはそれぞれ魔物を使役し、自然界のバランスをとっていたのですが、ラタトスクさまが眠っているため監視から解かれ、暴走し……マナのバランスが崩れた結果、異常気象が起きているのです」
「じゃあ結局、テネブラエはリヒターに奪われたそのラタトスク・コアっていうのを取り戻したいんだね」
その通り、とテネブラエは満足げに頷いた。
「マルタさんは頭がいい。飲み込みが早いですね」
「えへへ……。でも、どうして私を待ってたの？」

質問したとたん、マルタは「うそ」と言ってしまう。
「ま、まさか私にそれをやらせるつもり?」
「さすがはマルタさんですね」
テネブラエはしれっと答えた。
「む、無理だよ、そんな大それたこと……世界とか……滅びるとか……」
マルタは必死で首を振った。
「手配は私がします。マルタさんは私の合図で動いてくだされればけっこう。ここ数日のうちにきっと……」
テネブラエはちょっと鼻先を上向かせ、
「誰か来ます! ではまた」
と、掻き消すように見えなくなる。次の瞬間、テネブラエは檻に戻っていた。マルタがあわてて物置小屋の扉を閉めたとき、構成員が四、五人、わいわい言いながらやって来た。勤務明けなのだろう、これからどこかへ遊びにでも行く相談をしているようだった。
マルタは彼らに背を向けると、何ごともなかったように裏庭を出た。

その夜、家に帰ったマルタはひとり夕方の出来事を思い出した。
センチュリオン・テネブラエと話をしたあと、建物の中に戻ってみると、いつもと違う空気が漂っていた。どうしたのだろうと思って廊下を歩いていると、ヴァンガードの責任者たちが集まり、A会議室へ入ってゆくところにちょうど出食わした。近々行われる全体集会のための予備会議だという。
（みんななんだか興奮してたみたい……）
その中でもひときわ大きな声で喋っていたのが父ブルートだった。ひどく機嫌が良さそうに見えた。
（テネブラエの話が本当なら、ラタトスク・コアっていうのを手に入れたからご機嫌だったのかも……）
それにしても、とマルタは思う。テネブラエは自分の意志で自由に姿を消すことができるのだ。わざわざリヒターに捕まることはなかったのではないだろうか。檻に入れられた後も逃げ出そうと思えばいくらでもできたのではないか。
——マルタさんのような人が来てくれるのを待っていたからです……。
テネブラエはそう言っていた。
（パパがすごく欲しがっていたコアを、私に盗めなんて。でもそれはもともとテネブラ

エからリヒターが奪ったものだっていうし、いいのかな……）

わからないことだらけだった。そのなかでかろうじてはっきりしているのは、このままでは世界が危ないということだ。

――ではまた。

テネブラエは最後にそう言っていたから、どういう方法かわからないけれど連絡をしてくるのかもしれない。

深夜、ベッドに入ったマルタは眠りに落ちてゆく途中で、遠吠えのような声を聞いた気がした。

ヴァンガード全体集会がパルマコスタで行われたのは、それから六日後のことだった。パルマコスタの構成員は数日前から準備に追われていた。マルタはテネブラエのことが気になっていたが、裏庭に行くことはなかった。

集会当日、マルタは備品管理の担当なので、ひとり倉庫で筆記用具や食器の数などを

チェックしていた。地味な作業だが不足があってはいけないので、念入りにしなくてはならない。

「マルタさん」

突然耳元で名を呼ばれ、

「きゃっ!?」

マルタは危うく手にしていたカップを取り落としそうになった。

(テネブラエ……?)

だが、あたりを見回してもあの真っ黒い姿は見えない。

「すみません。脅かすつもりではありませんでした」

と、テネブラエは声だけで詫びた。こちらの様子がわかるようだ。

「どうしてたの。ずっとあの檻の中にいたの?」

「今もいますよ」

テネブラエは情けなさそうな声を出す。

「なんの連絡もないから……。ごはん、ちゃんと貰えてるのかどうか気になってたんだけど」

「いえいえ。私たちはマルタさんたちとは違います。空気中のマナを摂取していますから、いちいちしちめんどくさい物質なんて食べなくていいんです」

「へえ、便利だね」
マルタはカップを棚に戻しながら言った。
「そんなことより、ちょっとこっちへ来てくれませんか」
「え、こっちって、あの裏庭のこと？」
どうして自分で出てこないのだろうと思いながら、マルタは訊ねた。
「そうです。急いでお願いします」
「もう。いま忙しいのになぁ……」
文句を言いながらも、マルタは裏庭に向かった。
人目がないのを確かめてから、物置小屋の扉を開ける。
「えっ、どうしちゃったの、これ!?」
マルタは檻を見るなり声を上げた。全体が青白い光にすっぽりと包まれている。
「あのあとリヒターにやられました。これも鍵の一種です」
「出られないの？」
「残念ですが」
マルタは檻の前にしゃがみ込むと、ため息をついた。
「こないだあのまま逃げちゃえばよかったのに」
「ラタトスク・コアを取り戻すまでは、奴を油断させておいたほうがいいと思ったもの

ですから……。私としたことが不覚でした」
テネブラエは「ふっ」と自嘲的に笑い、それから話題を変える。
「ところで今夜はたくさんの人がここに集まるようですね」
「うん。全体集会の日だから、シルヴァラント中の拠点から来るの」
それは好都合、とテネブラエは言った。
「私たちも今夜動きましょう」
「えっ。でも、ちょっと待って」
あわててマルタは青白い光越しにテネブラエを見た。
「ほんとにここにそのラタトスク・コアっていうのがあるのかな。まず先に確認しなくていいの？」
「大丈夫です」
テネブラエは胸を張る。
「確かに気配がしますから。ただ……」
「ただ？」
「いえ……ほかのコアの気配もするような、しないような」
「ああ、それはそうかも」
マルタは言った。

「パパがコアをいっぱい集めてるみたいだから」
なるほど、とテネブラエは頷く。
「それではのちほど。私は動けませんのでよろしくお願いしますよ」
「……う、うん……」
マルタはのろのろと立ち上がり、扉を閉めた。
(今夜動くって、ラタトスク・コアを盗むってことだよね？　大丈夫かな……拠点の責任者たちが集まるから警備も厳重だと思うんだけど……)
マルタは自分がやろうとしていることが信じられない。
(どうしよう……)
不安なまま倉庫へ戻ると、残りの仕事を片付けだした。

夜がやってきた。案の定、拠点の周囲は警備の構成員によって固められている。
集会が始まった。
マルタはいつあの真っ黒いセンチュリオン・テネブラエに話しかけられるかと思うと気が気ではない。何度も湯を沸かしたり、必要もないのにあちこち拭いてみたりして時間をやり過ごしていた。

急に外が騒がしくなったのは、集会も半ばを過ぎたろうと思われる時刻だった。言い争いをしているような声が聞こえ、物が倒れる音、男たちが駆けてゆくブーツの音がした。

(な、何が起きたの……!?)

ひとりで小さな控え室にいたマルタは、びっくりして椅子から立ち上がった。

「マーテル教団だ！　マーテル教の奴らが襲撃してきたぞ！」

「応戦しろっ！」

「ロイドだ……！」

怒号が響き渡る。

(ロイド？　ロイドって……たしか)

マルタはその名前に聞き覚えがあった。再生の神子コレットのしもべのひとりではなかったろうか。

「……パパ！　パパのところへ行かなくちゃ！」

ハッとしたマルタが部屋を飛び出そうとしたとき、

「お父上は大丈夫です。さあ、ラタトスク・コアをとりに行ってください」

センチュリオン・テネブラエの声がした。

「なにのんきなこと言ってるの！　ここはいま襲撃されてるんだよ」

そのようですね、とテネブラエの声は落ち着いたものだった。
「街にも教団兵が大勢いるようです。この混乱を利用しない手はありません。それに、もとはといえばあなたのお父上が招いたことではありませんか」
「え」
「神子コレットを指名手配してマーテル教を貶(おとし)めたのですから、あちらが怒るのは当然ですよね」
「それは……」
言い返す言葉がなくて、マルタは唇を噛みしめる。
「パパは変わっちゃったんだよ。前はそんな人じゃなかったのに……」
「マルタさん。よく聞いてください」
テネブラエはそこでひと息つくと、言った。
「コアの力はただでさえ強大です。お父上の変化はそのせいかもしれません。そして、ラタトスク・コアの力はほかのものとはくらべものにならないほど強い……このまま手元に置いておくと取り返しのつかないことになるかもしれません」
「そんな……！」
「しかし、ひとり娘であるあなたがコアを持ち出せば、お父上の目も覚めるでしょう。あなたの気持ちをきっとわかってくださいます」

マルタは目を伏せ、じっと考えた。
(パパが……もとのパパに戻ってくれるなら……)
「わかった」
マルタは顔を上げ、テネブラエの声がするほうに頷いてみせた。

控え室のドアを開けたとたん、慌しい空気が流れ込んでくる。男たちの怒声(どせい)が聞こえ、マルタの肩を小突くようにしてぶつかりながら走ってゆく者もいる。
マルタは人の流れに逆らうようにブルートの執務室へ急いだ。中へ入ると、まっすぐに机の引き出しの前へ向かう。
「マルタさま?」
「っ!?」
ハッと顔を上げると、ブルートの秘書——事務的なことを実際にやっている——の男がソファの向こうに立っていた。
「び、びっくりした。ごめんなさい、誰もいないと思ったから」
「それはかまいませんが、何か?」

秘書は怪訝そうに訊ねてくる。
「ううん。あのね、薬。そう、パパの薬。持って来てって言われたの」
答えながら、マルタは引き出しを開ける。
「そうですか」
秘書はそれ以上詮索してこなかった。
(ない――!?)
引き出しの中には、書類しか入っていない。が、マルタはすぐにそれが一番下の引き出しではないことに気がついた。一段上を開けてしまったのだった。
(落ち着いて――)
自分に言い聞かせながらその下を開ける。先日と同じところに、銀色の鍵はあった。しっかりと手の中に握りこむ。
「薬、なかった。うちに置いてきちゃったみたい。……すごい騒ぎだね」
マルタはドアへ近づきながら秘書に声をかけた。
「ええ。侵入者はいないはずですが、マルタさまは安全なところにいらしてくださいね」
「ありがとう」
廊下へ出ると、D会議室へ走る。さっきよりずっと拠点の中は静かになっていた。外

に出て行った者が多いのだろう。
　鍵を開け、ドアから体を滑り込ませる。
「あ……！」
　陳列棚の一番上――前は空いていたところに、赤く輝く宝石のようなコアが収められていた。
「きれい……これがラタトスク・コア……？」
　よく見ると中になにかの紋章（もんしょう）のようなものが浮かび上がっている。
　マルタは慎重にコアをケースから取り出すと、両手でそのずっしりとした重みを確かめた。

「それです！　間違いありません！」
　裏庭の檻の中で、テネブラエが感激の声をあげた。
「あとはこれを目覚めさせればいいんだっけ。どうやるの？」
　マルタが聞くと、
「エイト・センチュリオンのコアを集め、全部孵化（ふか）させないとラタトスクさまは目覚め

ません」

　私はもうここにいますがね、とテネブラエは答えた。

「そうなんだ……。じゃあ他のコアはどこにあるの？」

「それは……」

　テネブラエが言いかけたとき、

「マルタさまを探せ！」

「そんなに遠くへは行っていないはずだ！」

　遠くから男たちの声が聞こえてきた。

「どうしよう！　私を捜してる。見つかっちゃったみたい……逃げなきゃ！」

　やはりあの秘書に疑われたのかもしれない。あわてるマルタに、テネブラエは言った。

「マルタさん。逃げるならラタトスク・コアと一緒に私を連れて行ってください」

「えっ。そんなの無理だよ。だいいち檻の鍵が……」

「もっとコアを近づけていただけますか」

「こう？」

　マルタが言われたとおりにすると、パキンと小さな音がして、檻を包んでいた青白い光が消えた。続いて檻の扉がひとりでに開く。

「すごい、手品みたい……！」

マルタは目を丸くする。
「ふう。助かりました」
悠々と出てきたセンチュリオン・テネブラエは、夜の中で闇より濃い色をしていた。
そのとき、
「あそこにいたぞ！」
「マルタさまっ！」
明かりを手にした男たちが走ってきた。
「テネブラエ、どうしよう！」
「こちらへ」
テネブラエは先に立つと、すいと裏庭の暗がりの中に消えた。

夜の街は炎に包まれていた。
人々の泣き叫ぶ声が風に乗って聞こえてくる。

のちに〝血の粛清〟と呼ばれるこの襲撃は、凄惨を極めていた。
(ひどい……これをみんなロイドたちが？)
マルタはラタトスク・コアを抱いて必死に走っていた。
なんとか拠点を脱出したものの、港の方へ逃げてくる途中でテネブラエとははぐれてしまった。
よく買い物に来る店が並んでいる通りに差しかかる。みんな逃げてしまったのだろう、あたりに人の気配はなかった。
ふいに、幼いころブルートに肩車をされてこの石畳の道を歩いたことを思い出す。隣では白い花の髪飾りをつけた母親が笑っていた。海に大きな夕陽が沈んでゆく、平和な街だった。
胸が痛くなる。息があがる……。
先ほどから背後のほうが騒がしい。ヴァンガードだ。
(私を追ってるんじゃない。きっとロイドを追跡してるんだ)
マルタは自分にそう言い聞かせ、ラタトスク・コアをしっかりと胸に抱きしめた。
ふいに、目の前に酒屋が見えた。
(いけない！　こっちに来たら行き止まりになっちゃう)
だが、もうこれ以上走れそうにない。マルタは酒場の壁に背中を押しつけ、立ち止ま

る。走り続けて火照(ほて)った体に、石の壁がひんやりとして気持ちよかった。足元からは波の音が聞こえてきた。
（どうしよう。これから……）
テネブラエは一体どこへ行ってしまったのだろう。
（パパ……もう私がラタトスク・コアを盗み出したことを聞いてるよね。私はパパを裏切ったんだ……）
そう考えると、今さらながらに自分が恐ろしくなった。
「いました！」
突然、男の声が響いた。バラバラという足音は……十人近くはいるだろう。
「捕まえろ。俺はロイドを追う！」
「はっ」
（逃げなきゃ！）
マルタはあたりを見回すと、灯台のある方向に向かって駆け出した。
「待てっ！」
マルタはすぐに路地の突き当たりに追いつめられてしまった。見慣れたヴァンガードの制服に身を包んだ男たちが、じりじりと距離を狭めてくる。
（もうダメ――！）

マルタは思わず手の中で輝いているラタトスク・コアに額を擦り寄せ、振り絞るように叫んだ。

「……助けて。助けて、ラタトスク！」

すると、まばゆい光がコアからあふれ出した。次の瞬間、

(!?)

コアの輝きが額から自分の中に入ってくるような感覚があった。マルタはそのまま意識を失った。

「大丈夫か？」

その声は、上から降ってきた。

マルタはハッと我に返る。そして自分が石畳の上に横たわっていることに気がついた。

(私、どうしちゃったんだっけ……。そうだ……すごい光が……)

左の額に違和感があった。触ってみようとすると、手のひらに赤い光が映る。光はま



るで呼吸をしているかのようにゆっくりと明滅を繰り返していた。
(なにこれ……おでこが光ってる?)
微かな呼吸の音が聞こえた。
おそるおそる視線を上げると、膝まである白衣のような服を着た少年が、マルタを見下ろしていた。金色の髪が映える白い肌が、華奢な体つきの少年に、さらに繊細そうな印象を与えている。
少年の背後にさきほどの男たちが倒れているのに気づいて、マルタは驚いた。
「キミが……助けてくれたの?」
「……」
少年は応えない。マルタを見ているのに、何も考えていないような表情だ。
そのとき、細い遠吠えが聞こえてきた。
「テネブラエの声……」
(よかった、無事みたい)
マルタは立ち上がると、いつもそうするように髪を整え、白い花の髪飾りをちょっと直す。額の違和感はほとんど消えていた。
「……行かないと」
少年の顔に表情が生まれた。急にそわそわしてマルタに背を向ける。

「待って！　キミの名前は……！」
あわてて叫んだが、少年は振り返りもせず、そのまま闇の中に消えて行ってしまった。

「同化した⁉　私がラタトスクと……？」
マルタは驚いてテネブラエに聞き返した。街外れで合流したふたりは、ひと気のない民家の陰で、はぐれてからの出来事を話していた。
「しっ。まだヴァンガードがそのへんにいるかもしれませんよ」
「ごめん」
マルタはあわてて口もとを押さえる。
「だからこそ私はラタトスクさまの気配を追うことであなたをみつけることができたのですよ、マルタさま」
「マルタ、さま？」
はい、とテネブラエは頷く。

「我が主ラタトスクさまのコアを宿したあなたさまは、もはやどこの馬の骨かわからないただのマルタさんではありません」
「そういう回りくどいことはどうでもいいんだけどさ」
マルタは自分の額を指さして訊ねた。
「くっついちゃったものは仕方ないとして、これ、どうやったらはずれるのかな?」
回りくどいと言われ、むっとしたテネブラエは、
「ラタトスクさまが目覚めれば自然に外れます。それ以外に方法はありません」
と答えた。
「じゃあ、センチュリオン・コアを集めるしかないってことだよね。でも、それをひとりでやるわけ?」
「いえ、旅には私もご一緒しますが……」
テネブラエは咳払いをした。
「なんだかご不満な顔つきですね。それよりお話に出てきた、マルタさまを助けてくださった方のことが気になるのですが……」
「どこの誰だかわからないの。名前も言わないで行っちゃったし……でも、カッコよかった～。追っ手をみんなやっつけて、私を助けてくれたんだ」
マルタが幸せそうに頬をそめるのを見て、

「ひょっとして、ラタトスクの騎士かもしれませんね」
とテネブラエは言った。
「ラタトスクの騎士？　そんな人がいるの？」
「ええ。ラタトスクを護る騎士です。騎士ならラタトスクと同化したマルタさまをいつも護ってくれるはずです」
「本当!?」
マルタの瞳が輝いた。
「どこにいるの、その人」
「さあ。センチュリオン・コアのあるところかもしれませんし、あるいはラタトスクさまを探して旅をしているのかもしれません……」
「あの人が騎士だったらいいのに。それならこっちから捜しに行くよ」
息巻くマルタに、
「マルタさまの理想の騎士は、その方なのですね」
と、テネブラエは笑った。
空が白み始めた。やがて日が昇れば、殺された人々も焼き討ちにあった家も、すべてがその無残な姿を晒(さら)すだろう。
「うん、決めた。どうせもうヴァンガードには戻れないし、この街に私の居場所はなく

なっちゃった。一緒に行こう、よろしくね」
(きっとこれは運命なんだ——ラタトスクのことも、騎士のことも)
マルタはテネブラエを見てにっこりする。
「こちらこそよろしくお願いします、マルタさま」
センチュリオン・テネブラエも満足そうな笑みを浮かべた。
燻(くすぶ)り続(つづ)ける夜の街で、マルタを見下ろしていた金色の髪の少年——。
センチュリオン・コアと一緒に、私を護ってくれる騎士をきっと探し出すんだ、とマルタは思った。

マルタがラタトスクの騎士——エミル・キャスタニエ——と再び出会ったのは、光を司るセンチュリオン・ルーメンのコアを探してルインを旅していた、半年後のことだった……。

あとがき

こんにちは、矢島（やじま）さらです。
『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-』外伝の下巻です。
上巻のアリス編に続き、今回はリヒター編、コレット編、マルタ編の三本が入っています。

リヒター編は、リヒターと親友アステルとの物語です。
ふたりがどうやって出会い、友情を築き、別れを迎えたのか。彼らはけっこうな距離を一緒に旅してもいるんですよね。ゲーム開始前のふたりの様子を書きました。

次はコレット編。
このお話は『テイルズ オブ シンフォニア』の外伝『青翠（みどり）の器』に続くワンシーンです。ロイドと一緒にエクスフィア探しの旅をしていたコレットが、途中で突然姿を消してしまった彼を待っている三日間のできごと。待っていたコレットがロイドを捜そうと決意するまでのお話です。

最後はマルタ編です。
ゲーム冒頭でマルタがエミルと出会うまでのお話。マルタはテネブラエと出会ってラタトスク・コアを盗み出すのですが……。アリス編でアリスとデクスが食べたあのクッキーも出てきます（笑）。
それぞれのお話は短いですが、ゲームには出てこなかった部分なので楽しんでいただけたらうれしいです。
上巻に引き続き、シナリオの実弥島巧（みやじまたくみ）先生には細かい設定などを教えていただきました。イラストも上巻と同じくバンダイナムコゲームスの奥村大悟（おくむらだいご）氏に大変お世話になりました。ありがとうございます。ちなみに『テイルズ オブ シンフォニア－ラタトスクの騎士－』は現在、Wii『みんなのおすすめセレクション』として好評発売中です～！
それでは、またお会いしましょうっ。

二〇一〇年四月

矢島さら

矢島さらの著作リスト

テイルズ オブ デスティニー
運命をつぐもの上下
青の記憶
蒼黒の想い上下

テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空上下
真紅の瞳　紺碧の絆
琥珀の回廊　瑠璃の夢

テイルズ オブ エターニア
永遠のきざはし全3巻
蒼天の星上下　暁の約束上下
リッドのとかげ　キールの希望

テイルズ オブ デスティニー2
蒼黒の追憶上中下
朱鷺色の風

テイルズ オブ シンフォニア
久遠の輝き全4巻
青翠の器

テイルズ オブ リバース
第一話 落日の瞬間上下
第二話 偽りの再誕上下
第三話 新たなる時代

テイルズ オブ ジ アビス
緋色の旋律上中下
真白の未来上下
黄金の祈り上下

テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-
世界の願い全3巻
果てない想い上下

テイルズ オブ ヴェスペリア
金の満月　青の天空　銀の明星

9784047265400
1920193006407
ISBN978-4-04-726540-0
C0193 ¥640E
定価 本体640円 +税
発行◯エンタープレイン

Famitsu Bunko

◎ハーフエルフという理由で、幼い頃から王立研究院で働かされていたリヒターにとって、アステルは唯一、心を開ける存在だった。が、彼はラタトスクに殺されてしまう。◎突然、姿を消したロイド。コレットは彼の帰りを待つことにするが……。◎優しかった父親の様子が変だと悩むマルタ。そんな彼女の前に、テネブラエが現れる。

外伝下巻は、リヒター、コレット、そしてマルタの、ゲームでは描かれていない物語を収録!!